
IS white symphony ~ インフィニットストラトス 白と白の交響曲 ~

翠憐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS white symphony インフィニットスト
トス 白と白の交響曲

【Nコード】

N2950V

【作者名】

翠憐

【あらすじ】

篠ノ之 東の手によって開発されたISによりパワーバランスの変わってしまった世界。

そんな中、突然現れたイレギュラー、織斑一夏が世界を揺るがす。パワーバランスの変わった不安定な世界は大いに混乱し、荒れた。

臨海学校を一週間後に控えたIS学園。そんなとき、新たな転校生が現れる。

「初めまして、雨原白奈です」

かわいい顔とは裏腹に計算し尽くされた行動に翻弄される一夏の代表候補生たち。しかしそんな彼女には秘密があり……………？

オリジナルキャラクターを中心に作者の勝手な独断と偏見、勢いで進んでいく学園バトルラブコメ！かなりオリジナル要素が強いので苦手な方は回れ右、です！

ブログ／ファーストコンタクト（前書き）

どうも初めまして。初投稿です。

まだまだ未熟なわたしですが温かく見守っていただければ幸いです。

それでは駄文ですがお楽しみください。

ブローグ/ファーストコンタクト

存在しないブローグ

エリア00 テスラ科学技術総合研究所

誰も知らない場所、エリア00。そしてその一角にあるISSの開発・設計・研究を行っている非公式の研究所『テスラ科学技術総合研究所』、通称テスラ研の敷地内。そこは非常に厳重な警備体制がしかれていた。

「ったく、なんで警備なんかしなきゃいけないんだよ」

「そりゃあお前、不審なヤツが入ってこないようにだろ」

銃で武装した警備兵が二人、正面玄関の前でしゃべっている。どうやら暇を持て余しているようだ。無精ひげの男は自分の銃、FAMASをいじって、いかにもやる気なさそうにたっている。もう一人の中年の男もやはりやる気なさそうにしゃべっている。

「不審なヤツっていつてもなく、ここの敷地内には通行書持つてないといれねえし。もし強引に入ってくるようなヤツがいたらそいつは化けモンだ」

「確かに、これだけ強固な『遮断領域』で守られちゃな。たとえISSが束になつても突破できねえよ」

「ははは、核兵器でもなんでもこいや、ってカンジだよなここの研究所」

そんなのんきな話をしていたまさにそのとき、事件は起きた。男たちの目の前が突然歪み始める。そして次の瞬間、その歪みの中心から漆黒のISSが姿を現す。

「な、どうなつてんだよ!? クソッ、おまえはとにかく司令部に連絡して『剣取りし聖者たち』^{ホーリー}を呼べ! 俺はなんとかい止めてみる

！」

「お、おう！頼むぞ！こちら正面ホール前、司令部、応答せよ！現在正体不明機より攻撃を受けており非常に危険な状態！即座に応援を派遣されたい、繰り返し！即時に応」

「ぎゃあああああああ！！」

「お、おい！しっかりしろ！っ！！う、うわあああああ！！」

この日、テスラ研、いやエリア00は始まって以来の未曾有の危機に陥った。施設の大半が大破し、多くのデータや職員の命が奪われた。

そしてこのとき確認された謎の黒いISはこのあと起こる世界各国のIS研究所襲撃事件のたびに目撃されることとなり、一時は世界を混乱させるがある時期を境に姿を消してしまう。このことからこの謎のISは『死神』というコードネームで呼ばれ、以後水面下では恐れられるようになったのだった。

プロローグ 白と白

IS学園 111教室

無駄に胸の大きい先生、確か山田先生だっけ？に言われ、教室のドアの前で私は呼ばれる待っていた。ここはIS学園。普通の高校にISの専門知識、操縦技術を養う課程を組み込んだ特別な共学校。

私は今日からここに日本代表候補生として通うことになっていた。
編入するクラスは1 - 1。世界で唯一ISを動かせる男子織斑
一夏が在籍するクラスで、3人もの代表候補生を抱えるクラスらしい。

私にとってはなかなか都合がいい。あの織斑 一夏と他国の代表
候補生が3人もいるんだ、私のスタンスを完成させる材料としては
最適な獲物だろう。

「それじゃあどうぞ」

ドアの向こうから無駄乳先生の声。私は教室に入り、教卓の前に
立つて教室を見渡す。何というかあまりパツとしない、私の最大の
標的である織斑君もどことなくやる気なさそうでダラツとしている。
なんかちよっぴり後悔……。

「日本代表候補生の雨原 白奈さんです。じゃあ自己紹介お願いします」

「はい、わかりました。今日からみなさんと一緒に生活する事となりました雨原 白奈です。年は15、趣味は読書と音楽鑑賞です。
このクラスは私以外に代表候補生の方が3人もいらつしゃると聞いたので仲良くできるといいな、って思ってます。ああ、もちろんほかのみなさんとも楽しく接していきたいです。そんなわけでみなさん、よろしく願いします」

パチパチパチ

「はい、ありがとうございました。雨原さんの席はあそこ、織斑君の後ろです」

先生に言われた席に荷物を持って移動する。その途中に織斑君のことを観察してみる。座高から予想するに身長は170前後くらい、顔は何というか平凡そう。確かにそこらへんの連中よりはいいかもしれないがそう特筆するほどではない。体つきは顔とは裏腹に結構たくましそう。さて、実力はどんなもんかしら？

席に座ると織斑先生がSHRを始める。話によると来週から臨海学校があるそうだ。水着なんて学校指定のヤツしか持ってないし、休みにでも買いに行こうかな？

「以上だ。課外活動が近いからといってあまりハメをはずしすぎるなよ。解散！」

先生の一言と同時に動き出す生徒たち。それに便乗して私も動くとしたところ、数名の女子生徒に囲まれてしまい貴重な休み時間を無駄に過ごしてしまったのだった。

(くそつ、姦しい・・・)

午前中の授業を終え、心の中でちよっぴり悪態をつきつつ机に突っ伏す私。

授業後の休み時間には必ず女子生徒(他クラスからも)がやってきて質問しまくってチャイムが鳴ると帰っていく、という現象が続き、私の計画は徐々に狂い始めていた。

本来であればなるべく早くこのクラスの代表候補生たちと織斑一夏に接触して午後の授業までに情報を集める手はずだったけどこんなことが続いたせいでほとんど情報を集められなかった。

悔やんでも仕方ない、行動あるのみ！まず食堂へ行って織斑君を探すことにする。代表候補生たちよりも話しかける口実が作りやすい・・・っていうかほかの代表候補生の顔知らないんだよね！。

周りを見渡すと窓際の席に織斑君が座っている、しかも一人で。だったらちようどいいい。

「ねえ織斑君、食事と一緒にしてもいい？」

「ん？ああ、いいぜ。って、なんで俺の名前知ってんの？ええつと・

「……」

「クスクス、雨原 白奈よ。あ、白奈って呼んでくれて構わないから。だって君、有名人じゃない」

作り笑いをしながら織斑君の前の席に座る。というかたかが数時間て人の名前を忘れるなんて……。ありえないっしょ、人として「どお、この学園は楽しい？」

「まーな。男一人つてのがたまにツラいけどそれ以外は楽しいぜ、友達もたくさんできたし」

「そっか、それはなにより。そうだ！今日の放課後とかってさ、予定開いてる？」

「ああ、大丈夫だ」

「じゃあさ、ちょっと学園の中を案内してくれない？まだよくわからないからさ」

「わかった。つていつでも俺もまだ全部は覚えきってないからな」
「いいいいいよ、大まかな説明でも」

再度情報を引き出す口実を作りつつ、なかなかいい具合に話が進む。ひとまずは好印象になったかな？さてそれじゃあ、ここからは本題といきますか。

「そういえばさ織斑君、専用機持ちだったよね？」

「そうだけど、それがどうかしたか？」

「ちよーつとでいいからさ、機体の性能とか特性とか教えてほしいんだけど……。いいかな？ほら、織斑君のISの情報って規制されてる部分が多いじゃん。私さ、そういうの好きなんだ」

好き、っていうのは嘘じゃないけど。まあ何にしろ彼のIS、白式の情報は開発元の倉持技研が情報公開を拒否しており、どこを探してもでてこない。だからこればかりは搭乗者本人に聞かなければわからない。

「そうなのか。うーん、特性、か……。特性かどうかはわかんないけど一番目立つのは燃費の悪さだろうな」

「燃費の悪さ？」

「おう。まあきつとこれは白式のせいじゃなくて武器と単一仕様能力の『零落白夜』のせいだと思う」

「え！もう単一仕様能力発動してるの！？」

「ああ、というかそういう仕様になってるらしいんだ。一番の悩みどころは武器が雪片しかないってことかな。おかげで格闘戦しかできないんだよ」

「そうなんだ・・・」

大まかにはわかってきたぞ。白式は戦闘能力こそ高いものの多くの欠点がつきまとういわば欠陥機らしい。要するに近接戦では手の着けられないほどの戦闘力を発揮するがほかの行動に制限が付き、距離が離れると極端に弱くなる、ってわけだ。雪片ってあれだよ、織斑先生が乗ってた機体に装備されてた刀型のブレードだよ？そういうや単一仕様能力は零落白夜っていったな、だとするとかなりヤバイ、もうちょい情報集めしないと。

「ありがとう、優しいんだね織斑君は」

「いや、そんなことないよ」

ちよつときこちないかんじで笑いかける織斑君。ふん、笑うと結構かつこいいじゃん、これならほかの女子が騒ぐのも無理ないか。」「じゃあそろそろ行くね。ほんとにありがとう、また授業でね」

「お、おう！」

どうだ、必殺悩殺スマイル！全身全霊の作り笑いを彼に投げかけると頬を赤らめ、ちよつとうわずった声で答えてくれる。ふっふふ、これで反応しなかったヤツは1人以外知らない！

食器をカウンターに返して教室に戻ってさつき得た情報をまとめる作業を始めるのだった。

ブログ／ファーストコンタクト（後書き）

どうでしたか？もし楽しんでいただけたのなら幸いです。

誤字・脱字などがありましたら連絡お願いします。

1日1話为目标に投稿していきたいです

キャラクター設定（前書き）

1 日一話を目標に、といいつつ初日から実現できなかった……

なので今日は2つ投稿します。
徐々に増やしていく予定です。

キャラクター設定

オリキャラ設定

名前 雨原 白奈

性別 女

年齢 15

容姿 Fateのセイバーと桜を足して2で割ったカンジ、スタイルはいいが胸は標準

性格 かなりの二面性。初対面の人間には優等生的な面を見せるが裏ではものすごく腹黒い。ただ、以外と世話焼きで困っている人がいると助けてしまう（自分が陥れた人以外）。勝つために相手の情報を集めてこつこつと作戦を練ったり、毎日のトレーニングを書かさなかつたりと努力家の面もある。

趣味 読書、音楽鑑賞

特技 情報収集、挑発、猫かぶり、運転（種類問わず）

専用機 白鉄

制服 一夏と同じようなズボン

初登場 プロローグ

名前 太刀花 陸

性別 男

年齢 26

容姿 頭文字Dの高橋 涼介の目をもうつちよつとぱっちりさせたカンジ。長身で髪をうなじあたりで縛っている

性格 常に冷静でどんな時でも客観的な指示が下せる。ただ欠点といえは自慢癖があり、短気で怒りっぽく、口が悪いこと。ただ根の部分は優しく仲間思いなのだが不器用なためうまく伝えられない。

戸籍上、白奈の兄兼保護者ということになっている。

趣味 読書、車いじり

特技 並列処理、高速演算、銃の操作、剣術

専用機 なし

服装 上下黒のスーツ（年中無休）

初登場 第4話

名前 佐原 桁人

性別 男

年齢 ？

容姿 ぼさぼさの短い髪に黒ぶち眼鏡。猫背、目の下にクマが常にある

性格 とにかく消極的で自分から人前に姿を現さない。常に研究室にこもって開発や設計、お遊びなどをしている。ただ陸と白奈だけには普通に会ってくれる。研究意欲だけは豊富で思いついたらコスト度外視でなんでも作ってしまう。とにかく天才。

趣味 開発、設計、ハッキング

特技 開発、設計、ハッキング、コピー

専用機 なし

服装 ダサ私服の上によれよれの白衣

初登場 第4話

名前 レイ・レナード

性別 男

年齢 24

容姿 青い瞳に長い銀髪と長身。中性的な顔

性格 はつきりいつて性悪。いつも笑顔で何を考えているかわからないが常に何手も先をよんでいる、らしい。

趣味 チェス

特技 ナイフ操術、高速演算

服装 黒いズボンに白いブラウス、そこに黒いトレンチコート

初登場 第11話

名前 花村 実沙紀

性別 女

年齢 25

容姿 長い黒髪、長身でモデル体形、童顔。

性格 生真面目なせいで気がきく。いつもサボってばかりいる陸の尻を叩いて仕事させたりしりぬぐいしたりと非常に苦勞が多い残念な感じになりつつある。そのため隊員からの信頼は厚く、陸の意不在時には隊の全権を任されるほど。みんなのよいお姉さんの存在。

趣味 家事一般、料理

特技 料理、射撃

服装 カーキ色の士官服

初登場 第12話

名前 倉沢 司

性別 男

年齢 16

容姿 黒いツンツン頭。結構イケメン

性格 隠れ熱血。普段は冷静なふりをしているがいざというときはかなり熱い。実沙紀次ぐ隊内の良識人で常にツッコミ役を買って出ているためかいろいろといじられることが多い。白奈の幼馴染。

趣味 読書、機械いじり、釣り

特技 掃除、ツッコミ、サボタージュ

服装 迷彩服かIS学園の制服

初登場 第12話

名前 小野崎 静音

性別 女

年齢 18

容姿 色素の薄い黒髪（茶髪）、大人びた顔立ち、胸は残念

性格 常に冷静。隊内随一の通信士で唯一の第一級通信士の資格を持っている。年齢は司より上なのだが自衛隊の歴でいうと司の方が先輩なので基本敬語である。隊の中ではアイドル的な存在だが、周りと胸が残念なことを指摘するとはばらく口をきいてくれないだとか子供っぽい一面も。とは言え周りが大きいだけで決して小さいわけではないそうだ（本人談）。

趣味 絵を描く、散歩

特技 ハッキング、電子機器操作

服装 藍色の通信士官服

初登場 第12話

名前 雨原 黒華

性別 女

年齢 25

容姿 白奈にそっくりだがすごいロングヘア

性空 白奈とは正反対で常に落ち着いている。しかし根っこの部分では一緒。

趣味 運転、機械いじり

特技 戦略ゲーム全般、高速演算

服装 いつも私服なのではっきりしないが必ず上が黒で下が白

初登場 第12話

IS設定

オリIS設定

・白鉄

試作型第四世代相当IS

開発元 佐原科学技術研究所

待機形態 雪の結晶の形をした髪飾り

武装

・双炎I不知火/雲龍

短銃身の白い二丁拳銃。名称は違えど性能は同じ。回転弾倉式で54口径弾とBTカートリッジ弾に対応した万能短銃。最大6発まで装填可能。

初登場 第1話

・淡雪

白鉄専用の近接戦用ブレード。傘下の研究所である倉持技研が開発した、暮桜が装備していた唯一の武器である雪片の形状を踏襲し、さらに洗練した雪片の強化形態。エネルギーをチャージする事で威力を上げることができ、最大まで溜めると刀身の排熱口から白い光が漏れだし、まるで雪を纏っているように見えるためこの銘がつけられた。

初登場 第1話

・白天白夜

白鉄専用の狙撃装備。和弓の形をしておりレーザーで弦を作り、エネルギーを纏った籠手で引く。矢は自分自身のバリアーエネルギーを犠牲に作り出すため威力はスナイパーライフルを遙かに上回り直

撃を食らえばどんなISでも撃墜は確実といわれ、弾速は発射から1km地点まで1秒未満で到達する事が試験運用の時に確認されているため実質発射されたら回避は不可能とされている地上最強の射撃兵器。しかしエネルギーのチャージまでに5分ほどかかる上、1回しか撃てない（エネルギー100%時で）ので白鉄単体での使用はほぼ不可能。

普段はスラスターとして背部に収納されている。

初登場 第4話

・輻射波動障壁機関

バージョンアップされた白鉄に追加された自動防御機能。超高周波数の波動を周囲に放出させることで周囲の物を分子レベルで結合を分解し、本体を守る。ただしエネルギー消費が激しいため連続使用は難しい。

初登場 第4話

・月詠壺式

白鉄に新たに装備された近接ブレード。試作型の輻射波動兵器で一回しか使えない上に約10秒という制限時間付きではあるが能力はお墨付き。当たればまさに一撃必殺の威力を生み出す。

初登場 第8話

・輻射波動機構

白鉄専用パッケージ『紅月』の唯一の武器。右手が巨大なクローになり、クランクシャフトによる伸縮が可能なためある程度（1〜2m）まで届く。エネルギーは独立しており、内蔵式のコンデンサーとなっている。

設定

篠ノ之 束の再来と呼ばれたヒキコモリで根暗の天才佐原 祐人

博士が打鉄をベースに開発した試作型の第四世代相当I.S。

彼が開発した搭乗者の思考を機体にフィードバックさせ、機体のポテンシャルをフルに引き出す特殊な素材『精神金属』を全身の基本フレームに採用した『精神骨格』を搭載した初の機体。最大稼働時には各所外部装甲が冷却のためにスライドし、骨格が赤く発光しているのが見える。

武装もすべて彼が手がけたもので最高レベルにまとまっている。しかしまだ試作段階なので不具合や未完成な部分などもある。

・ガレス

???

開発元 ???

待機形態 なし

武装

・試作型ハドロン砲

両腕に搭載されているガレスの主兵装。普段は円錐形のカバーで覆われている。放熱効率の問題で一度打ったら3分は撃てない。

・ホーミングレーザー

全身に装備されている特殊兵器。ロックした目標は射程距離ぎりぎりまで追いかける。これもハドロン粒子が使用されており、命中時の威力はなかなか高い。

設定

どこからともなく現れた所属不明のアンノウン。スペックは第三世代機とあまり変わらないが防御力と攻撃力だけは飛びぬけている。無人機でAIを積んでいるが知能は低い。現在の技術では開発不可能なものがいくつも搭載されている。現在は破壊され、佐原科学技

術研究所の地下ラボに保管され、研究材料とされている。

・グラム

第3世代相当IS

開発元 エンジェルコマンダー技術部

待機形態 剣の形をしたブローチ

武装

・グラム

最新の技術を集めた対IS用の大剣。相手に命中すると装甲が開き、そこから強力な重力波を発生させる。重力波を発生させることで相手のP.I.Cを一時的だが無力化させ、効率的にダメージをあたえることができる。広い面積を利用してシールドとしても機能する。

設定

エンジェルコマンダーが開発した試作型対IS用ISの近接戦闘仕様。魔剣の名を与えられ、巨大な大剣のみを装備した完全に特化した機体となっている。

そのほかにも振動装甲というダメージ軽減能力も備わっており、甲龍を苦戦に追い込むほどの戦闘能力を発揮したが死神の駆るリリオブバレイの前ではそれも通用しなかった。記録ではここでコアが破壊され、パイロットは死亡している。

・ヤタガラス

第3世代相当IS

開発元 エンジェルコマンダー技術部

待機形態 弾丸の形をした髪飾り

武装

・ヤタガラス

グラム同様の最新技術をつぎ込んで作られた一対の実弾ライフル。

弾丸には特殊な加工が施されており、ある程度のエネルギーを無効果し、貫通させることができる。

・イチイバル

強力な陽電子砲を搭載した巨大なビット。至近距離であれば確実に絶対防御を発動させられるだけの威力を発揮するが電子の拡散率が高く、射程が延びれば延びるほど威力は低くなっていく。

設定

エンジェルコマンダーが開発した試作型対IS用ISの中・遠距離戦闘仕様。バリアを突破することのできる武装を装備し、どんな状況でも優位に立てることを主眼に置いて開発された。初陣ではブルーティアーズ、白式の2機を相手に大健闘、大きなダメージを与え撃破寸前まで追い込んだ。グラム同様振動装甲が装備されている。

・リリーオブバレイ

???

開発元 雨原 黒華によるフルスクラッチ

待機形態 黒い百合の形をしたピアス

武装

・ステイレット

リリーオブバレイの主武装。AP弾に高エネルギーのバリアを纏わせることで貫通力が高まり、銃身と一体化したトリガーのおかげで高い精度を誇る。高い連射性能を有し、通常のISであれば簡単に撃破できる。

・ディストーションフィールド

いわゆる遮断領域のこと。これを単体で発動させられるISはリリーオブバレイのみ。非常に強固なためアイディア次第では攻撃にも転用できる。

・フルアーマー『ブラックサレナ』
リリーオブバレイのパッケージの一つで高機動化、高防御化をする
装備。肩に装備されたディストーションフィールド強化・増幅機に
脚部のアーマーに内蔵された大型スラスターが最大の特徴。

設定

ホーリー時代に持ち出したコアを黒華が独自の理論をもとに4年か
けて組み上げたフルスクラッチ機。デフォルトではこれといって性
能が飛びぬけているわけではないが特筆する点はパッケージ『ブラ
ックサレナ』を装備した時のその防御力と運動性である。鉄壁の防
御力を発揮するディストーションフィールドに脚部に内蔵された大
型スラスターに加え、黒華自身の特殊能力『空間跳躍^{ジャンプ}』によりどん
なISよりもトリッキーな戦闘が仕掛けられる。

・アルビオン

第四世代相当IS

開発元 佐原科学技術研究所（といっても陸と桁人のフルスクラッ
チ）

待機形態 白い剣形のストラップ

武装

・アロンドイト

アルビオンの固定装備。バスロットに二本、背部コンデンサー側面
に二本、計四本装備している。エネルギーを流し込むことで特殊合
金で作られた刃が超振動を起こし、非常に強力な切断能力を得るこ
とができる。

・スラッシュハーケン

腕、腰に装備されている牽引機。相手の牽制にもつかえる

・エナジーウイング

コンデンサー側面、アロンドイトの後ろに装備されたPICに頼らない新しい飛行装備。高圧縮したエネルギー粒子から生まれる力場を利用し、揚力を得る。そして移動の際にはそのエネルギーを爆発させ、推力を作り出す。それ以外にも発生したエネルギーを固形化させ広範囲攻撃にも転用できる。

設定

佐原科技研が開発した最新型IS。エナジーウイングなどに使用する莫大なエネルギーを賄うため背部に特殊なエンジンを搭載した今までにない構造をしている。現在研究がすすめられ、武装などの開発がすすめられている。

余談だが一部の噂でアラスカに落下した超大型隕石『メテオ3』から得られたオーバーテクノロジーが使われているとか。

用語集（前書き）

話が進むにつれ、増やしていくよていです

用語集

オリ用語設定

・佐原 衍人

突然現れた篠ノ之 束に匹敵する天才。しかし根暗でヒキコモリで一切人前にでることはない。白鉄の開発者。

・精神金属

佐原博士が開発した新素材。開発した本人ですら詳細は一切不明と言っているだがISの基本フレームなどの一部に使用されており、ISへの思考伝達速度を早めてくれる。

・BTカートリッジ

佐原科技研で開発されたBTレーザーを圧縮し弾丸化したもの。白鉄の装備に試験的に搭載されている。

・エリア00

この世界のどこかに存在するIS研究の最先端をいく総合研究所。

・遮断領域

特殊な防御障壁。バリアーなんかよりずっと強力だが設計技術は一部にしか出回っていない。

・剣取りし聖者 ホーリー

どこの国家にも所属しない謎の武装集団。大国ですら顔色をうかがうほどの戦力を保有しており、ISのコアを自己生産できるとまで噂されている。各地で起きる紛争や戦争の火種をなくすため暗躍し

ている。

・死神

数年前に姿を現し、突然消えてしまった謎のIS。全身装甲鎧型でフルアーモータイフ中に人が乗っているのかどうかすら不明。現代のISを大幅に上回る機動力・防御力を持っている。

・白鉄

佐原博士が開発した試作型第四世代IS。精神骨格などといった最新技術と博士の頭脳をフルに使って制作されたコスト度外視の規格外のIS。表向きは第三世代とされている。

・輻射波動

電子レンジの中で発生しているマイクロ波がさらに高周波になったもののこと。現在佐原研究所では、この高周波を短いサイクルで対象物に直接照射することで、膨大な熱量を発生させて爆発・膨張等を引き起こすという特性を生かし、新型のIS用装備の開発に着手している。

・ハドロン粒子兵器

今まで使われていなかった重粒子『ハドロン』を利用した兵器。現在の技術では粒子加速器の小型化が出来ないため机上の空論でしかない。佐原科学技術研究所で開発が進んでいる。

・天使の軍隊
エンジェルコマンド

詳細不明の私設武装組織。戦力は大きくないが、技術は剣取りし聖者並みとされている。
ホーリ

・超越せし者
イノベーター

人間の新たな可能性を切り開いた新たな人種のこと。現在研究が進

められているものの何一つわかっていないらしいが人工的に発現させられる条件はわかったよう。純粋種と人工種の二種類に別れ、現在確認されている純粋種は全世界で一人。人工種はイノベイドと呼ばれている。

第1話 / 出会いは硝煙のなかで

第1話 / 出会いは硝煙のなかで

「よし、集まったな。今日は専用機持ち同士の模擬戦を行った後に班に分かれて基本動作の確認を行う。異論はないな？」

『はい！』

第二グラウンドに集まった1組と2組のメンバーたち。それと織斑先生に無駄乳の山田先生。

模擬戦とは好都合、映像でしか見られなかった情報を生で見られるのだから。ん、あれ？代表候補生同士ってことは私も入ってるってこと？

「そうだな．．．．．オルコットと、雨原！今日はおまえたちがやれ」

はい、ご指名きました。てかオルコットさん？ってどこの代表候補生だったわけ？イギリス？

「わかりましたわ。それで雨原さん、いくら編入早々だからといっても容赦はしませんわよ？」

前にでてきた金髪の女子。うゝん、西洋人か。てかプライドとか高そうだな、それに胸大きすぎないか？．．．よし、倒そう。

「いえいえそんな、手加減なんかされたら1分とかからず落としてしまいそうですから。それでは楽しくないでしょ、お互い？」

「なっ！？じ、自信たっぷりですよですね、そんな大口たたいてもよろしくて？」

「はい、軽い運動程度に考えてますから」

「お、おほほほほ。終わった後に後悔なさらないでくださいね？」

「そのセリフ、そっくりそのままお返しします」

いや、楽しいね。プライドの高い奴をおちよくって挑発するの。さてどう料理してやるう？相手の機体は確か第三世代ISのブルーティアーズだったよな。中・長距離が得意で正直一番やっかいな主力兵器で機体の名前にもなってる特殊機動兵装『ブルーティアーズ』が6つ、BTレーザーを利用した試作型ライフル『スターライトmk-?』が一本。あとはロクに使われない近接ブレードがあるだけ。腕次第だけど倒せない相手じゃない、いける。

「雨原、早くISを展開しろ。オルコットはすでに終わってるぞ」
向こうを見ると確かにオルコットさんはISを展開し終わっていた。おっとこりゃヤバイ、あんまり遅くなると出席簿が飛んでくる。意識を集中し、鎧を纏うイメージをする。

(いくよ、白鉄!!)

次の瞬間、真っ白の光に包まれて目の前が見えなくなっただかと思ふとハイパーセンサーやその他機器からの情報が流れ込み、視力・聴力が回復する。

「まさか、それがあなたの専用機だなんておっしゃりませんよね？」
オープンチャネルでオルコットさんの声が届く。ふふふ、やっぱり見た目が打鉄だからってナメってるみたいだな。

「いいえ、この子が私の愛機『白鉄』よ。さ、始めましょ？」

『試合開始!!』

スピーカーから放たれた開始を告げる織斑先生の声。それと同時にオルコットさんが後ろに下がっていく。さて、まずは様子見つてところかな？

「一撃で撃墜なんてことは、ありませんわよね!!」
スターライトmk-?から放たれた青いレーザーが迫る。弾速は上の下つてところ、ラクシヨに回避できる。それからも連続でこちらを狙ってくるレーザーを回避しながらオルコットさんに近づいていく。弾道の予測をしてその間にラインを立て、最小限の減速だ

けで移動。

『ふん、言うだけのことはあるようですわね。それでは、そろそろ本気でやらせていただきますわ!!』

「あれ? いままで手を抜いていたと? てっきり本気だったと思ってたんですけど・・・」

『なっ……! いつまでその減らず口が続くか見物ですわ!』

おっと! さつきよりも射撃が鋭くなったな。っていつの間にかブルーティアーズが展開されてるし!

四方八方から打ち込まれるレーザーを紙一重で回避しながらどうするかプランを計画する。ひとまずビットがうざいからまずはそれをたたき落とそう。それから本体をおちよくって撃破、ってカンジかな?

『くっ、ちょこまかと小賢しい!』

「じゃあそろそろ反撃といきますか!」

手のひらに意識を集め、双炎をコールする。弾丸は通常弾ノーマルでいいや。

飛び回るビットが射撃体勢に入り、とまった一瞬の間を見計らって撃つ。重厚な炸裂音とともに放たれた弾丸は見事ビットを貫き、撃破した。

「まず1つ!」

次に左右に飛来した二つのビットに狙いを付け、射撃。そのまま瞬間加速イグニッションブーストと淡雪のコールを同時に行い、目の前を飛んでいた最後のビットを切り落とす。

「これで4つ! さあ、後がないよ!!」

『まだですわ!!』

これまたスターライトmk-?を連射してくるオルコットさん。すでに弾道予測はしてあるので当たることはない。バカだなあ、いくら撃つても当たる分けないのに。胸にばかり栄養やってるからだよ。

「無駄無駄! そんなに撃つてるとエネルギーなくなっちゃうよ!」

『な、何であたりませんの!?!』

「弾丸だろうとレーザーだろうと結局はまっすぐしか進まないんだからちよつと頭を使えば避けるのなんて簡単。ほらほらどうしたのオルコットさん? 機体のスペックでいったらブルーティアーズの方が上のはずだよ?」

瞬時加速を利用してブルーティアーズを射程内にとらえる。淡雪はすでにエネルギーチャージができており、白い光を纏っている。このあたりでファイナーレかな?

「これで終わりです!」

『甘いすわ!』

「ッ!」

突然死角から現れた二つのミサイルビット。気づいたときにはすでに遅く、ミサイルが放たれていた。しかしハイパーセンサーを駆使して何とか逃げ道を確保し、いったんオルコットさんから離れる。いやー危ない危ない、今のはさすがにビビった。でも奇襲を使わなきゃいけないほどに追いつめられてるってことだよな。

エネルギー残量 51%

よし、十分。これで終わりだ!

「さあ舞いなさい! 淡雪!」

私の言葉に往古するように輝きを増す淡雪。瞬時加速を連続で使

イグニッションブースト

用し、一気に距離を積める。

『くっ!』

「無駄あ! ここはもう私の距離だ!」

苦し紛れに近接ブレードを展開し、淡雪を受け止めようとするもののそれを難なく弾きとばしてまず一太刀浴びせる。振り抜き、素早く後ろを振り向いてもう一太刀。必殺 飛燕返し。

ビー!

『終了だ。降りてこい』

試合終了のブザーが鳴り、模擬戦が終了した。もちろん私の勝ちで。

「く、屈辱ですわ……！まさか一撃も当てられないなんて……！」

あゝ、気分いいな。悔しがる顔見るのって。何度やってもこの気分は飽きない。どうしてもにやにやを押さえられないんだよね。
「……………雨原さん、この借りはいずれお返しますから」

「ええ、いつでもどうぞ。お待ちしています」

「フン！」

安っぽい捨て台詞を残してオルコットさんは列に戻っていった。

それから織斑先生の指示に従い、私たち代表候補生を中心に4つの班を作ってほかの生徒たちの基本動作の練習を行った。みんななかなか上手でスムーズに動いていたので私から教えることはなにもなし！というか私、教えんの下手だし。そんなわけで「上手だね」とか「いいよ」と褒めるだけしかしてなかったら背後からいきなり出席簿が頭をおそった。

спан！

「馬鹿者。世辞ばかり言っていないでしっかりと指導せんか」

「……………褒めて伸ばす教育方針なんです」

спан！

「話をするときは顔を見る」

「はい……………」

「それと、褒めて伸ばすな。叩いて伸ばせ」

二度も叩くことないだろ、確かに目をそらしたけど。それと叩いて伸ばせ、って餅かよ！……ゲフンゲフン！（涙）

とにかく、これ以上叩かれるのはカンベンなわけなのでしっかり指導してみたんだけどやっぱりみんななかなかうまい。細かいところの指摘はあるけど大まかなところはバッチリできている。さすがは織斑先生、教官の名は伊達じゃない。

「おい雨原、ちょっといいか？」

「はい？なんですか？」

「おまえの班はなかなか順調のようだからデュノアの班を手伝ってやれ。問題児がいるからすすみが遅いようだ」

「問題児？」

ズドン！！

グラウンドに大穴が開いた。いやどちらかというとクレーターか？何にしるとにかく穴が開いたのだ。その中心には原因を作った問題児がいた。

「織斑君、ですか？」

「ああ、あれはまだISに乗って日が浅い。せめてグラウンドに穴が開かないようにしてやってくれ。あと開けた穴は今日中に埋めるように伝える」

「……わかりました」

正直不本意だったけど織斑君を指導してるデュノアさんがあまりにもかわいそうだったので手伝ってあげることになった。

近くにいつてみると開いている穴が意外に大きいこととそれを開けた織斑君がどれだけバカなのがわかった。

「織斑先生に言われて手伝いにきたんだけど……デュノアさん、今なにやってたの？」

「雨原さん、今ね地面から10cmのところを目標に瞬間停止をやってるんだけど……」

「で、失敗して大穴開けたってわけ。苦勞してるわね」

「あ、わかる？」

「「はあ」」

「おい、二人とも、なにため息ついてんだ？」

「「一夏（織斑君）が下手すぎて困ってるだけ」」

確か瞬間停止はISを動かす上での基礎中の基礎のはずだ。イメージとタイミングさえつかめれば10cmだろうと1cmだろうと関係なくできる。目標より高いところで止まってるのは何度も見たことはあるけど地面に穴を開けるヤツは始めてみた。

「てか何で雨原がいるんだ？」

「織斑先生が「問題児がいるから手伝ってこい」っていつからきたのよ問題児さん。あと開けた穴は自分で埋めろって」

「あう、ツライな」

「と、とにかく後が詰まってるから一夏はまた放課後にでも練習しよ、ね？」

「おう、スマン。いつも迷惑かけて」

「い、いいよ別に。その、い、ー」

「あ、じゃあ今日、自主練しよ。私もつきあうから」

「おお！ありがとな雨原！じゃあさっそく今日の放課後から・・・
・ってシャル？なに怒ってんだ？」

「ふん、しらない。一夏のばか」

私が自主練を手伝うといったらデュノアさんが機嫌を悪くしたようだ。見る限り、デュノアさんは織斑君に好意をよせていて二人っきりの時間を作ろうとしたけど私に邪魔され、機嫌を悪くしたってカンジ？悪いことしちゃったかな？

キンコーンカーンコーン

「それじゃあまた放課後ね。場所決まったら教えてね。あ、あと穴埋めがんばってね」

「お、おう。またな」

チャイムが鳴り響き、今日の授業は終了した。いつになく充実したカンジの一日を過ごせたんじゃないかと思える。学校の案内はなくなっただけ自主練か、なかなか楽しみだな。

第1話／出会いは硝煙のなかで（後書き）

どうだったでしょうか？

さっそくバトルシーンを書いてみました。もし楽しんでいただけたのならよかったです。

さて、明日から部活の合宿なので今度は8月初めに投稿します。ご容赦下さい（ノ、）…

第2話／自主練は乙女の戦場（前書き）

ただ今戻りましたw

本当は昨日帰ってきていたんですけど疲れて寝てしまい投稿できませんでした（涙）
ではどうぞ。

第2話 / 自主練は乙女の戦場

第2話 自主練は乙女の戦場

side 白奈

「な、何で雨原さんがいらっしやいますの!？」

午後6時の第3アリーナ。そこには私を含めた1組の代表候補生4人プラス1と2組の小さい代表候補生が1人、計6人が集まっていた。そしてそのなかでただ1人騒ぎまくるオルコットさん。

「いや、それはこっちのセリフなんだけど」

「シャルロットさんに誘われてきてみればみなさんいらっしやいますし! まあラウラさんや篤さん、鈴さんはまだ許せます、いつもいらっしやいましたから! ですが、なぜ貴女が!！」

「あーはいはい、ちよつとは静かにしない?」

「えと、あのねセシリア、この自主練は白奈が企画したんだよ」

「な!？そ、それを先にいつてください!」

あーうるさいうるさい、少し黙れイギリス人。まあ彼女のプライドからするとついさっき惨敗した相手と顔を合わせるのはつらいのだろつ。そうだ、この際ちようどいい、シャルロットの事はさっき着替えの時に教えてもらったからのほかのみんなの情報も収集しておこつ。

「あのさー、ちよつといいかな? 実はさ私、シャルロット以外のみんなの名前とかよく知らないから教えてほしいんだけど……いかな?」

「ん、構わないわよ。じゃあアタシから。凰 鈴音、2組のクラス代表で中国の代表候補生よ。みんなからは鈴、ってよばれてるからよろしくね」

「篠ノ之 箒だ。クラス代表でも代表候補生でもないが一夏の幼なじみだ。今後ともよろしく頼む。下の名前で呼んでくれて構わないぞ」

「ふん、イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですね。次は負けませんわよ」

「ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。なかなかの腕前だな日本代表候補生、いずれ手合わせを頼む」

「ええ、こちらこそ頼むわ。さて、雨原 白奈です。日本代表候補生やってます。あんまり堅苦しいの嫌いだから名前で呼んでくれるとうれしいなっと思ってます」

一通り自己紹介を終えたちょうどそのとき、穴埋めを終えてISスーツに着替えた織斑君がやってきた。

「おうみんな、悪いな俺のためにつきあってくれて」「まったく、遅いわよ」

「時間にルーズな方は嫌われますわよ？」

「そうだ！もつと時間を大切にすべきだ」

「うん、一夏はちよつと適當すぎるよ」

「ああ、それは同感だ。その根性は一からたたき直してやるうか？」

「し、仕方ないだろ！穴埋めてたんだから」

『自業自得！』

非難轟々（私は参加してない）の織斑君。そりゃそうだ、集合時間からすでに5分も過ぎてる。いくらそいう方向に興味のない私だって女の子を待たせるのは男としてどうかと思う。

「まあまあみんな時間も押してるわけだしさ、早いとこ練習しよ。きつと織斑君後で何か奢ってくれると思うから」

「おい、白奈！俺はそんなこと一言も」

「へえゝ女の子6人も待たせとお詫びもないと？」

「い、いやそいう訳じゃ……」

「薄情だなゝ、そんな器の小さい男だと思わなかったよゝ」

「だ、だから！」

「男なら四の五の言うなー！！」

「はいすいませんでした！後で何か奢らせていただきます！」

ふっ、勝った。まあ初めてだしジューズ代くらいでカンベンしてあげよう。

それからアリーナの中心に移動して本題である優秀な先生5人＋私による織斑君改造（？）計画が始まった。最初は授業でできなかった瞬間停止の練習からだ。最初にセシリアが実演して説明するも織斑君はさっぱりの様子。理由は何となくわかるけど。

なんというかセシリアの説明は理詰めってカンジで織斑君にはあわなそうだ。かといって鈴や箒の感覚だけの説明もわからないようだ。うーん、不思議なヤツだな。

「うっ、どうしようか？」

「いっそのこと崖から叩き落としてみてはどうだ？」

「ラウラ、それあんまり意味ないと思うよ。織斑君、なにがわからないの？」

「上に向かうタイミングがわからないんだ、どうしても動くこうと思つた瞬間、地面に落ちちまうんだ」

「それはさ、体でGを感じきれてないんじゃないかな？Gキャンセラーのレベルとかいじってたりする？」

「いや、そのまんまだけど」

「じゃあ今度はGキャンセラーのレベルを2つくらい下げてやってみて。全身の力を抜いて、全神経を研ぎ澄ませて。警告音が鳴る直前で体を捻ってGを感じた瞬間に上に行くイメージで！」

「おう、わかった。やってみる」

まさか内部設定をいじってないなんて・・・それじゃあ出来ないわけだ。第一体である程度のGが感じられなければこれは絶対に出来ない。特に最近の高性能なISだとGキャンセラーやその他内蔵機能の性能がよすぎてむしろ細かい精密な動きをするとき邪魔になっってしまうケースがある。そういう点においてみると内蔵機能の少ない第二世代ISが今も現役で活躍している理由もうなずける。

さて、今度は成功するかな？

side 一夏

白奈のアドバイス通りGキャンセラーのレベルを2つ下げてもう一度飛び立つ。上昇するときにはいつもは感じなかった押さえつけられるような感覚を体中に感じられるようになった。これがG、か。ある程度のところで停止して全身の力を抜いてリラックスする。さて、やってみるか！ 浮かぶイメージを消した途端、俺と白式は自由落下を開始する。ほんの数秒で墜落を警告するアラームが頭の中に響きわたる。その瞬間に体を上に捻ると上昇したときに感じた押しつけられる感覚、Gを全身で受け、一気に上にあがるイメージをすると――――止まった。地面に衝突する前に止まることが出来た。

「や、やった！止まった！」

「ほー、一発成功か。なかなかセンスいいじゃん。とはいえまだもうちょっと詰められるから後は練習あるのみだね」

「ああ、ありがとな白奈。おまえのおかげだよ」

「まったく！出来るのなら最初からやれ」

「そうよ、こんなに懇切丁寧に教えてあげたのに！」

「一夏さんはもうちょっと根本的なところから勉強し直すべきですわ」

あの、俺が悪いの？『ふわつとして、くいっ』とか『がーっ！びゅーん！』だとかという擬音と訳の分からない理論ばっか並べられた謎の説明でわかる人物はごく少数だろう。

それから白奈の指導の元、練習を続けて何とか瞬間停止を身につけることができた。

「今日はみんなありがとな、これで今後穴埋めしなくて済みそうだし」
「当然ですわ！このセシリア・オルコットが教えて差し上げたので

すから！またこのようなことがありましたら今度はふた」

「まあまた何かあったら声をかけてくれ。幼なじみとして手伝ってやる」

「あら？幼なじみだったら代表候補生の方がいいんじゃないかしら？とにかく何かあったら言いなさい」

「気にしないでいいよ、僕も楽しかったし。またやろうね」

「あまり気にするな。私の嫁なのだからいつでももつきあってやるぞ」

「ああもう！みなさん、まだ私の話の途中ですわよ！？」

『何のこと（だ）？』

なんなんだこの一体感？セシリア以外のみんなの連携がいつも以上に強い。って白奈なんかあきれ顔してるし・・・うん、わらん。

「ま、まあまあみんな。そろそろ時間も遅いし戻ろうよ、ご飯食べられないよ」

それから何とかその場を白奈が納め、着替えるために俺らはピストへ向かった。

side 白奈

更衣室に戻り、みんな着替え始める。さっきのやりとりからするとここにいるみんなはまさかまさかなのかもしれない。とにかく確信はないので黙ってはいるけど・・・それはそれであれな状況なので彼も結構苦労しているだろうけど・・・さっきのやりとりをみて首を傾げたところを見るとみんなは今後彼よりも苦労しそうだ。

「ねえ白奈、あんた、一夏のことどう思う？」

「え？いいやつだと思っけ」

「違う違う、そうじゃなくて。その、見た目とか、さ」

「見た目えー？そうね、そのへんの連中なんかよりはいいんじゃない？なんか根性ありそうだし」

「そ、そっか。ありがとね！」

それだけをいって鈴はシャワー室に駆け込んでいった。はあ、これで鈴は確定。ったく、どいつもこいつも恋、恋って……どうせ私には男運なんてありませんよーだ！私はタオルとシャンプー類を抱えてシャワー室へ向かった。

（数十分後）

「もうー！セシリアは抜け駆けしすぎだよ！」

「そ、そんなつもりはありませんわ！ただちよつと一夏さんと」

「それを抜け駆けというんだ。正々堂々やるうとは思わないのか？」

「箒さんまで……」

シャワー室から戻ってくると先にあがったみんながなにか話していた。そうだ、やっぱり織斑君との関係が気になるから思い切って聞いてみよう。

「あのさーみんな、もしかして織斑君のこと好きなの？」

「……」

ああ、やっぱり。質問した瞬間、全員の手が止まった。色恋沙汰に現を抜かすなよ、代表候補生。

「まさか全員片思い？」

「……」

「なのいろいろアプローチしても鈍感で全く気づいてくれない？」

「……」

「……苦労してるのね」

「はあ……」

「まあ頑張つて、応援はしてるから」

何というかまー、あれのどこがいいのか？私がみんなと同じ状況だったらあんな唐変木、たぶんこっち振ってる。わかんないなー。

とりあえずみんなよりも一足早く着替え、更衣室からでる。初日にしてはなかなか有意義に過ごせただろう。授業ではイギリスの代表候補生であるセシリアを撃破、自主練では白式と甲竜の動くところをみられた。これで鈴音戦は問題ないはず、あとはドイツのシュヴァルツアレーゲン、ラファール・リヴァイブのカスタム型を観察できればきつと勝てる。織斑君の白式だって油断さえしなければいける。そうすれば――――

そこで考えるのをやめる。今更そんなことを考えたところで無駄なんだ。あの人たちは私を捨て、姿を消した。あの人たちにとって私は必要なかった、今更存在を示したところでお姉ちゃんだって……。そこまで考えて、それもやめる。

（同じことで何年悩んだと思ってるんだ、いい加減忘れる！あの人たちはもういない、いないんだ！お姉ちゃんを探す手掛かりだってもうない！）

そう自分に言い聞かせ、顔を上げる。すると視界が歪んでいた、どうやらいつの間にか泣いていたらしい。こんな顔を見られるのも癪なので手近なトイレに駆け込み、顔を洗う。鏡を見ると、強引に洗ったせいで乱れた髪と水で濡れ、化粧の落ちた顔が写った。

（ああ、ひどい顔……）

ガッンッ！

思いつ切り壁を殴る。壁と接している小指がジンジンと鈍い痛みを発しているけどそんなこと関係ない。今一瞬、昔のことを思い出しそうになった、いわゆるトラウマってヤツ。

何とか心の奥底に押しとどめ、少し安心。外にでるには少々顔や髪があれなのでそれをきれいに整え、なるべく人に見られないようにこそこそしながら部屋に戻るのだった。

第2話／自主練は乙女の戦場（後書き）

どうだつてでしょうか？今回の話は私の勝手な解釈がかなり含まれています。わかりづらいところがございましたらご連絡いただければ幸いです。

いやー、合宿楽しかった……。来年は受験勉強で大変なんだろうな。最近になって遊びも本気でやらなきゃダメだつて気付きました……。ただ時すでに遅し……。

…あとの約一年をエンジョイしたいです。

誤字・脱字の報告、ご感想などお待ちしております。それではまた明日。

第3話／休日は騒音とともに

第3話／休日は騒音とともに

side 夏

いつも通りの休日。そんなわけでやることもないので今日は一日中部屋にすることに。え？出かけないのかって？いやだって買い物はこの間シャルと一緒に行ったしやりたいこともないからわざわざ貴重な休日が無駄に過ごしたくないので部屋でごろごろするのだ。以外と俺、インドア派だぜ？

ピンポン

来客を告げるチャイム。こんな早い時間に誰だ？

「はい、どうぞ」

「ああ織斑君、今暇？」

ドアを開けるとそこには私服姿の白奈。上は少し裾の長いシャツ、下は黒いパンツルック。夏だっていうのに暑くないのか？

「暇だけど、なんだよ？」

「これから買い物に行くんだけど、ちょっと付き合ってくれない？」

「まあ構わないけど。何で俺なんだ？確か鈴が暇だとか言ってたけど」

「実はさー、男友達の誕生日が近いんだけどね。私、男の子の好みとかよくわからないからプレゼント選び手伝ってほしいんだけどいいかな？」

「ああそういうことね、わかった。今から行くのか？」

「うん。個人的な買い物したいしね。じゃあ車回してくるから校門のところで待ってて」

「おお、つて車？」

俺の疑問に答えることなく行ってしまう白奈。仕方なく私服に着替えて部屋を出る。途中でのほほんさんなどクラスの女子何人かと会ったので出かける理由を深く追求される前に簡単にあしらって校門まで移動する。幸いなことに箒や鈴、セシリアには会わなかった。この格好で会うと面倒なことになりかねないしな。ちなみにシャルとラウラは出かけているそうだ。

少し待っていると向こうの方から一台の車がこっちに向かってくる。見る限りかなり古い車みたいだ。四角いボディに白と黒のツートーンカラー、そしてなぜかヘッドライトがついていない。そして極めつけは排気音。これがまた異常にデカい、マフラーがくっついてないんじゃないかってくらいにデカい。いくら車に詳しくない俺だってマフラーが排気音を小さくするためのサイレンサーだってことくらいは知っているぞ。

「お待たせ。さ、乗って」

「お、おお。てかおまえ、免許持ってるのか？」

「うん持つてるよ。国際A級ライセンス、あと3年有効だよ」

「ならいいけど。あとこの車、いつの時代の車だよ？この排気音は公害問題になるぞ。だいたいマフラーついてんのか？」

「つ、ついてます！この間エアクリナー新品に変えたからこんなになっちゃったの！マフラーだって浮竹商会の細いヤツだし、ボンネットだって今日は純正品に変えてきたんだから！というかエンジンがレース用のものだから仕方ないんだよ！」

「はあ！？レース用だって！おまえ、街乗り用の車になんてもの積んでるんだよ！？」

「お願いだから深く追求しないで！いろいろあったんだから！」

てなわけでするさい旧車でドライブが始まる。最初はちよつと後悔してたけど、乗ってみるとあることに気づく。

「この車って揺れないな」

「当たり前よ、しっかりその辺調整してるから」

「ふーん」

なんかよくわからなかったけど、とにかくいじつてるということだけはわかった。それ以上聞いてもきつと訳の分らないところまで行きそうだからおとなしく窓の外の景色を眺めていることに。

それから20分弱で目的のショッピングモールへ到着。休日ということもあつて駐車場は見渡す限りの車で埋め尽くされており、探しに探し回りやつの思いで駐車スペースを見つけることが出来た。いやーしかし暑い。え、なぜ？理由は簡単、車が古すぎてエアコンの性能が悪いからだ。この太陽が一番元気な季節にエアコンがロクに利かない車っていうのは一言で説明するならばいわば凶器、もしくは拷問具といったところだ。気休め程度にしか利かないエアコンつけて、窓締め切りにしてその中に数十分いてみる、脱水症状は必至だ。そんなわけで俺たちはまず水分補給の為に自動販売機でスポーツドリンク（ポリ）を買ってから目的のプレゼント選びに向かった。

side 白奈

まずプレゼントを買う前に自分の用事である臨海学校の準備をすることにした。

さすがに臨海学校に行つてまで下着とブラウスで寝るわけにはいかないのです。まずパジャマを買うことに。3階にある女性用衣類売場にはまだ午前中だというのにたくさんの人でにぎわっていた。

ちよつとまつて、と織斑君に断つて、いくつかを試着してみる。結局10分ほど悩んだ末に白地に青のチェックに決めた。あ、ついでに下着もいくつか買っておこうかな？そう思つて適当にブラとショーツをかごに放り込む。それから会計を済ませて水着コーナーへ。え？織斑君は？もちろん一緒に決まつてるじゃない。（悪意ある笑

顔)

いくつかの水着を見て回って、候補を白のビキニと水色のワンピースタイプの二つに絞る。

「ねえ織斑君？どっちがいいと思う？」

「え！？」

完全な不意打ち。元々気恥ずかしそうにしていたのでちよつとからかってやろうと思ったんだけど、予想以上に利いたらしい。顔を赤くして選んでいる姿を見ているとどうしても笑いがこみ上げてくる。選んでくれている間はその笑いをこらえるのが精一杯で言葉でからかうことが出来なかったのが残念。

「こ、こっちの白の方がいいんじゃないか？」

「そう、ありがと」

ということとで白のビキニを購入。それから下の階にあるフードコートでお昼を食べて、本題であるプレゼント選びへ向かった。

服とかハンカチを見て回ったものの、あいつには到底似合いそうにないのでパス。仕方なく少し高く付くことを覚悟し、5階にあるアクセサリーコーナーへ向かう。指輪やピアスは論外なのでネックレスや時計をみるがなんかいまいちパッとしない、というかピントとこない。本当は自分で選んだものを織斑君にどうか見てもらおうと思っていたのに結局選べず仕舞い。……まあ、男係の話全般は苦手ですから。

「ねえ織斑君、織斑君だったら誕生日にどんなのもらったらうれしい？」

「え？うーん、俺は気持ちさがもったものならどんなものでもうれしいけど」

いやー今時の男にしちゃ人間できてるねー、おねーさん感動したよ、あーハイハイ。

ある意味一番そうというのが困る。人間ってのは個人差はあるけどどんなことも少なからず深読み生き物。その言葉は結局仮初めで裏では「ほかのがよかった」とか「この程度か」とか思ってるんじゃない

ないかって考えてしまう。え？私だけ？素直じゃない？いやあ、そんな分けないよ。

「ごめん、私の言い方が悪かったわ。じゃあこのなかから選んで」「あー、じゃあこれ、かな？」

織斑君が指したのはショーケースの一番端にあるシンプルなクロノグラフ。値段もそんなに高くなかったのでこれに決定。

「すいません、これください」

「かしこまりました、プレゼント用に包装いたしますか？」

「お願いします。ーあ、すいません、これもひとつ。こっちは普通に包装してください」

ちよつと、というか予想よりかなり高く付いたが無事にプレゼントを買えたのでよしとしよう。あいつ、喜んでくれるかな？

side 一夏

買い物を終えた俺たちはまた白奈の車に乗ってIS学園に向かっていた。すでに6時を回っていて、日は傾きはじめて街は朱色に染まっている。運転席に座る白奈はなにか満ち足りたような顔でゆっくりと車を走らせていた。話の話題も見つからなかったから会話することなく校門の前へついてしまった。

「車おいてくるからここで降りたほうがいいよ、ちよつと距離あるから」

「おう。今日はありがとな」

「いーえこちらこそ。付き合ってくれてありがとね。これ、お礼」
そういつて運転席から小さな紙袋が飛んでくる。危つく落としかけるものの、なんとかキャッチに成功。

「ちよ、白奈、これは」

「じゃ、また明日ね」

そういうと車はすぐに走り去ってしまった。どうにもすぐに戻ってくる様子はなさそうなので仕方なく部屋に戻ることに。

まずもらったお礼をテーブルの上に置き、シャワーをあびて部屋に着替える。それからテーブルに座ってもらった袋を開けてみると中に高級そうな箱が一つ。そしてその中にはシルバーの腕時計が入っていた。よく見ると端の方に値札がついてて白奈がプレゼント用に買ったものよりは安いけど一日付き合ってくれたお礼で渡すものにしては高い。これをハイといって素直にもらうわけにはいかないな、今度返そう。

side 白奈

駐車場から戻った私はまず、プレゼントに添える手紙を書き始めた。ある程度書き終えたところでシャワーを浴びて、買った水着を着てみることにした。実際のところ織斑君に選んでもらったとはいえ、かなりその場の空気に流された、要するに本命だったのはもう一つの方だった。

裸になって鏡の前に立ってみる。友人たちからはスタイルがいい、言われているのでそこそこ自信はある。しかし、どうしても胸ばかりは付いてこないせいで最近アンバランスになってきた。とはいえ、その胸だって別に小さいって訳ではない。むしろ標準よりもちよっと大きい位なんだけど。というかセシリアとか篝とかが大きすぎるだけ。シャルロットや私は標準もしくはそれ以上でラウラと鈴は………とりあえず触れないでおこう。

（あ、改めて自分の体を見るってかなり恥ずかしいな……／＼）

とにかく手っとり早く水着を着てみるが、これがまた意外と露出

度が高い。しかも上も下も紐で止めるタイプで上なんて胸を少し隠すくらいしか布がない。

（お、織斑君って以外とムツツリ？）

この格好でいつまでもいるのは精神的にも肉体的にもつらいのでさっさと着替え、ベッドに横になって今後についてのことを考え始めるのだった。

第3話／休日は騒音とともに（後書き）

どうもこんばんわ。今日は頭文字D A Aで羽が生えました。（分かる人いますか？）

最近よく午後眠くなります。寝不足なんでしょう？おかげで小説のほうがかどらない……………なので今日は早めに寝ることにします。

次回から臨海学校編に突入します。

誤字・脱字、感想などがございましたらご連絡ください。では、また明日。

第4話／次なる出会い、そして決意

第4話／次なる出会い、そして決意

side 白奈

「あ！海だ！」

バスに揺られて数時間、窓の外は空と海。日差しを浴びてきらきらと輝く水平線、雲一つない快晴。あーくそう、夏真っ盛りで反吐が出る。

ついさっきまで静かだったバスの中は海が見えたとたん騒がしくなった。おかげでいい気持ちで寝てたのに意識は一瞬で現実に引き戻されてしまった。どうせこれから3日間腐るほど見ることになるんだ、わざわざ今見る必要はない。寝よう。

しかし目を閉じようとしたそのとき、騒がしさの波は私のところまで到達してしまった。

「ねえねえ白奈、海だよ海！キレイだね」

「そ、そうだね」

「ほら！あれ見て、あれ！すごい」

（なんでこんなテンション高いんだか・・・塩水の水たまりがそんなに珍しい？）

まさかとは思うけど、このテンションのまま3日間も過ごすんだっただと思うと頭が痛くなる。ちらりと織斑君のほうを見るとむこうもいつものメンバーと楽しくやっているようだ。手首を見るとこの間プレゼントした時計が光っている。よかった、気に入ってくれたみたい。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

騒がしさが頂点に達した頃を見計らい、織斑先生が釘を差す。いやーさすが、わかっていらつしやる。その言葉の通り、程なくしてバスは一軒の旅館の前に停車した。

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

『よろしくおねがいします』

それから女将さんからの挨拶と着替え場所を教えてもらい、生徒たちが散っていく。私もその波に乗って別館に行き、手つとり早く着替えを済ませ数人の女子と一緒に砂浜に出る。と、そこであることに気づく。

（あ！いけない、日焼け止め部屋においてきちゃった）

「あれ？どうしたの白奈？」

「ゴメーン、日焼け止め忘れちゃったから先行つてて！」

一言断り、別館で制服を羽織つて（下もちゃんとはいてる）自分の部屋へ向かった。その途中で箒と織斑君とばったりで食わず。なにしてんのかな？

「なあ、これってー」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

「二人ともどうしたの？こんなところで」

「あ、白奈か。あのさ、これなんだと思う？」

「なにつて、ウサギの耳、でしょ？」

織斑君が指す先には一対の長い耳、いわゆるウサミミが地面から生えており、あまつさえ『引つ張ってください』とまで書いてある。本物の訳、ないよね？……まさか！このあたりの地域にはこんな植物が自生しているの！？……まさかね。

二人の顔色を伺つてみるとどうやら正体は何なのかを知っているようだ。

「とりあえずさー引つ張つてみたら？」

「そう、だな………抜くぞ？」

「好きにしろ、私には関係ない」

おやおや、どうやら箒は機嫌が悪いらしいね。なにがあつたか知らないけど少なくとも織斑君関係じゃなさそうだ、そしてそのまま別館の方へ歩いて行つてしまった。どうしたんだろう？

残つた織斑君がその耳を思い切り引つ張るとまさに、すぽつ、という効果音が似合いそうなくらいすんなりと地中から姿を現す。当然無駄に力を込めて引き抜いたせいで織斑君は盛大に尻餅を付くことになった。

「いつてててて……」

「もーう、なにやつてるのよ」

「仕方ないだろ」

「それにしても、何も起きない、ね」

「そうだな。というかしろー」

キイイイイン……。

どこからともなく物体が高速移動しているときに発せられる空気の層を切り裂く音が。しかもだんだん近づいてる！？

しかし、気づいたときには時すでに遅し。間一髪でよけられたが目の前には巨大な――

「に、にんじん……？」

が突き立っていた。当然本物の訳はなく何というかイラストタッチなカンジにデフォルメされたデザインをしている。何、これ？

「あつはつはつ！引つかかったね、いっくん！」

さらに目の前ににんじんが真つ二つに割れ、中から笑う変な人が出てきた。え？どこが变かつて？まず巨大にんじんの中から出てくる時点で普通じゃない、さらに服装。童話で有名な不思議の国の某の主役の少女がきているような（あれはディズニーが作ったものでリアルは違うらしい）青と白のワンピース。どこの勘違いコスプレイヤーだ？

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

日本の領空だったらアメリカ軍が自衛隊だろう。というか学習するんだったら飛ばないで現れようよ、というかにんじんのほうが撃墜される確率デカいと思うけど。あ、ウサミミつけた。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいつくん、篝ちゃんはどこかな？さつきまで一緒だったよね？トイレ？」

束って、あの希代の天才篠ノ之 束？いやー、相変わらず天才の所行って紙一重だね。ウチのドクターもこんなカンジの変人だし。ってことは篝は彼女を避けて行っちゃったのかな？まあ避けるのもわかるわ、天才とはいえこんな変人じゃな。

「ん？君は・・・どっかでみたことあるな・・・会ったことある？」

「い、いえ。初対面ですけど・・・」

「・・・あ！思い出したー！君、雨原 白奈でしょ？ゆつきーのところの秘蔵っ子」

「はあ？ゆつきー？確かに私は雨原 白奈ですけど・・・秘蔵っ子って？」

「やー、まさかこんなところで出会えるなんて。ちょーっと解剖していい？」

「丁重にお断りさせていただきますー！」

ダメだ、これ以上この人につき合つてるとヤバそうだ。もちろん私の体と白鉄が、だ。そんなわけで残りを織斑君に任せ、私は当初の目的である日焼け止めをとり再度歩き出すのだった。

ある程度の仕事を終え、私は海へ行くために水着を持って別館を目指していた。そんなとき、旅館の外の駐車場から聞き覚えのあるうるさいある音。やっときたか、あのバカ。

外に出ると思ったとおりの白いスポーツカー、確かRX-7とかいうやつだったな。

「おい、陸！もつと静かにできんのか！」

「仕方ないだろ、ワイドレシオ化してきたんだから。マフラーも必然的に抜けがよいものになる」

「知らん！とにかくエンジンを止めんか」

「へいへい」

ぼやきながらエンジンを止め、運転席から出てくる黒いスーツを着た青年。彼は太刀花 陸、内閣府、特に防衛省のIS部門関係の部署に身を置く日本でのIS運用にもつとも関わってるやつだ。

「せっかくの再会だっていうのにいきなり怒鳴るなよ」

「だったらもつと静かにしろ。・・・まあなんだ、元気そうだな」

「そっちこそ、変わりなさそうだな。そっいえば例の弟君とウチのバカ娘はどうした？」

「言っただろ、今日は丸々一日自由時間だ。実習関係は明日からだ」

「そうだったな。ていうか桁人、早くしろ！置いてくぞ」

「あんまり急かさないうでくれ、ボクが急な運動は苦手なことくらい知ってるだろ」

助手席のドアが開いてヨレヨレの白衣を着て、大きな機材を抱えたメガネ男が出てくる。この男、見覚えがあるな。

足取りはふらふらして今にも倒れそう、それに目の下にはクマができておりみるからに不健康そうな容貌だ。

「はじめましてだね、織斑 千冬さん。ボクは佐原 桁人、明日もよろしくね」

「は、はい。よろしく願います」

正直言って予想もしていなかった。まさか、失礼だがあんなだしらない格好のヤツが束と並ぶ天才佐原 桁人だったなんて。話した感じは束よりもまともだが人間的な観点から見ると束の方が勝っているだろう。

「おーい、俺らの部屋ってどこだ？」

「……案内するから少し待ってろ」

はあ、海に行く前の仕事がまた一つ増えてしまった……。

side 一夏

一通り遊んで、少し疲れたからその辺にあったちようどいい岩の上に座っていた。ちよつと離れたところではシャルたちが遊んでいる。はあ、みんな元気だな。

「何そんなところで黄昏てんの？」

「白奈、どうしたんだ？」

後ろを振り向くと、そこには薄手のパーカーを羽織った水着姿の白奈が立っていた。

「あのさ、オウム返ししてどうすんの？みんなの中にいなかったから探してたのよ、ちよつと話したくてさ。隣いい？」

「ああ、いいぜ」

岩の上はあんまり広くないので白奈が座るとなるとどうしても密着せざるをえない。ちよつと気まずいな。

「ねえ織斑君、最近がんばってるみたいだけど……なんでそんなにがんばってるの？」

「あー、なんつーかな。仲間を、みんなを守りたい、からかな。ちよつと前にな、ある事件があつてさ、俺もその場所において、まあ正直いって本当は手出しすんなって言われてただけだけど。どうしてもほうつておけなくてさ、結局手だして解決したんだけど俺の力不足でみんなに心配かけっちゃってさ、だから」

「じゃあ何？まさか正義の味方にでもなりたいの？」

「まさか。世界を守るヒーロー、正義の味方なんかじゃなくていい、ただ俺の周りにいるみんな、篝やセシリア、鈴、シャルにラウラ、千冬姉、山田先生、それにおまえ。もちろんクラスのみんなもだ。全部守るなんて俺なんかにはできない、だから、せめてこの手の届くところにいる大切な人たちだけは、守りたい」

「冷たいこというみたいで悪いけど、いまのあなたの實力じゃ守るというより守られる側よ？」

「わかってる。だから今は出来るだけ強くなりたいたいんだ」

「そっかあ……………」

そういつて白奈は空を見上げ、黙ってしまった。なんか悲しげな目で膝を抱えている。なんか悪いこと言ったかな？

話の話題も無くなったしまったのでそのまま黙りしてしままだったが、しばらくしてあたりが暗くなってきたことに気づく。そっぴやそろそろ夕食だな。

「あ、ところでさ、なんでいきなりそんなこと聞いたんだ？」

「理由はないよ、聞いたかっただけ。それとあんまりがんばり過ぎちゃ駄目だからね、あなたにはたくさん頼れる仲間がいるんだから、そろそろご飯でしょ、先に戻ってるから。じゃあね」

「ああ、わかった。俺はもうちょっとここにいろわ」

白奈が岩から降りて旅館のほうに戻っていくのを確認してから座りなおし、日が暮れた空を眺める。薄暗くなつた空に流れる朱色に染まつた雲、ゆらゆらと飛ぶ海鳥たち。さつきは勢いであんな臭いこといつちやつけどそれが本心であることには変わりない。いままで俺はずっと守られる側だった、だからもう誰にも迷惑をかけないくらいには強くなりたい、だからこそ今はがんばらないと。そう、暮れる夕空に向かって密かに決意を固めるのだった。

第4話／次なる出会い、そして決意（後書き）

こんばんわ。自分で書いておきながら展開が妙に速くなっているように感じてます。

さて、どうでもいい私ごとですが今日から頭文字D A Aでハチゴ
ー・ハチロク祭りが始まりました。私もF T - 8 6で参加する予定です。

誤字・脱字、感想などがありましたらご連絡ください。次回は戦闘シーンを入れる予定です。

第5話／戦の予感（前書き）

おはようございます。練習試合と審査会が重なってしまい、投稿が遅れてしまいました。

ではどうぞ。

第5話／戦の予感

第5話／戦の予感

side 白奈

臨海学校の2日目。実習のため私たちはISスーツに着替え、海岸に集まっていた。

「さて、これから実習を始めるのだが……。その前に皆に紹介しておきたい人物がいる。本来であれば関係者以外立ち入り禁止なのだが学園の方の意向で呼び出した外部講師がいらつしやっている。くれぐれも迷惑をかけないように。ではどうぞ」

織斑先生が言い終わると隣に立っていたスーツの男と白衣の男が織斑先生と立ち位置を交換する。……あれ？2人とも無性に見覚えがあるんだけど……？

「えー、みなさん初めまして。俺の名前は太刀花 陸、IS運用統括官兼自衛隊第4独立機動中隊専任教導官兼佐原総合科学技術研究所第1開発班チーフをやってます。適当に見て回ってるから何かあったら声かけてくれ……。っておい桁人、お前もなんかしゃべれ」

「……えー、面倒くさいな。もう、君だけでいいだろ。はあ、ボクの名前は佐原 桁人、科学者やってます。これでいいかい？」

「それは生徒たちに聞け」

やっぱりあの2人が……。相変わらずだな。あのユルい感じ。というかお兄ちゃんの肩書きまたふえてるし。なんて懐かしさに浸っていると周りがざわついてることに気づく。

（ねえねえ、男なのに教官ってどういうこと？）

（なんか肩書きおおくない？）

（あれが噂の佐原博士？なんか引きもりかノートにしか見えなくい）
（あの肩書きが多い人、すぐカツコよくない？私好み）

「ええい！黙らんかバカども！！これ以上騒ぐのなら全員ここから50km先の無人島まで泳がせるぞ！！」

おお、これはヤバい。あの人はやる、っていったら必ずやるからな。そんなことになったら絶対何人が帰ってこられないだろう。もちろんIS学園に、だ。そんなわけで一斉に静かになる生徒一同。

「まったく……さて、これから各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はい、という一同の返事で散らばっていく生徒たち。私はみんなと別れて桁人さんとお兄ちゃんのところに向かった。

「よっ、元気そうだなバカ娘」

「だれがバカ娘よ、そっちも変わらないみたいだね。桁人さん、お久しぶりです。またクマ濃くなりましたね」

「やあ、久しぶり。背、伸びたね、さすがは成長期だよ。1年会わないだけでこんなに違うなんて」

「ふう、無駄話はこれくらいにしてそろそろ始めようぜ。桁人、頼むわ」

「了解。じゃあ白奈、白鉄を展開して」

言われるがまま、白鉄を呼び出して装着する。最近のコツがつかめて完全展開までに1秒かかるかからないかまでに短縮できた。いやー、努力のたまものだね。

なんてことを考えてるうちに桁人さんは作業を終え、空中に浮かぶディスプレイパネルとにらめっこしていた。

「ふうん、まあまずまずだね。精神骨格の稼働率は49%、成長具合は第3期に入るか入らないかってところかな？どうする陸、どこまでくつつける？」

「そうだな、アレはもうちょつと先送りにして白天白夜と輻射波動

障壁機関に全体的な底上げだけでいいんじゃないか」

「そうだね、わかった。白奈、少し時間かかるけどじっとしててね」
「えっと、何するんですか？」

「白鉄のバージョンアップさ」

その言葉の次の瞬間、視界が真っ黒になる。ハイパーセンサーからの情報が途切れたのだ。それからしばらくして目の前に赤い文字がいくつもでてきたが一つも読めなかった。さらにそれから数分、それでやっと視界が戻る。これで終わりか。

バージョンアップされた機体情報を検索すると総合的な性能の底上げと追加装備を見つける。一つは盾のような装備で腕と足のアーマーに装着されているみたいだ、もう一つは狙撃用の特殊装備、白天夜ってヤツみたいだけど今はロックがかかっている。

「あの桁人さん、白天白夜ってヤツにロックがかかっているんですけど？」

「ああ、それはしょうがないよ。まだ試作段階の装備で欠陥が多くてさ、エネルギー効率に問題があって白鉄本体のエネルギーが100%のときしか使えないようにしてあるんだ」

「せっかくバージョンアップしたんだしな、一回試してみたらどうだ？」

そんなときだった。遠くから砂煙をあげてこっちになにかが向かってくる。しかも結構な速度で。

「ちーちゃ~~~~~~~~ん!!!!」

「東.....」

織斑先生とお兄ちゃんが見事にハモる。どうやら二人ともあの不思議な天才さんと接点があるみたいだ。というかこの臨海学校、部外者立ち入り禁止って言ってなかったっけ？

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめー！ーぶへっ」

飛びかかってきた篠ノ之博士に容赦ない本気のアイアンクロー。指、食い込んでるし.....。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦ないアイアンクローだねっ。というかりつくんも着てたんだ？ってことはゆっきーも……」

「くっ……！そのあだ名で呼ぶなクソバカ！」

「その呼び方は、ちよつと受け取れないな篠ノ之 束」

そこにいた大人全員から集中砲火を浴びる篠ノ之博士。しかし当の本人はそんなこと気にもとめず、今度は織斑先生と話してた篝のほうにむき直る。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、篝ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言っただあ……。し、しかも日本刀の鞘で叩かれた！ひどい！篝ちゃんひどい！」

「切られなかっただけマシじゃないか？」

「……それはいえてる」

「そうだな、私だったら間違いなく八つ裂きにしてるところだ」

「み、みんなまで……！」

そのまま地面にorzの形になってしまふ。なんか、本格的にへこんだらしいね、とはいえさっきの調子からすればすぐに復活するだろうけど。

「というか束、この行事は関係者以外参加禁止なんだが」

「んん？珍妙奇天烈なことを言うね、りつくん。ISの関係者とういなら、一番はこの私をおいてほかにいないよ？」

「いや、そうじゃなくて……。ああもつつ！面倒くせえヤツだなお前は！」

お兄ちゃんの注意も完全無視、こりゃあ今回は荒れそうだな。

side 一夏

見つかると面倒事に巻き込まれそうだったので俺はちょっと離れたところからあの4人のやりとりを見ていた。まさか束さんが俺と第、千冬姉以外の人間とまともに会話するなんて……。

「それで、頼んでおいたものは……？」

躊躇いがちに第がそう尋ねる。それを聞いて、束さんの目がキラインと光った。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！！」

びしつと直上を指さす束さん。その言葉にしたがって第も、そして他の生徒たちも空を見上げる」。

ズーンッ！！

「のわっ！？」

いきなり、いきなりである。激しい衝撃を伴って、なにやら金属の塊が砂浜に落下してきた。

銀色のそれは、次の瞬間正面らしき壁がばたりと倒れてその中身を俺たちに見せる。そこにあったのは――

「じゃじゃーん！これぞ第ちゃん専用機こと『紅椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

真紅の装甲に身を包んだその機体は、束さんの言葉に応えるかのように動作アームによって外へとでてくる。

新品のISだからだろうか、太陽の光を反射する赤い装甲がとてもまぶしい。――って、束さんさっきなんかとんでもないこと

をさらりと言わなかったか？

「東、今何だった？俺は全スペックが現行ISを上回るって聞こえたんだが・・・間違いないよな？」

「そうだよつくん。この子はスペック上では世界最強の機体ってことになるよ。すごいっしょ？すごいっしょ！」

「バカタレが・・・怒る気も失せたわ・・・」

「まあそんなことは置いて、篤ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！私が補佐するからすぐ終わるよん」

「・・・それでは、頼みます」

「堅いよ。実の姉妹なんだし、もっとこうキャッチーな呼び方でー」

「はやく、はじめましょう」

とりつく島もないとはこのことか。篤は東さんの言葉に取り合わずに行動を促す。うゝん、相変わらず二人の仲はよくないな。二人が不仲（というか篤が一方的にいやがっている）になったのは東さんがISを発表してから出来事からきてるらしい。もう何年も前のことなんだからいい加減水に流してもいいとも運だけだな。まあ俺からすれば些細なことに思えるけど本人たちにとっては重要なことなのかもしれないから口出しするつもりはない。

「お、いたいた。おい、織斑弟、ちよつといいか？」

そんなことを考えてたら少し離れたところで太刀花さんが呼んでいることに気づいた。

「はい、何ですか？」

「白式のシステム解析をさせてほしいんだけど、時間あるか？」

「えゝつと、俺はいいですけど研究所のほうがなんていうか・・・」

「問題ないよ、倉持技研はウチの傘下にある研究所だ。文句は言わせないよ」

そんなわけで俺は白式を展開した。佐原博士が端末のコードを装

甲に刺すと、周りに空中投影のディスプレイがいくつもでてきた。

「うーん、不思議なフラグメントマップを構築してるね。何とか、不揃い……?」

「これって束がいじった機体だろ? 原因はあいつなんじゃないか」

「その可能性はないね。いくら開発者のあれだって意図してこんな複雑で奇怪な成長を促すなんて、あり得ない」

「だったらしゃーなしだな。そうだ、武器のほうもみたいんだけど、いいか?」

「後は好きにしてくれ。ボクは引つ込むから」

「へーい」

そして佐原博士はそのままどこかに消えてしまった。さっきの話の内容からすると白式は普通のISとは違うらしい。もちろんそれはこいつを受け取った時からわかってたことだけど、どうやら根本的に何かが違うらしい。

「へえ、見たことのない技術だな。なあ、データのコピー取らせてもらうけどいいか?」

「あ、はい。ところで、太刀花さんの仕事って具体的になにしてるんですか?」

「ん? 仕事か? そんなに難しく考える必要はねえよ。IS運用統括官つてのは日本にあるISの管理や配分、外国からきたISの記録だとか研究所の動きを統制したり……まあ簡単に言うと今日のIS事情に一番詳しいのは俺だ。後は説明しなくてもいいか? 教官やら開発班のチーフやらはだろ。あ、あとできれば上の名前で呼んでほしいんだけど、名字で呼ばれるのってなんか苦手だ」

「ああ、はいわかりました」

それから他愛もない会話をしながら時間は過ぎていった。陸さんと分かれて自分の班に戻ると向こうの方では第も紅椿の調整・テストも終わつたらしい。ちよつと見たかったけど一步遅かった。あれ? セシリアがなんかへこんでるけど、何かあったのか? とはいえ今下手に声をかけると八つ当たりされそうなので理由を聞くのは後で

にしよう。俺は白式を解除して他の人の手伝いをしていたそのとき、事件は起こった。

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

いきなりの山田先生の声に、千冬姉だけならず陸さんまで振り向いた。いつも慌てている山田先生だが、それにしても今回はその様子が尋常じゃない。

「おいおいちよつと落ち着け」

「どうした？」

「こ、こつ、これをつ！」

渡された小型端末の、その画面を見て千冬姉と陸さんの表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「防衛省認可のものか、俺んとこ通せつて。それで、原因は？」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていたー」

「しっ！声がデカい、生徒たちに聞こえるぞ」

「す、すみませんっ……」

「それで山田先生、専用機持ちは？」

「ひとり欠席していますが、それ以外は」

なにやら、千冬姉と山田先生、陸さんは小さな声でやり取りしている。しかも、数人の生徒の視線に気づいてか、会話ではなくなると手話でやり取りを始めた。

（う？普通の手話じゃない……。もしかして、軍関係の暗号手話だろうか）

昔、千冬姉が日本代表だった時に数回だけみたことがあるものに、それは似ているような気がした。

「そ、それでは、私はほかの先生たちにも連絡してきますのでっ」

「仕方ねえ、桁人たたき起して中隊と連携とってみるわ。ここは頼むぜ」

「了解した。――全員、注目！」

山田先生と陸さんが走り去った後、千冬姉は手を叩いて生徒全員

を振り向かせる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各版、ISを片づけて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……………」

「ちゅ、中止？何で？特殊任務行動って……………」

「状況がぜんぜんわかんないんだけど……………」

不測の事態に、女子一同はざわざわと騒がしくなる。しかしそれを、千冬姉の声が一喝した。

「とつと戻れ！以後、許可なく室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「……………は、はいっ……………」

全員が慌てて動き始める。接続していたテスト装備を解除、ISを起動終了させてカートに乗せる。その姿は今までに見たことのない怒号に怯えているかのようであった。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデイヴィツヒ、凰……………」それと、篠ノ之もこい」

「はい！」

妙に気合いの入った返事をしたのは、いましがた俺の隣に降りてきた箒だった。……………そうか、箒もこれで専用機持ちになったんだよな。

（でも、大丈夫なのか……………？）

なぜだか俺はそんな不安に駆られて1人、胸騒ぎを覚えるのだった。

第5話／戦の予感（後書き）

どうですか？

戦闘シーンを入れると前回予告したにも関わらず区切りがいいので次回に回させていただきます。ごめんなさいorz次回こそ戦闘シーンいれます

この間あった審査会で忤段とれました。練習試合でもなかなかいい結果をだせたので小説のほうも頑張っていきたいです。

誤字・脱字などがありましたら連絡お願いします。

第6話／『強さ』とは 前編（前書き）

どうも、こんばんわ。お盆ですね、ちょうど部活も塾も休みなのがんばって書いていきたいと思います。
では、どうぞ

第6話 / 『強さ』とは 前編

第6話 / 『強さ』とは 前編

side 陸

千冬たちと別れ、俺は急ぎ足で自分の部屋へ向かっていた。早いところ中隊の方に連絡して協力を取り付けないと、今回ののはちよつとヤバイ。

ハワイ沖で試験稼働中だったアメリカ・イスラエル製の新型IS『銀の福音』、これが何者かによってハッキングされ制御不能に陥って現在暴走中、あと数時間後にこの付近を通過するそうだ。それをここにいる教員、生徒たちで解決しろとの防衛省からのお達しだ。『桁人！衛星間通信機貸せ、あいつ等と連絡取るぞ』

「なにがあつたんだい陸？そんなに慌てて？」

「ハワイ沖で試験稼働中だったISが暴走、もう少ししたらこの辺の空域を通過するからそれを捕獲しろとのことだ。コアと搭乗者が無事なら装甲は破壊してもかまわないらしい」

「だったらこんなとこにいるより作戦会議したほうがいいんじゃないか？」

「あのな、これから出撃するのは専用機持ちのガキどもだぞ？あいつ等だけじゃ、不安だ」

「あーはいはい、わかったよ。相変わらず心配性だな」

そう愚痴りながらも桁人は衛星間通信機を渡してくれた。それを受け取り、暗号通信モードに切り替えて厚木駐屯地の第13番通信室へ事件の内容を送った。

「あ、陸！白奈のこと呼んでくれないか？」

「わかったよ、ちょっといつてくる」

それから自分のNPCとヘッドセットを手に取り、部屋を出る。

旅館の一番奥ある宴会用の大広間を改造した簡易会議室にいくと、すでに会議は始まっていた。どうやら作戦の内容と重要性の説明は終わったらしくメンバー選抜に入っているようだ。

「陸、事態の説明は終わった。我々教員は訓練機を使用して周辺海域及び空域の封鎖を行う。お前はここに残って専用機持ち連中の後方支援を頼む」

「あいよ、それで誰が出撃するんだ？状況からすればアプローチできるのはせいぜい1回がいいところだろ」

「だとするとやはり、一撃必殺の攻撃力をもった機体であたるしかありませんね」

「だったらちようどいいヤツがいるじゃないか。なあ織斑弟？」

「・・・・・・まさか俺が行くんですか！？」

「そうだよ。この中じやお前の零落白夜が一番強力じゃねえか」

「しかし織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

「ーッ！・・・・・・行きます。俺が、やって見せます」

どうやらあいつの心に火が着いたみたいだ。これで第1の問題は解決。さて、次はあいつを銀の福音のところまでどうやってつれていくか、だ。エネルギーはなるべくすべてを攻撃に回したいから自分で移動するつてのはなし、だとすると他の機動力に富んだ機体に運搬してもらうのが妥当だ。

「じゃあ次。このアタッカーを誰が戦場に運ぶかだ。このメンバーのなかで一番速いのは？」

「それなら私のブルーティアーズが。ちようど本国から強襲用高機動パッケージ『ストライクガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついてます」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「うつしや、なら決まりー」

だな、と最後に言おうとしたそのとき、いきなり間抜けな明るい声に遮られる。

「待った待った！その作戦はちよつと待ったなんだよー！」

しかも、その発生源は俺らの頭上、つまり天井からだった。見上げると一角の天井がはがされており、そこから束の顔が生えていた。
「……………誰でもいい、あのアホをつまみ出せ」

「いやいやその言いぐさはヒドいなーりつくん。ーーとうつ」
体操選手顔負けの見事な空中一回転を決めて着地。相変わらずの無茶苦茶っぷりで俺の前にたった。

「実はねー、今のよりもっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリ
ンティング！聞かせてあげようか？」

「聞きたくないから出てけ。話が先に進まん」

「そつかききたいかー！じゃあ」

「だから俺の話をきけー！」

どうもこの女という調子が崩れる。まるで黒華みたいだ。

まあそれはおいておいて、このまま放っておくと勝手な行動に出かねないので仕方なく束のいい作戦とやらを聞くことにした。

「ここは断・然！！紅椿の出番なんだよっ！」

「あ？何だって？」

「紅椿のスペックデータ見てよ！パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！」

束の言葉に応えるようにして数枚の空中投影型のディスプレイが俺のことを囲んだ。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ほら！これでス
ピードはばっちり！」

「ちよいまち！速いのはわかったから、その展開装甲ってなんなの
かをまず説明しろ」

「むふふふよくぞ聞いてくれました！展開装甲っていうのは、こ

の天才束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよ！ちなみに白式の雪片式型にも試験的にくつついてるよ」

「………そういやどつかで似たようなのを見た気がしたら、まさかな」

「んで、いつくんの白式でうまくいったから、今度の紅椿はなんとなんと全身のアーマーを展開装甲にしてみました　そしてなんと！最大稼働時にはカタログ上のスペックの三倍にはなりまゝす！」

「赤い彗星かー！！」

ツッコんだのはもちろん俺と千冬。いや、久しぶりにいいつつこみができたぜ。というか千冬がこの手のネタを知ってるとはな、結構驚きの事実だ。

「ちがーう！それをいうならトランザム！」

「どつちでもいい！！」

「とはいえ実は三倍っていうのは嘘だけだね」

「もう何でもいい………」

まさかの驚異の三連続のシンクロツッコみ。って、こんなことしてる場合じゃない！

「まあ追求したい話は山ほどあるが、話をもどすぞ。……束、紅椿の調整はどれくらいで終わる？」

「五分もあれば十分だよ！」

「頼む」

「な！太刀花統括官！私のブルーティアーズなら必ず……！」

「決定事項だ、異論は認めない」

「しかし……！」

「それ以前にパッケージの量子変換は終わってるのか？」

「そ、それは……まだですが………」

セシリアの意見を黙殺し、話を進めていく。セシリアは確かに訓練を積んで経験があるだろうけど機体の性能差を考えると第の紅椿の方がいい、だろう。

「よし、決まったみたいだな。では本作戦では織斑・篠ノ之の両名

による目標の追尾及び捕獲を目的とする。ただし、捕獲が不可能と判断された場合は撃墜を許可する。作戦開始は三十分後。各員、ただちに準備にかかれ」

千冬の号令とともにあわただしく動き出すメンバーたち。そんなとき、俺はポケットに入った携帯端末が震えるのを感じた。やつとか。誰にもばれないように端末の通話ボタンを押す。

（俺だ、準備はできたか？）

（ちよつと時間はかかりましたけど、恙無く）

（首尾は？）

（こちららも秘密裏に動いてますから直接的な支援はできませんが位置情報くらいはなんとか）

（仕方がない、それだけで十分だ）

（わかりました、それでは）

通信が途切れ、部屋の様騒が戻ってくる。これで福音を見失うことはなくなつたが、ちよつと誤算だった。最近基地の方には戻つてなかつたけど規制が厳しくなつたのか？

「お兄ちゃん、こつちに残つたメンバーはどうしたらいい？」

「ひとまず待機だ。あ、お前は桁人のとこにいつてこい、呼んでたぞ」

「え？うんわかつた」

そうしている間に作戦準備が整い、各員が配置につくのであつた。

side 篇

時刻は十一時半。七月の空はこれでもかとはかりに晴れ渡り、容赦ない陽光が降り注いでいる。砂浜で私と一夏はわずかに距離を置いて並んでたち、一度目を合わせてうなずいた。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

全身が光に包まれ、ISアーマーが構成される。それと同時にP ICによる浮遊感、パワーアシストによる力の充満感とで全身の感覚が変化した。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

作戦の性質上、一夏は全エネルギーを攻撃に回さなければならぬので私の上に乗って移動することになる。少々浮かれ気味の気持ちを悟られないように少し棘のある言い方をする。

とはいえ心の中は不安半分、うれしさ半分といった感じだった。まだ預かって一日とたっていないこの紅椿を完全に扱えるのだろうか、というのと一夏たちと同じ専用機持ちになれた、というのからくるものだった。

「ふっ、それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。

私と一夏が力を合わせればできないことがない、そうだろう？」

「ああ、そうだな。でも箒、先生たちも言ってたけどこれは訓練じゃないんだ。実戦ではなにが起きるかわからない。十分に注意して

ーーーーー

「なにをバカな、そんなことわかっているさ。なんだ一夏？怖いのか？」

「いや、そうじゃねえって。あのな、箒ーーーーー」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいいさ」

いつもの一夏らしくない弱気な発言を遮り、ポジティブな方向へ持っていく。それから一夏が背中に乗り、準備は完了した。

『一夏、箒、聞こえるか？』

ISのオープン・チャネルから太刀花統括官の声が聞こえる。私と一夏はうなずいて返事をした。

『今回の作戦は交戦時間が非常に短い。一撃必殺を心がける』
「了解」

「太刀花統括官、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな、できる範囲でやってやれ。でも無理はするなよ、お前は紅椿受け取ってからまだ日が浅いからな』

「わかりました」

『秒読みを開始するぞ。．．．五秒前．．．四．．．三．．．二．．．一．．．作戦、開始!!』

号令と同時に私は一夏を乗せたまま上空三百メートルまで一気に上昇する。さすがは紅椿、一夏という荷物を背負った状態でも難なく加速してくれる。出撃から数秒で目標高度の五百メートルに到達した。

「暫時衛星リンク確立．．．情報照合完了。目標の現在位置を確認。――一夏、一気に行くぞ！」

「お、おう！」

さらに加速すると稼働していなかった展開装甲が動くのを感じ、それから一気に速度が上がる。それから少しもしないうちに目標である銀の福音を視界に捉えた。

「見えたぞ、一夏！」

「あれか！」

ハイパーセンサーの視覚情報が自分の感覚のように目標を映し出す。

銀の福音、その名の通り全身が銀色の装甲に包まれていた。そしてなにより異質なのが、頭部から生えた一対の巨大な翼だ。本体同様銀色に輝くそれは、大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムらしい。

（今、考えてる暇はない！）

高速で飛翔するそれを追い越し、反転する。

「加速するぞ！目標に接触するのは十秒後だ。一夏、集中しろ！」
「おう！」

そしてスラスターと展開装甲の出力をさらに上げ、福音との距離

をぐんぐん詰めていく。そして一瞬の交錯、一夏の持つ雪片は空を切った。もう一度攻撃を仕掛けるため一夏が背中を離れるが、福音はそれをまさに紙一重で回避する。今の動きはいくら慣性制御機能を標準搭載しているISであっても、かなり難度の高い操縦だ。

「くっ……！あの翼が急加速をしてるのか！？」

「一夏！もう一度やるぞ！」

「ああ！」

再度一夏を背中に乗せ、攻撃を仕掛けるがそれも紙一重で回避されてしまう。非常に精密で緻密な動き、今までのISとは明らかに違う動き。『重要軍事機密』の意味がよくわかったきがする。しかし、そんなときだった。

「ぐっ……！！」

「一夏っ！」

「大丈夫だ、そんなことより少し離れる！危険だ！」

一夏の言葉どおり開かれた砲口から次々とエネルギー弾が放たれる。しかし問題はその連射速度だった、ついさっき砲口が開かれかと思っただけもう視界中が光弾で埋め尽くされている。しかも放たれる光弾がまたやっかいでふれると爆発するという性質を持っていた。箒、左右から同時に攻めるぞ。左は頼んだ！」

「了解した！」

私と一夏は複雑な回避運動を行いながらも連射の手を休めない福音へと、二面攻撃を仕掛ける。

「……けれど、私たちの攻撃はかすりもしない。福音はとにかく回避に特化した動きで、その上同時に反撃までしてくる。この特殊なウイングスラスタは、その奇抜な外見とは裏腹に実用レベルが異常に高い代物だった。

（くっ、このままでは埒が開かない！ならば……！）

長引けば長引くだけこちらが不利になる。そう思い、私は雨月と空裂を構えなおして一夏の前にでる。

「一夏、奴は私が押さえる、その隙に！」

「わかった、頼む！」

高速で動きながら突撃と斬撃を交互に繰り出しながら福音に近づいていく。向こうからの攻撃はきついが紅椿の性能を持ってすれば回避などたやすいこと。

「La………」

甲高い合成音声。その刹那、ウィングスラスタはその砲門すべてを開いていた。その数、三十六。しかも全方位に向けての一斉射撃。

「やるなっ……！だが、押し切る……！」

迫りくる光弾の合間を縫うようにして、迫撃する。その瞬間、ほんの少しだが隙ができた。

今だ！そう言おうと振り返ったとき、一夏はなぜだか眼下に広がる海へと一直線に向かっていった。

「一夏……？」

「うおおおっ……！」

一夏は瞬時加速と零落白夜、その両方を最大出力で使い、一発の光弾をかき消した。

「な、なにをしているのだ！？せつかくのチャンスを……！！」

「船がいるんだ！海上は千冬姉たちが封鎖したはずなのに……ああくそっ！密漁船か！」

そんなやりとりをしているうちに一夏が握る雪片が光を失った。

最大にして唯一のチャンスを逃し、あまつさえ作戦の要である零落白夜まで失ってしまった。

「馬鹿者……！そんな犯罪者などかばって……！！そんな奴らなど……！！」

死んでしまえ。頭に血が上り、そんなことが頭をよぎった。

「箒……！」

「ツ……！！？」

「箒、そんな……！そんな寂しいこと言っなよ。力を手にしたら弱い奴のことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、

箒。らしくない、全然らしくなぞ」

「わ……わ、私、は……！」

力に溺れていた。もう二度と間違えまい、そう心に決め、今日のこの日まで剣を学んできた。それだというのに新たに得た強大な力『紅椿』に飲まれ、自分を見失ってしまった。私は、私は――！！

取り落とした雨月と空裂が光の粒子になって消えていった。

「箒いいいつ……！」

一夏の叫び声で私は我に返る。目の前には一斉射撃の体制にはいつた福音。紅椿には回避行動をとるだけのエネルギーすら残っていない。これはアリーナで行う模擬戦ではない、命のやり取りをする実戦なのだ。

エネルギーの切れたISアーマーは驚くほど脆い。今の状態での攻撃を受けたらひとたまりもないだろう。そう覚悟した次の瞬間――！！

「ぐああああっ……！」

「一夏……！」

光弾が直撃する寸前、その射線上に一夏が割り込んできた。もちろん光弾は全弾一夏に命中、私を抱き抱えた形で攻撃をかばってくれた。

白式のエネルギーはすでに底をついているはず。だというのに残り少ないエネルギーまで使って瞬時加速で射線上に割り込んできた。そのとき、最悪の結果が私の頭をよぎった。

ああ、私のせいだ。私が、あのときもつと冷静であつたなら。

「一夏っ、一夏っ、一夏あっ……！」

「う……あ……あ……」

体が傾き、私たちはなす術なく海へと落ちていった。そして数秒後に広がる波紋、最後に見たのは一夏の消えてしまいそうな弱々しい笑顔だった。

第6話 / 『強さ』とは 前編 (後書き)

どうでしたか？今までよりも少し長くなってしまいました。次話投稿は明後日の予定です。

感想、誤字・脱字などがございましたらご連絡いただけると幸いです。

第7話／『強さ』とは 後編 (前書き)

どうもこんばんわ。予告よりも遅れてしまいましたが投稿できました。

ではどうぞ

第7話 / 『強さ』とは 後編

第7話 / 『強さ』とは 後編

side 白奈

桁人さんに呼ばれて少しの間作戦室を離れ、白鉄を預けて戻ってきてみると大変なことが起きていた。作戦は失敗、福音を取り逃がしたうえに出撃したメンバーの一人、織斑君が負傷、現在意識不明らしい。

「お兄ちゃん、どうするの………?」

「どうにもなんねえな。福音は行方不明、こっちはアタッカーが意識不明ときた。さっきの攻撃でダメージは与えられたらしいから奴はそう遠くにはいつてないはずだ。これからこの教員と話し合つて今後の方針を決める」

「そっか………」

正直言つて、まさかあの二人がこんな大ポ力をやらかすなんて思つても見なかった、いったいなにがあつたんだ? 第も異常に沈んでるし。

まあそれはそれとして。正直言つて、今すぐ頭にきてる。今にもここを飛び出していききたい気分だ。いくらなんでも仲間を傷つけられて黙ってるほど私は甘くない、手元に白鉄さえあればよかったんだけどな。

「よく聞け、見ての通り作戦は失敗だ。追つて連絡があるまで全員待機、我々教員はこれより作戦会議に入る。くれぐれも織斑の敵討ちなど考えるなよ」

そう釘を差して織斑先生とお兄ちゃんは部屋を出て言つてしまつ

た。それから待機、を言い渡されてみんなが部屋を出ていつてしまった。私もどうしようもないのでひとまず織斑君が眠る医務室へ向うその途中のことだった。

「白奈、少しいいか？」

「ラウラ。構わないけど、どうかした？」

ちょうど廊下を歩いていたら、簡易作戦室の隣にある小さい宴会場からラウラが顔を出していた。

「少し話がある。入ってくれ」

「うん」

部屋にはいるとそこには箒と織斑君以外の代表候補性たちが全員集合していて、部屋の真ん中には小さな空中投影型ディスプレイがひとつ置いてあるだけだった。うーん、なんか悪い予感が……。「えっと、みんなどうしたの？ 神妙な顔してこんなところに集まっちゃって……」

「なに、簡単なことだ。これから一夏の敵討ちに行く。その参加者を募っ」

「待った待った、ちょっと待った！！ ついさっき変なことすんなって言われたばっかだよな！？」

「なにをいつてますの？ 仲間がやられたのなら報復するのが普通でしょう？」

「いやでも！」

「だめだよ白奈、もう私たち決めたから」

「それとも何？ 怖いわけ？」

む、最後の鈴の一言には力チンときた。私だっで行きたいさ、でも今の戦力ではとても勝てるとは思えない。紅椿からとった記録映像を見る限り、相手はかなり強い。今のみんな、もちろん私も含めてあれとやり合うにはまだ力不足だ。

「別に、怖いわけじゃない。ただ、勝てない戦と勝てる戦はわきまえてるつもりだから。それに今手元に白鉄無いし、私はパス」

「そうか、わかった。無理強いはしない、しかし私たちは行く。な

んと言われてもな」

「……そう。行くのは勝手だけど、必ず帰ってきてね」
「ふっ、当たり前だ」

その言葉を最後に、みんなと別れた。ISに乗っている以上、死ぬことはないと思うけどみんなはきつと負けるだろう。だからといって今ここで説得しても止まらないだろうしこういうところでの敗北も彼女たちにとってはいい教訓になると思う。だからお兄ちゃんたちにも報告はしない。

本来の目的であった医務室に着くと、そこには先客がいた。

「箒……」

「……ああ、白奈か。どうした？」

痛々しい表情をした箒が織斑君の傍らに座っていた。見るからに落ち込んでいる。それに加え、さっきの戦闘のときにほどけて垂れ下がった髪が二割り増しで今の感情を表しているようだった。

「織斑君はどうしてるかな、ってさ」

「そうか、今はまだこんな状態だ。話もできない」

目を閉じてベッドに横たわる織斑君は安らかな寝顔とは裏腹に体の至る所に包帯が巻かれている。自分の体を盾にして箒を守ったそうだけど、バカなことをしたわね。

「ねえ箒、みんなが織斑君の敵討ちに行くって騒いでたけど、行かなくていいの？」

「……私は、もう、ISには乗らない、乗りたくない」

「は？」

「力を手に入れた途端、その力に溺れ大事な人を傷つけてしまった……。昔も、今もそう、全部私のせいだ」

「何よ、それ……そんなの単なるわがままじゃない」

今ここでつぶれればきつと箒は立ち直れない。こんなことなんて誰だっただけのことだ、この程度乗り越えてもらわなきゃ、困る。

「な、んだとっ……」

「そうでしょ？守れるだけの力を持つてるのにそれを使わないで守

られる側に回るわけ？力があるのに力がないフリして守ってください？ナメてるの？」

「う、うるさい！お前に何がわかる！！」

そのまま立ち上がり私の胸ぐらを掴む箒。よし、食いついたな。「わかんないよ何一つ。でもさ、今のあなたが腰抜けの臆病者だつてことくらいはわかるかな」

「ツツツ！！」

ガンッ

「黙れっ！！」

「つつう、いいパンチしてるじゃない。でも、私に力振るうつてのに仲間のためには振るわないの？」

「あつ、う、それは・・・」

痛たた、さすがに殴られるとは思ってなかったな。それにしても鍛えてるだけあつて体重が乗ったいいパンチだった。まあそれくらいじゃ私は倒れないけどね。さて、止めだ。

「箒はさ、仲間がたくさんいるんだから、もうちょい頼ってみない？それに、さつき痛感したんじゃないの？慢心の怖さってやつ」

「・・・だがしかし・・・」

「もうっ！駄菓子も菓子もない！行きなさい、あれとやり合っつのならあなたの力が必要なの！」

「・・・どこに行けばいい？」

よしよし、釣れた釣れた。これで多少はましになっただろう。

「作戦室のとなりにある宴会場よ」

「白奈、お前は行かないのか？」

「桁人さんに白鉄預けちゃったから、私はいけない」

「そうか・・・一夏を頼む」

そういうと箒は部屋を飛び出していった。まったく、ほんと分かりやすいんだから。それから箒が座っていた椅子に座り、もう一度

織斑君の顔をのぞき込む。

「みーんな行っちゃったよ、君の為に。いつまでも寝てちゃだめだからね」

「・・・・・・」

問いかけたところで返事があるわけでもなく、虚しく時間だけが過ぎていく。それから織斑君は起きる気配は全くなかった。それから数分たったところ、ポケットに入っている携帯電話が震えた。お兄ちゃんからだ。

「はい、もしもし」

『白奈か。よかった、お前は行っていないんだな。すぐに作戦室に来い』

「え？な、何？何があったの」

『口で説明は面倒だからこっちきて直接見る。いいな、すぐ来いよ』それだけ告げて電話は切れてしまった。なんだか急に胸騒ぎがしてきた。ただの杞憂で済めばいいんだけど、お兄ちゃんの口調からするときつとそうもいかないだろう。

「織斑君、ちよつと行ってくるからね」

無駄だとわかっていてもそれだけ伝えて

私は医務室を後にした。

side 陸

「バカどもが・・・・！」

セカンドシフト

作戦室の大型モニターには第二形態移行した福音に翻弄されている専用機持ちたちの姿が映し出されていた。本来であればこちらからのサポートを行いながら戦闘するはずなのだが連中が勝手にでていったせいでこちらからはなにもできない状態にあった。

「お兄ちゃん！何があったの！？」

あわただしく白奈が作戦室に入ってくる。今までどこにいたのかわからないが、連中と一緒にいなかったようだ。

「モニターを見る。あんな感じた」

「そんな・・・！嘘でしょ！？」

「今ならまだ間に合う、援護にいけ」

「で、でも白鉄桁人さんに預けちゃったし」

「はあ？」

そういうことだったのか、こいつがここに残ってた理由って。しかしこんなところで頭を抱えてても仕方ない、とにかく時間がないんだ。

「千冬、桁人を呼んできてくれ。たぶん部屋にいる」

「了解した」

「その必要はないよ。今ちょうど終わったから」

千冬が部屋を出ようとしたそのとき、ドアが開き、桁人がはいってきた。

「これでいつでもいけるよ」

「よし白奈、準備はいいな？」

「うん、問題ないよ」

白奈は桁人から新しい白鉄の説明を受けている間に白鉄のパーソナルデータを高速リンク指揮システムに登録、これでこっちからのサポートを受けられるようにする。

「陸、本当にいいのか？」

「ああ、構わないね。ほかにどうしようもないんだから。それにあいつだって代表候補生だ、それくらいの覚悟はできてるだろ」

「・・・そうか」

それだけをいって千冬は山田先生のところに行ってしまった。まったく、よくわからない奴だ。事務的に指示を出したと思えば人間らしく同情してみたり。やっぱりあいつとは気が合うぜ。

「お兄ちゃん、準備OKだよ」

「そうか、もう後がなさそうだ。早く行ってやれ！」

「了解！」

白奈を送り出した後、桁人呼んで白鉄のことを聞いた。

「説明してもらおうか、何いじってたんだ？」

「ん？今回使い道がない白天白夜の射撃機能を一時的に封印して、そのエネルギーを全部機動力に回しただけさ。ほかにも装甲を薄くして軽量化したりとかエネルギー配線を変えたりで機動力はデフォルトの1.67倍にまであげられたよ。それと今回の作戦には邪魔な射撃装備を取っ払って代わりにもう一本の近接ブレードを量子変換しといた」

「もう一本の近接ブレードって、まさかあれか？」

「そうだよ。ぎりぎり完成したんだ。きつと役に立つ」

それからモニターに目を戻し、俺たちは戦局を見守るのだった。

side 白奈

最大出力でぶっ飛ばし、私は戦場に向かっていた。ここからでも向こうでエネルギーが爆発する光がいくつも見える。たぶん福音のエネルギー弾が主たるうけどその中にいくつか赤い光も見える。

「聞こえるか白奈？」

「うん、ばっちり聞こえてるよ」

『今海上では箒が孤軍奮闘してる状態、ほかの連中は海にたたき落とされてる。そっちは先生たちが回収に向かっているからおまえは箒を援護しつつ退路を確保しろ、いいな！』

「了解！」

ハイパーセンサーはすでに福音と紅椿を捉えている。ダメージはやはり紅椿の方が大きく、所々装甲もかけていた。

手の中に淡雪を呼び出し、エネルギーチャージを始めながら残りの福音との距離を瞬時加速で詰め、一太刀浴びせようと振るうが紙

一重で避けられてしまう。

「箒！助けにきたよ！いったん撤退して体制を立て直すって」

「しかし白奈、ほかのみんなが！」

「そっちは先生たちが回収してくれるって。だからはや」

警告音とともに飛来する光弾、危うく当たるところだったか何とか回避に成功。まったく、話してる間に攻撃とか反則でしょ。

とにかくエネルギーが残っていない紅椿は下がってもらい、私 gaps を作るために切り込んでいく。

しかし、いくら攻撃を放つてもすべてぎりぎり、まさに紙一重で避けられ逆に、攻撃を食らってしまう。ただ、輻射波動障壁機関のおかげで決定的なダメージは免れてるけど着々とエネルギーを削られていく。最初来た時は90%以上あったのに今では58%しかない。これ以上エネルギーを削られるのは勘弁なので障壁機関を一時停止させる。

このままではジリ貧だ。今では相手にくつついていくだけで精一杯な状態、どこかで一発、ギリギリのヤバイ攻撃を仕掛けなきゃ。せめて撤退するだけの時間稼ぎができれば！

「はあああああ！！」

瞬時加速を駆使して一気に福音に詰め寄る。ある程度の被弾は覚悟していたが、予想以上に当たる。おかげで装甲は大幅に削られたが福音を捕まえることに成功した！

「落ちろお！！」

海面に向けて福音をたたき落として箒のを掴んで旅館の方に移動を開始する、が一瞬で体制を立て直した福音に進路をふさがれてしまった。

「くっ、白奈、どうするんだ！？」

「どうやら意地でも通してくれないみたいね。倒すしかないっしょ」とはいったものの、今の状態ではかなり厳しい選択だった。

さざ波の音を聞きながら俺は女の子を眺めていた。決していやらしい意味ではなく、彼女の歌、彼女の踊りからはなぜだかひどく懐かしさを感じるからだ。

（・・・・・・あれ？）

ところが、ふと気がつくと少女の歌は終わっており、踊りもやめて、少女はじいっと空を見つめている。俺は不思議に思っ、座っていた流木から離れて少女の隣へと向かう。

ざあ、ざあ・・・・・・

波打ち際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす。

「どうかしたのか？」

声をかけるが、少女はまだじいっと空を見つめたまま動かない。

俺も何となく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた。

「呼んでる・・・・・・行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと、そこにもう少女の姿はなかった。

「――あれ？」

きよろきよろとあたりを見回すが、もう人影は見あたらない。歌も、聞こえない。聞こえるといえば波の音だけ。

「うーん・・・・・・」

俺は仕方なく木のソファに戻ろうと体を反転させる。すると――
――背中から声を投げかけられた。

「力を欲しますか・・・・・・？」

「え・・・・・・」

急いで振り向くと、波の中――膝下まで海に沈めた女性がたっていた。

その姿は白く輝く甲冑を纏った騎士さながらの格好だった。

大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている。

その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない。

「力を欲しますか……？ 何のために……？」

「ん？ん……難しいことを訊くなあ」

ざあ、ざあんと。

波だけが俺と女性の間にある。

「そうだな。友達をーいや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけな
いだろ？単純な腕力だけじゃなくて、いろんなことでさ」

俺は、いまいち自分の中でもまとまっていけないことなのに、妙に
饒舌に喋っていた。

話しながら「ああ、俺ってそう思ってたのか」と自分に驚きつつ、
言葉は続いていく。

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない
暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたい
と思う。この世界で一緒に戦うー仲間を」

「そう……」

女性は、静かに答えてうなずいた。

「だったら、行かなきゃね」

また後ろから声をかけられる。

振り向くと、白いワンピースの少女がたっていた。

人懐っこい笑み。無邪気そうな顔で、じいっと俺を見つめている。

「ほら、ね？」

手をとられて、にこりと微笑みかけられる。

俺はひどく照れくさい気持ちになりながら、

「ああ」

とうなずいた。

すると、いきなり変化が訪れた。

「な、なんだ？」

——空が、世界が、まばゆいほどに輝きを放ち始める。
その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くばやけていく。

夢の終わり、なんて言葉が不意に浮かんだ。

（ああ、そういえば……）

あの女性は、誰かに似てた。

白い——騎士の女性。

そんなときだった。頭の中に聞き覚えのある声が二つ、聞こえてきた。

『第っ！！』

『くっ……すまん、夏』

——ああ、行かなきゃ。みんなの元へ。

第7話／『強さ』とは 後編 (後書き)

どうでしたか？

感想、誤字・脱字などがございましたらご連絡いただけると幸いです。

第8話／雪羅（前書き）

どうもこんばんわ。もうすぐ楽しかった夏休みが終わってしまう……。

宿題も終わってませんが物語だけはどんどん続けていきます！
ではどうぞ。

第8話／雪羅

第8話／雪羅

s i d e 白奈

「箒っ！！」

撤退しようとした一瞬の隙、そこを突かれて箒が福音に捕まってしまった。私の白鉄もダメージ・エネルギー消費が激しく、これ以上の戦闘は困難だった。

福音の四枚の光の羽が、箒を包みはじめる。ラウラもあの零距离攻撃でやられた、ましてやエネルギーの切れた紅椿では防ぎきるのは絶対に無理。

「くっ、やらせるかあ！！」

イグニッションブースト

最後の力を振り絞り、瞬時加速で突撃するが、エネルギーを纏っていない淡雪ではあっさりと弾かれてしまう。

徐々に箒が光に包まれていく。もう私には何も出来ない。このまま友達がやられていくのを黙ってみているしかない。

- - - - - だれでもいい、だれでもいいから、あの子を、箒を助けて！！

そう思った、次の瞬間、目の前を白い閃光が切り裂いた。その閃光は寸分の狂いもなく今まさに攻撃しようとしていた福音を打ち落としたのだった。

福音の手を放れた筈は当然自然落下していく、はずだった。爆風がはれるとそこには筈を抱く、誰かがいた。

真っ白な四つのウィングスラスタ、左手には大型のクロー、右手には

「雪片式型、まさか………！」

「よっ、待たせたな二人とも」

「い、一夏………」

「織斑、君？」

そこにはケガして旅館で寝ていたはずの織斑君がいた。しかも白式の形が変わっている、つまり第二形態移行を行なったってこと！？

「白奈、筈を頼む」

「う、うん。っていうか織斑君、ケガ大丈夫なの！？」

「ああ大丈夫だ。行ってくる」

そういつて織斑君は福音の方へと向かっていった。

side 一夏

「へへ、またあつたな。さっきのお返し、させてもらうぜ……！」

雪片式型を右手で構え、斬りかかる。それをひらりとわけぞつてかわした福音を、左手の新兵器『雪羅』で迫った。

第二形態に移行したことで現れたこの装備は、状況に応じていくつかのタイプへと切り替えられるらしい。さっき筈を助けるときに使った荷電粒子砲もその一つだ。

俺のイメージに応えるように、その指先からはエネルギー刃のクローが出現する。

「逃がすか……！」

一メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を切り裂く。エネルギーシールドに阻まれたが、その一撃は確実に福音を捉えていた。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。そして次の回避の後、福音の掃射反撃がはじまった。

「そう何度も食らうかよ！」

俺はその攻撃を避けようとせず、左手を構えて前へ飛ぶ。

――雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始。

キンッ！という甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変形する。それから発生する光の膜が福音の弾雨を消していく。

そう、これはつまり、エネルギーを無効果する零落白夜のシールド。

当然エネルギー消耗は激しいが、完全に攻撃を無効果できる以上、圧倒的にこちらが有利になった。それに福音に実弾装備が無いことはすでにスペックカタログで確認済みだ。

「うおおおっ！！」

強化され、新たに備わった四機の大型ウイングスラスタは二段<sup>ダブレイ
グニッションブースト</sup>瞬時加速を可能にしている。複雑な動きをする福音も、常に最大速度で動ける訳じゃない。これで十分追いつける。

『状況悪化。これより大出力広域繊維攻撃へと移行する』

福音の機械音声がそう告げると、それまでしなっていた翼を自分自身に巻き付け始める。それはすぐに球状になって、エネルギーの繭にくるまれた状態へと変わった。

――まずい。イヤな予感がする。

それは、最悪なことになった。

翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を降らせる。それはつまり、ダメージを受けている箒や白奈たちにも危険が及ぶということだった。さらに悪いことに、俺は彼女たちから離れすぎていた。

（くっ、間に合ってくれ！）

俺はすぐさま二人の盾に走ろうとするが、それを怒鳴り声に蹴飛ばされる。

「何戻ってきてんの！箒のことは私が守るから、行きなさい！！」

「白奈……わかった！」
仲間を信じる。今の俺にはそれしかない。だったら、どこまでも
信じ切ってやる。

俺は右手の雪片と左手の雪羅、それぞれから零落白夜の光刃を作り出して、再度福音へと飛び込んだ。

side 篇

うれしさが心が満ちあふれていた。福音に捕まり最後だと感じた瞬間、ふと一夏の顔が頭をよぎった。なぜかそのとき、無性に会いたい感じ、そう強く願った。

（一夏が、一夏が来てくれた……！！）
心が躍動する。熱を持って、跳ねる。そして戦う一夏の後ろ姿を見て、どんなことよりも強く願った。

（私も、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！あんなことが二度とないように！！）

強く、強く、だれよりも強く、願った。

そんなときだった。私は紅椿の展開装甲から紅い光に混じって金色の光が出ていることに気づく。

「これは……！！？」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していくのがわかる。

――『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバ
イパス構築……完了。
ワソオファビリティ

項目に書かれているのは単一仕様能力の文字。

（まだ、戦えるのだな？ ならば――）

さっきの戦闘で緩んだリボンを気合い入れとばかりにきつく閉め

直し、福音をみる。

（ならば、行くぞ！ 紅椿！）

「ちょ、箒！どこ行くの！？」

「一夏を助けに行く。数は多い方が有利だろ！」

紅と金の光の尾を引きながら、夕暮れの空を裂くように駆けた。

side 一夏

「おおおつつ！！」

零落白夜の光刃がエネルギー翼を断ち切る。

しかし、両方の翼を切るのは至難の業で、またしても二撃目を回避されてしまう。そうしている間に失った翼は再度構築されて、こちらへと強力無比な連続射撃を行ってきた。

「くっ！」

「――エネルギー残量20%。予想稼働時間、三分。

（くそっ！このままじゃ・・・）

リミッターなしの軍用ISがどれほどのエネルギーを持っているのか、見当もつかない。

対して自分の機体は活動限界が近づいている。それは焦燥へと変わって、じわじわと俺の心を焼いていく。

そんなとき、ハイパーセンサーが視界の端に紅い光を捉えた。

「一夏！」

「箒！？お前、ダメージは――」

「大丈夫だ！それよりも、これを受け取れ！」

箒の――紅椿の手が、俺の白式へと触れる。

その瞬間、全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだ・・・・・・？エネルギーが――回復！？箒、

これは――」

「今は考えるな！いくぞ、一夏！」

「お、おう」

意識を集中させ、雪片式型のエネルギー刃を最大出力まで高める。巨大な光の刃を、俺は両腕で支えて振るった。

「うおおおっ！！」

福音は俺の横薙ぎを縦横一回転して回避、こちらを再び視界に捉えると同時に光の翼を向けてくる。――かかった！

「箒！」

「任せろ！」

俺に向けられた翼を、紅椿の二刀が並び一断の斬撃で断ち切る。

「逃がすかああっ！」

さらに脚部展開装甲を解放し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りが福音本体に入った。予想外の攻撃に大きく姿勢を崩した福音を、俺は下から上へと返す刃で残りの光翼もかき消す。

そして、最後の一突きを繰り出そうとする俺に、福音は体から生えた翼全てで一斉射撃を行ってきた。

（くっ……！しまった！）

飛来した光弾を顔面に一発浴びてしまい、体勢を崩してしまう。とどめを刺し損ねたため、翼を再構築し始める福音。くそっ！まずい！！

「まったく、氣い抜くんじゃないわよ」

いつの間にか後ろに回っていた白奈の一撃で福音はついに動きを止めた。

アーマーが消え、落ちていく操縦者を下にいた箒がキャッチ。これで一件落着いてか？

「ふう、終わったな」

「そうだね。あーあ、疲れた」

「二人とも、まだ終わってないぞ。操縦者とコアを旅館まで届けて終了だ」

「もう、筈はまじ」

『お前等！！今すぐ離れろ、攻撃がくるぞ！』

「……ッ！」「……」

全てが終わったと思ったとき、突然の通信と不吉な言葉。オープンチャネルから流れる陸さん声から焦りと不安が、何となく感じられた。

そして次の瞬間、俺たちがいたところを赤黒い光が通っていく。

ハイパーセンサーにはアンノウンの文字が表示される。

「陸さん、どういうことですか！？」

『どうもこうもねえ！ステルスシステムかなんかで隠れてたみたいでこっちも把握できなかった！相手は正体不明のIS、スペックも所属国も全部不明だ。どうやら漁夫の利をねらってたらしいが、そうもいかなくなって出てきたみたいだ。奴の狙いは福音のコア、最優先でもって帰れ、いいな！』

「……了解！」「……」

この調子じゃ、まだまだ戦闘は続きそうだぜ。

side 陸

突然現れたアンノウン機、俺たちはこれの対処に追われていた。

相手の性能は未知数、しかし今のところここからみる分には機動性や最高速度などは第三世代ISとそれほど変わらなさそうだが、特筆するのはそのステルス能力とさつき砲撃だ。

現存するISにはあり得ない精密な迷彩システム、自衛隊の監視衛星『ステイング』でも捉えきれないということは、多分剣^ホ取りし聖者と同じレベルかそれ以上の性能を持った光学衛星迷彩を搭載しているだろう。それに

「桁人、あの砲撃」

「ああやられたね。多分ハドロン粒子砲だ。あれだけの大出力を保

「たまま長距離を進んでくるんだ、まったくこの研究所が作ったんだか」

世界で最先端に行くウチでもまだ試作段階だというハドロン粒子兵器を実戦投入できるレベルに仕上げてくるなんて。

やはりさつき同様俺たちは、戦局を見守ることしかできなかった。（みんな、無事に帰ってこいよ・・・）

side 白奈

アンノウンとの接触まではあまり時間がない。なので一番足の速い箒に福音の操縦者とコアを任せ、私と織斑君でアンノウンをくい止めることになった。

「二人とも無理はするなよ」

「大丈夫だ。背中はずちり守ってやる」

「そうそう、早く届けて戻ってきてよ？」

言葉を交わして、紅椿の単一仕様能力でエネルギーを回復してもらってから箒は旅館のほうに飛び去っていった。

そしてついにハイパーセンサーがアンノウン機の姿を捉える。真っ黒い西洋の鎧のような流線型のボディに騎士の兜のような頭、その中には赤く、怪しく輝く一つの大きな目。腕は肘から先が円錐形になっており、手のひらがついていない。足は完全にスラスターと化していて背中にはエックス字型のバインダースラスターが装備されていた。

全身は人間より一回りほど大きいけど、みるからに人は乗っていないって外見をしている。

「あんまり速くなさそうだから左右から挟んでやるよ。私は右、織斑君は左をお願い」

「おう、任せろ！」

アンノウン（めんどくさいから黒騎士ってことにしよう）の手の

円錐部分が開き、さっきの赤黒い砲撃を放ってきた。

それを瞬間加速で回避して、左右から挟み撃ちする。どうやら連射ができる構造をしていないみたいですぐに砲門を閉じてしまった。チャンス！！

一気に詰め寄り淡雪を振るう、がものすごく堅い装甲にはじき返されてしまった。

「んな！？」

「バカな！！」

織斑君も弾かれたみたいで、二人とも体勢を崩してしまう。その隙をみて黒騎士は加速して旅館のほうへ向かって行った。

通すわけにも行かないの瞬間加速を連発して、進路をふさぎ攻撃するが何度やっても結果は同じだった。織斑君が放つ荷電粒子砲すらも軽々とはじき、進んでいく黒騎士。このままこれが続けばどんなこつちが不利になっていく。しかし攻撃は通じない。だったら切り札、使いますか！

そんなときだった。今まで直進しかなかった黒騎士が動きを見せた。各所の装甲がスライドし無数の穴が現れ、そこから腕の砲撃と同じ色のレーザーが放たれた。

あんまり速度は速くない、そう甘く見ていた。

「なっ！追ってくる！？」

赤黒い不気味なレーザーは回避しても回避してもゆらゆらよ追いかけてくる。そして前だけに気を取られていたら

「きゃあ！」

後ろから迫ってきたのに当たって結果、前からのにも当たってしまった。

「白奈っ！！」

間一髪で体勢を整え、落下を免れる。黒騎士の進路上に集まり、軽い作戦会議。

「どうする？このままじゃジリ貧だ、撤退するか？」

「いや、ダメでしょ。狙いは福音なんだから意味ないよ」

「それもそうか、なんかいい案ないのな？」

「ひとつだけ。一回こっきりだけど」

「わかった。それに賭ける！」

「じゃあつつこむから援護して、お願いね」

作戦がまとまったところで攻撃に移る。黒騎士が腕からあのビームを撃ってくるけどそれを織斑君が零落白夜の盾で防御してくれる。砲身を収納している間に瞬時加速で距離を積み、もう一つの近接ブレード『月詠壺式』を呼び出して斬りかかる。

この近接ブレードは術人さんが作った放射波動兵器の試作品だ。刃に内蔵されている放射波動カートリッジを解放し、刃を媒体に接触している物質に放射波動を照射するというもの。ただ試作品ということもあって刃が放射波動の熱に耐えきれないため、実際の稼働時間は10秒程度と実戦投入はとてもできない代物だが今は頼もしい。

ぎりぎりのところで柄にあるトリガー引くと月詠の刀身が深紅の光を帯び始める。

「はあああつー！」

最上段まで降りあげ勢いよく唐竹割り。危険と判断したのか腕を振りあげガードするが、接触した瞬間一瞬で切断するが致命傷にはほど遠い。

――稼働可能時間残り5秒

あと一発しかチャンスはない。振り抜いた状態から左逆袈裟を繰り出し、見事わき腹に命中。少し抵抗があっただけでもすんなりと上半身が下半身とサヨナラし、海の藻屑となって消えていった。終わった……。そう気を抜いた瞬間、なぜかめまいが襲ってきた。わき腹にぬるりとした感覚を覚え、触つてみると血で赤く汚れており、今もまだ出血している。きつとさっき攻撃があったときに破片が刺さったのだらう。そして遠のく意識の中、私を呼

ぶ織斑君の声が聞こえたのだった。

side 陸

「バカタレ、自分の健康管理くらいしつかりしろ」

「そんな、ムチャだよ。せんーいったあ！！もっと優しくしてよ！」

戦闘終了後、一夏が血相変えて戻ってきたと思ったら白奈のやつがぐったりしてて、検査してみるとただの失血による気絶だった。全く、心配させやがて。俺の身にもなってみろってんだ。

ひとまずこの事件は一件落着。福音の件はすでにアメリカ軍の関係者が全て片づけてくれた。操縦者もコアも近くの駐屯地に運ばれたらしい。

あのアンノウン機も含めて謎は残っているものの、今はそれよりも大事なことがあった。それは……………

「お前等、わかってんだろうな？全員そこに正座しろ」

さあて、言うこと聞かないコドモにはお仕置きだ。

）

少々お待ちください

）

「まったくこれだからガキは！もっと自分の身を大事にしろ、これから先なが」

「その辺にしておいてやれ、陸」

「いんだから……………ん？なんだ千冬か。あれの回収は終わったのか？」

「ああ、ラボに運んである」

説教が始まってすでに数十分、そろそろみんなの顔が青くなって

きた頃だった。後ろから聞こえた千冬の声でいったん中断した説教を今更再会するのもアレなので今回はこれでカンベンしてやるか。
「用事ができたから今日はこの辺にしといてやる。本当だったらあと一時間はやる予定だったかな」

それを聞いて全員の顔色がさらに青くなる。ふっ、まだまだガキだなこいつらも。

残りのことを千冬に任せ、俺はFDで佐原科技研のラボへ向かった。向こうについた頃にはすでに十一時をまわってしまっていたがそんなこと関係ない。

「桁人、首尾は？」

「遅かったね。上々だよ、僕も始めてみる技術ばかりだよ」

「そうか。どんなものが？」

「たとえば腕に装備されてるハドロン砲の粒子加速機とか。このサイズでこれだけの出力を出せるのは前代未聞だよ。ああ、あとおもしろい機構を見つけたんだ」

そういつて桁人は解体した黒いやつのバインダースラスターの解析結果を出した。

「見てごらんよ、背中にエネルギーコンデンサーと粒子圧縮機を搭載してる。これならば僕の第四世代機の問題も解決、アルビオンもロールアウトできるよ。ただ問題は」

「コア、だろ？」

そう、どんなに外側があってもコアがなくてはISは動かない。それが今の一番の問題だった。

「うん。でもこれのコアがあるから、ナノレベルまで解体すれば構造はわかるはずだよ」

「ああ、そうか。早いところ実現させないとな『三光計画』を」

お兄ちゃんにこつてりと絞られたあと、私たちは部屋にもどって各自の時間を過ごしていた。―――といっても、みんな疲れて寝ちゃったが大半なだけだ。

どうも目が冴える夜、暇なので制服の上着を羽織って海岸へ。月明かりに照らされ幻想的な雰囲気醸し出す海。

砂浜に座り込み、夕方のことを思い出す。お兄ちゃんが出ていった後に織斑先生から聞いたこと。

ぐったりした私が帰ってきたとき、お兄ちゃんはすごく焦ってたらしい。いつもは冷静にしているあの人からは想像もつかない。

あの人が家族になって三年、呼び方が陸さん、からお兄ちゃんに変わってから二年。なんだかんだで世話になって、迷惑かけて、心配させて、甘えて。

今日は悪いことをした。強くなろう。もう誰も心配しなくてすむくらいに。それでいつかお姉ちゃんを見つけたし、お兄ちゃんに恩返しするんだ。

前考えたのは無し。これが私の新しい、決意だ。

雲一つない夜空から差し込む月明かりはいつまでも優しく、私を包み込んでいたのだった。

第8話／雪羅（後書き）

どうでしたか？次回から新章夏休み編に突入します。いままで影が薄かったヒロイン達をメインに書いていきたいと思います。

誤字・脱字、感想などがございましたらご連絡いただけると幸いです。

第9話／ある夏のひととき（前書き）

ども、お久しぶりです。

ほのぼの系を書いてみたのですが、どうも日常を書くことが
ニガテなようで投稿が遅れてしまいました。

ではどうぞ。

第9話／ある夏のひととき

第9話／ある夏のひととき

└ 第9話・シャルロットの場合 ┘

side シャルロット

夏休みが始まって一週間、特にやることもなく暇を持て余していた。一夏はここ最近、第二形態移行したことを理由に倉持技研に呼び出されたり、この間現れた正体不明機関係で政府関係者に呼び出されたりで学園にいないことが多くなっていた。

今部屋にいるのは僕だけ。ラウラは出かける、といってどこかへ行ってしまったしセシリアはイギリスに帰省中。第9話は部活、鈴は友達と遊びに行ってるし白奈もない。

宿題は昨日までに終わってしまったからやることもなく、ベッドでごろごろしながらニュースを見ていた。

『次のニュースをお伝えします。昨日深夜、北アメリカ大陸アラスカ州に全長2kmに及ぶ超巨大隕石が落下しました。それにより周囲一帯は壊滅、被害の全容はまだ把握されておりません。』

そして画面が男性キャスターがしゃべっている映像からその巨大隕石の映像に切り替わる。遠くから撮影しているらしく2kmもある隕石がとても小さく見える。

『現場と中継が繋がっています。金井さん』

『はい、現場の金井です。私は今、落下地点から5 kmほど離れたところにいます。既に現場には各国から研究チームが続々と到着してきています。日本からも佐原総合科学技術研究所がいらっしやています、代表者の方にお話を聞いてみましょう』

カメラが動き、日本の国旗が掲げられているテントの中へ入っていく。中にはいくつもの機器が並び、そこでせわしなく研究員たちが動き回っていた。

『佐原総合科学技術研究所開発室室長の太刀花 陸さんです。お願いします』

『はい。それでは今回の件ですが』

女性キャスターと共に映し出されたのは、この間の臨海学校に特別講師としてきていた太刀花統括官だった。そういえば佐原科技研の開発班の班長とかだったっけ。

『というわけで、この隕石の謎を解明することは人類にとって大きな一歩になるでしょう。我々はそれにむけ』

いい加減飽きてきたんでテレビを消して寝返りを打つ。だってアラスカに落ちた隕石なんて僕には関係ないし。ぼんやりと天井を眺めているとふと、一夏の顔が浮かんた。僕にむかつて優しく微笑む一夏の顔が。

何かいいことがありそうだな、なんて思った数秒後、頭が現実に戻る。よく考えてみると一夏が笑ったからっていいことが起きるわけじゃないし第一これは妄想だ。はあ、なにを考えてるんだろうね僕は………。

大きなため息をついてベッドから起きあがり、サイドテーブルにおかれた時計を見る。針は十一時を指していた。そういえばそろそろお昼だな、どうしよ？そんなとき、来客を告げるチャイムが鳴った。

「はいどうぞ」

「シャルロット、今すこしいいか？」

ドアを開けるとそこには意外な人物が。私服姿の筈が少し強ばっ

た顔で立っていた。

「うん」

「そ、そうか。その、今からちょっと出かけるのだが一人で行くのもつまらないから、一緒に行かないか？」

「うーん……そうだね、ちよつと待ってて。今着替えてくるから」

箒に待ってもらい外出用の私服に着替えて部屋を出る。戸締まりは……一応しておこう、きつとラウラも鍵くらい持っていないはず。

「それじゃ、行こ」

「あ、ああ。そうだな」

箒は緊張した様子で僕の隣を歩いている。そんなに堅くなることないのに、どうしたんだろ？

それから電車に乗るまで終始この様子だった。

side 箒

電車に乗って数分、何の会話もなくただ時間だけが過ぎていく。

こういう場合いったいどんな話をすればよいのだろうか？服？芸能人？どちらにせよ私はよく知らない、だとしたらどうすれば……

・？

「ねえ箒、その服どこで買ったの？」

「え、ああこれはオリオンでセールのときに買ったものだ」

「へえーそうなんだ。かわいいね」

「あ、ありがとう」

「……………」

「……………」

結局会話はそこで途切れてしまう。せつかくのチャンスを逃して

しまった、うまく行けばこの気まずい空気をなんとかできたはずなのに！

ちらりとシャルロットの顔を見るとすこし悩んだような表情をしていた。ええい！今更ながらもつとバラエティー番組を見ておくべきだった！

そんなことを考えているうちに電車は目的地に到着してしまった。ああ、どうかこれ以上気まずくなりませんように。なんて心の中で祈ってしまう私だった。

side シャルロット

目的のデパートに入って数十分、今僕たちは地下にあるフードコートにきていた。といっても第との間には未だ気まずい空気が漂っていた。

ここに来る前にほかの衣料品売場やアクセサリー売場などを回ってきたが会話が長続きしないで、すぐに終わってしまう。そのたびに気まづくなり、今に至る。

「えっと・・・第はなににする？」

「き、きつねうどんだ。シャルロットは？」

「うーん・・・ナポリタンがいいかな」

注文し終えたところでまた途切れてしまう。どうしよう、何か共通の話題があればいいんだけど・・・せつかく誘ってくれたのにこれじゃ悪いよ。ファッションとかテレビ関係はあんまり詳しくなさそうだけど、まあニュースぐらいは見てるよね。

「ねえ第、今日のニュース見た？」

「ニュースか？朝部活に行く前にみたぞ」

「じゃあアラスカに落ちた隕石のことも知ってる？」

「隕石・・・？ああ、アレか。どこのチャンネルでもやっていたみたいだが興味がなかったからあまり見なかったな」

「だよね。僕も途中まで見てたけど飽きちゃったからけしちゃったよ」

それから食事中は話題が尽きなかったけどそのうち話題もなくなってしまう頃にはまた、気まずい雰囲気に戻りしていた。

なんか、お互い気を使いすぎてしまったのかもしれない。相手が知らないことがあれば教えてあげればいいし、そうすればもっと楽しく、こんな気まずくならなくてすんだはずだ。

「あの、シャルロット、その、今日はすまなかった、つきあわせてしまつて」

「え？」

side 篇

電車に乗って数分、前に座るシャルロットの表情は曇っていた。理由は明らかだろう。せつかくの休日だというのにつまらないことに時間を費やしてしまったのだから。

せめて、謝ろう。私的な用事なのだから私一人で来るべきだった、なのにシャルロットを巻き込んで不愉快な気分になしてしまった。彼女は優しいから、きっと謝らなくても文句一つ言わずに許してくれるだろう。でもそんなのイヤだ。

「あの、シャルロット、その、今日はすまなかった、つきあわせてしまつて」

「え？」

「せつかくの休日をこんなつまらないことに使わせてしまつて」

「……………うつん、そんなことないよ。楽しかった。なんか、お互い気を使いすぎちゃったのかな？今更だけど共通の話題を見つけるんじゃないくて新しい、お互いが知らないことを教えあつたってよかったのにね」

そう、苦笑しながら言ってくれたシャルロット。

今思ってみれば確かにそうだ。共通の話題だけを探し、お互いのことを知ろうとは考えなかった。

「また一緒にどこか行こうか。今度は僕がオススメの場所、連れてってあげる！」

「・・・ああ、また。よろしく頼む」

最後の最後だったが、私たち二人は心の底から笑えた気がする。そして電車の窓から差し込む朱色の光は、暖かく私たちを包み込んでいった。

） e n d ）

） 白奈・ラウラの場合 ）

s i d e 白奈

「しかし、これほど乗り心地が悪いとは・・・」

とある日の昼下がり、山道を緩やかに上っていく私のハチロク。いつもだったら上機嫌にもっととばすはずなのに、今日は隣に邪魔者が乗っていた。

「あのねーラウラ、人の車乗っておいてその物言いはないと思うけど」

「あ、いや悪かった。とはいえなぜこんな古いのに乗っているの？速度や性能を考えれば新しい方がいいぞ？」

「そりゃあそうだけど、半分趣味みたいなものよ」

とはいったものの、実際このハチロクも走行距離が20万kmに達しようとしている。定期的に桁人さんのところでメンテしてるけどそろそろエンジンもオーバーホールの時期がきている。ボディ剛性だって甘くなってる。

すでに101用4A-GEUの純正パーツなど当の昔になくなってしまっている。そのため今は桁人さんに頼んで同じパーツを作ってもらい、それと劣化したパーツと交換しているがそれでもそろそろ限界に近づいている。

「で、用事って何なのよ？」

「ん？ああ、上からの指示で佐原科技研に依頼していたものの受け取りだ。詳細は私も聞いていない」

そんなときだった。後ろから一台の車があおってきた。バックミラーをのぞくとそこに写ったのは大きなインタークーラー、流線型のボディ。

ああ、あの憎たらしい顔はGT-R R35。ニッサンが開発したピュアスポーツカーの代名詞であるGT-Rの一つ前の型、それでも最新のスポーツカーにも負けない性能を発揮するまさにモンスター。の二つ名にふさわしい車だ。あつと言う間にハチロクの横をすり抜け前にでるGT-R。

「・・・・・・ラウラ、ちょっととばすけど、いい？」

「まあ構わないがあんーうおっ！」

承諾を得た瞬間にシフトを下げ、アクセルベタ踏み。爆発的な加速で一気にGT-Rのリアバンパーに食いつく。

「な、なにをしている！いくら何でもこんな古い車では追うだけ無駄だ！」

「大丈夫。あんなクソ重い直線が速いだけの4WDにライトウェイトFRがダウンヒルで負ける分けないでしょうが！！」

「私にも理解できるように話せ！」

もうめんどくさくなったのでラウラのことは無視、目の前に集中

するんだ。

グイグイと離れていくR35。でも焦ることはない、この先からは勾配のキツい上にタイトなコーナーが連続する下りに入る。フロントスーパードライバーのR35には最悪な状況だ。

最初のコーナーへと消えていく35を追うようにしてコーナーへ突っ込んでいく。その速度136km/時。

「ちょ、ちよつと待て白奈！ブレーキ、ブレーキ！！」

「ブレーキ？ここじゃ使わないよ」

「何だと！？ちょー！！お、降ろしてくれえー！！」

フロント軽く振って貫性ドリフトに持ち込み、最小の減速だけでコーナーを抜ける。さあて、どうしとめるかな？

どうでもいいことだけど、それからラウラが口を開いたのは研究所についてからだった。

sideラウラ

研究所の駐車場、私はそこで深呼吸をしていた。べつにさっきの運転で酔ったわけではなく、まだ生きていることを実感したかったからだ。

今までにいくつもの戦場を駆け抜けてきたがここまで命の危機を感じたことはなかった。最初のカーブに突入した瞬間、ガードレールを突き破って死ぬんだと思ったがそれが不思議と車は道の上を走っていた。

それから3つほどカーブを抜けるとGT-Rはもう見えなくなっていた。

「あー、ごめんね。ここまで怖がるとは思わなかったから」

「バ、バカ者！貴様は加減という言葉を知らないのか！？」

「そついわれてもね」。私が攻める時はいつもあんな速度だから。

でもさ、そんな怖かった？戦場にいる方が怖いと思うけど」

「はぁ・・・戦場は自分の実力があれば生き抜けるがさっきのは
そうもいかんだろ」

「まあいいや。さっさと用事すませちゃいましょ」

「ああ、そうしよう。帰りはふつうに運転してくれよ」

乱れた髪をなおしながら私たちは研究所の中へと向かった。

side 白奈

途中でラウラと別れ、私は桁人さんのラボへと向かっていた。

扉の電子ロックを解除して関係者以外立ち入り禁止エリアへと入
っていく。ちなみに関係者、とは私とお兄ちゃんのことだ。

廊下は相変わらず薄暗く、ほこりっぽい。そして廊下の一番奥に
ある部屋、そこにこの主が暮らしていた。

「桁人さん、取りに来ましたよ」

「ん？ああ白奈か。よくきたね、もう準備できてるよ」

パソコンのディスプレイの明かりに照らされた痩せた桁人さんの
顔は少し笑っていた。部屋の奥には大きなコンテナらしきものが一
つおいてあった。

「白鉄用パッケージ『紅月』、臨海学校までに間に合わなかったか
らね。あとで使ってみてくれ」

「ありがとう。スペックは？」

「試作型の輻射波動兵器だよ、装備が追加される以外はデフォル
トのまま。白式の第二形態で発現した複合兵器『雪羅』をモデルに作
ったんだ。見てくれ」

大型ディスプレイに映し出されたのは巨大な右腕。といっても普
通のものではなく、機械的な腕だった。

「輻射波動コンデンサーを内蔵して安定した供給が可能になった

し、爪も斬撃能力を追加しておいたよ。それに肘のところで折り畳まれてるから展開すれば2mくらいには鳴るんじゃないかな。とはいえ唯一の欠点といえば完璧なゼロレンジウエポンになってしまったことかな」

「どういうこと？」

「輻射波動は零距离でしか効果を発揮しないんだ。それが今一番問題になってる」

「あー、そのへんは腕でカバーするから。さて、そろそろ帰りますか」

「そうか。それじゃあ」

量子変換の終わった白鉄を受け取り、部屋を後にした。

sideラウラ

物を受け取り、白奈より一足早く研究所からでてきた。日は暮れ、空はオレンジに染まっている、だいぶ時間がたったようだ。

駐車場からは夕日色に染まる町並みが見えていた。ここから見ると今まで見慣れた町はまた違ったふうに見える。

今までドイツにいた頃はこんな感情が生まれたことはない、あまつさえあんなに楽しく同世代の女子とはなしたことすらなかった。

落ちこぼれの烙印を押され、そこから這い上がり代表候補生になって、学園にきて一夏に負けて。

負け、という物はただの汚点、そんな風に思っていた。しかし一夏に負けて『負け』の意味が分かったような気がする。

「……………ああ、いい風だ。」

「ラーウラ！そろそろ帰るよー」

「ああ、今いく」

「？あれ？なんか機嫌いいね。いいことあったの？」

「まあ、少しな」

そして車が走り出す。さっきまで気になっていた乗り心地の悪さも今では気にならないほど機嫌がよかった。

こんな、心地よい時間がいつまでも続きますように。

がらにもなくそんなことを祈ってしまいたい、そんな気分浸っていたそのとき。

「ねえラウラ、足周りいじったからとばすね」

「なっ！？ちよ、ちよっと待てとばすなといったはずだ！そ、それにまだ心の準備が――！！」

ひとつ、決めた。今後一切、もう二度とこいつの運転する車に乗るものか。

） end ）

第9話／ある夏のひととき（後書き）

どうでしたか？なんか視点変更が多いうえに短いのを二つ入れたのがなんとなく失敗だったように思えます。

これからいくつかほのぼのとした日常が続きます。もしかしたら少し遅れ気味になるかもしれませんがご容赦ください。

質問、誤字・脱字、感想などがございましたらご連絡いただければ幸いです。

第10話／勝手に宇宙一決定戦？（前書き）

ども、こんにちは。学校が始まり書く時間が大幅に削られてしまったため投稿が遅れました。私ごとですが申し訳ありませんでした。

そのためいつもの2割ほど増し（？）したので、どうぞ！

第10話／勝手に宇宙一決定戦？

第10話／勝手に宇宙一決定戦？

side 一夏

夏休み中盤、いい加減休みが飽きてきて学校が恋しくなってきた頃、暇だからといってこの炎天下の中出かけるのは正直気が引ける。おかげでここ一週間は部屋に籠もりつきり、そろそろ体がなまってきたような気がする。

体を動かしたいのは山々なのだけど最近怠け癖がついてしまったのかどうしても一人では長続きしなくなってしまっていた。

ピンポン

そんなとき、来客を告げるインターホンが部屋に鳴り響く。

「はい、どうぞ」

「やつぽー織斑君、暇してるみたいだね」

ドアを開くとそこには見慣れた制服姿の白奈がにやにやしながらたっていた。何かいいことでもあったのか？

「白奈、どうしたんだ？制服なんか着て？」

「第三アリーナでさおもしろいことするんだけど、一緒にこない？」

「アリーナで？なにをするんだ」

「ちょっとした遊びなんだけど、優勝者には賞品もあるよ。どうか、体もなまってきた頃だしそろそろ鍛えなおしてもいいんじゃない？」

「あ、それ俺もついさつき考えてた。それじゃあ着替えて第三アリーナにいけないのか？」

「うん。それじゃ先にいつてるから」

「おう」

白奈と別れ、制服に着替えて部屋を出る。しかし、俺はまだ知らなかった。この選択がこの夏最大の悲劇を招くことになるなど・・・。

『お集まりのみなさん、大変ならくお待たせいたしました！これより第一回勝手に宇宙一決定戦を開始します！』

おおおおお！

アリーナにつくと、そこは異様な熱気に包まれていた。観客席の一角にはクラスのメンバー、そしてスピーカーからはのほんさんの声が聞こえる。しかも全員なんか妙にテンションが高い気がする・・・。なにがあつた？

『ちなみに、勝手に宇宙一決定戦とは勝手に宇宙一強い人を決める大会です！』

そのまんまじゃん！少しは捻ろうよっ！

『ルールはかんたん、バトルして相手のエネルギーをゼロにしたほうが勝ち！』

要するに模擬戦ってことか。なんか少しほっとしたぞ、変なことやらされなくて。

『それでは選手の入場で！まず東日本代表篠ノ之 篤』

向こうのピットから制服姿の篤が姿を現す。そのまますみ、アリーナの中心にある木箱の前で止まる。

『次にドイツ代表ラウラ・ボーディヴィツヒ、イギリス代表セ

シリア・オルコット』

第に続き、ラウラとセシリアがピットからでてきて第の隣に並ぶ。

『続いてフランス代表シャルロット・デュノア、中国代表鳳

鈴音』

さらに続いて・・・あー、なんか説明するのもめんどくさくなってきた。とりあえずシャルと鈴が木箱の前に並ぶ。

『最後に西日本代表雨原 白奈、男代表織斑 一夏』

俺だけ地域じゃねえ！！なんなんだよ男代表って！どんな区分だ！？などと心の中でツッコみながらもピットから出ていき、みんなの隣に並ぶ。

『それでは第一回戦の組み合わせを発表します。モニターにご注目』

のほほんさんの声の通りにアリーナの壁に埋め込まれた超巨大モニターに目を移すと、そこにはトーナメント表が映し出された。最初の枠にはセシリアとシャルの顔写真があった。その次に鈴と白奈、第とラウラで最後にシードで俺。

『第一回戦はせっしーとでゅっちーにけってい！』

おおおお！

また会場から歓声（？）があがる。だから何なんだこの熱気は？というかいつの間にか端っこに千冬姉と山田先生までいるし・・・

とにかく一回戦があるため、残りの選手は控え室に引っ込んでいた。

sideシャルロット

「いくら友人といえども容赦はいたしませんわよ？」

「もちろん。手を抜かれてもつまらないからね」

セシリアと僕はISを装着した状態でアリーナの会場に浮かんでいた。

『それではバトルスタート！』

のほほんさんの合図とともに僕らはそれぞれ後ろに下がり、相手と距離をとる。

基本射撃を得意とする場合、こういった公式ルールでの試合では最初に相手の出方をうかがうのがセオリーだ。そうやって相手の手の内を見破ってその弱点を突き、撃破する。

でも、僕はあまりそういうのは好きじゃない。だから今回は先手必勝の攻めで行かせてもらおうよ！

「もらいましたわ！」

的確な射撃で確実に僕を捉えてくるセシリア。確かにすごいけど、的確だからこそ予測しやすい！

すべての射撃を紙一重で回避しながらこちらもガルムで応戦。ちょうどマガジン一つ撃ち終わったところ、セシリアからの攻撃が牽制だけになってきた。

瞬時加速で距離を詰め、ブラッド・スライサーできりかかる。

「くっ！やりますわね！」

「そっちこそ、ここまで長引くとは思ってなかったよ！」

何度か斬りあってから隙をみてレイン・オブ・サタデイを連射。危険と感じたのかセシリアが自分の間合いに後退し始める。そんなのだからだよ？

高速切替で再度ブラッド・スライサーを呼び出し、また間合いを詰める。そしてさっきと同じように斬りあって今度はガルムを乱射、はなれたらまた斬りかかる。

砂漠の逃げ水。僕が得意とする技の一つで長距離型のセシリアにとってはかなり相性の悪い技。砲身が長い銃は近づかれると小回りが聞かないぶん不利になる。

さて、どこまで耐えられるかな？

sideセシリア

シャルロットさんの猛攻が始まって数分、

耐えるのでやっとな状況が続いています。このまま長引けばこちらがどんどん不利になっていくのは目に見えていること。何とかしてこの戦況を打開しなくては！

もう一度離れた瞬間、シャルロットさんが近接ブレードを構えてこちらへ向かって突進してきたところを一か八かで瞬時加速を使い、その隣を紙一重で抜ける。

「なっ！」

「それでは、反撃させていただきますわ！」

いままで収納していたブルーティアーズを展開し、オールレンジ攻撃を仕掛ける。ビットからの攻撃と、私の狙撃で着々とシャルロットさんのエネルギーは削られていきます。私とシャルロットさんとのエネルギー差は明らか、このままならいける！そう確信したときでした。

「これで！」

「そうは行かないよセシリア！」

一斉射撃を回避し、シールドを構えて突撃してくる。しかし、第二世代のシールドなどこのブルーティアーズの前では無意味ですわ！スターライトMk.？を正面に構え、発射。そのままシャルロットさんのシールドを貫通した瞬間、シールドをパージしたシャルロットさんが上空から向かってきました！

「これで終わりだよ！」

射撃じゃ間に合わない、近接ブレードでは。悩んでしまった一瞬の隙、それを彼女は見逃しませんでした。シールドに隠れていた切

り札『灰色の鱗殻』を振りかざし、一閃。
ブザーが会場に鳴り響き、私のエネルギーがゼロになったことを告げる。

『しょうしゃ〜でゅっちー!』

そして会場中から拍手が巻き起こり、第一回戦が終了した。

side 白奈

試合が始まって数分、今かなり追い込まれていた。右手が輻射波動機構になってしまったおかげで片手でしか不知火を使えない。それに対して鈴は動きが速い上、近接戦・中距離戦をうまくこなしてくる。

それに一番困ったのはあの衝撃砲だ。弾丸が見えない上ほぼ360°。どこでも撃ってくるから対処が難しい。そのため輻射波動機構の機関を何度も使ってしまうエネルギーは60%を切ってしまった。何とかして

「ほらほら! 防戦一方じゃ勝てないわよ!」

「わーってるわよ! こっちだって作戦があるのよ!」

なんて強がってみても結局作戦なんてない。淡雪は片手で使うには重く、雑な動きが増えてしまうので近接戦は輻射波動機構のクローだけ。今は我慢して相手の弱点を見極めるんだ!

「せやああああ!」

「ぐっ……」

一気に詰め寄られ、最上段からの一撃。何とか防いだものの勢いまで殺しきれずに体勢を崩してしまう。その隙を鈴が見逃すはずがなく容赦ない追撃を浴びせてくるが間一髪で体勢を立て直し、回避する。

くそっ、かなり危なかった。今の一撃を食らってたらそのままお

しまいだつたな。

「なかなかやるじゃない。でも、これでおしまいよ！」

「ま、まだまだあー!!」

双天牙月を構え、突っ込んでくる鈴を不知火で牽制しながら一定距離を保ちながら逃げ回るもその努力も空しく最上段からの一閃が迫る。しかし今度は回避に成功し、鈴の後ろをとることができた。

あ、もう弾がない。使いすぎたか……。まあいいや、必要な情報はそのつた。そろそろ反撃と行きますか！

「ええい！往生際が悪い！」

「甘い！あなたの弱点、見切ったあー!!」

防御のために淡雪を一応呼び出ししておき、一気に詰め寄っていく。そして何度かの斬撃の応酬。しかし見事な動きですべての攻撃を防いでくる。代表候補生の肩書きは伊達じゃないか。

さて、どうするかな。弱点があるとはいえほとんど気にならないレベルだ。こっちの活動限界も近づいてる……。ってことは次が最初で最後。上等じゃない！伸るか反るか。ワンチャンス、チラチラと見え隠れする針の穴のような突破口を、突く！

「そこっ!!」

「んな！」

連結を解除した双天牙月の片方を輻射波動機構でつかみ、輻射波動を浴びせる。膨大な熱量を持つ真紅の光を浴びた刃はたちまち膨れ上がり、爆発。

爆風で視界が途切れた瞬間にもう一度右手を伸ばして今度は衝撃砲をつかむ。そして双天牙月と同じようにあっけなく爆散する。しかしその隙に鈴は私の間合いから離脱した。

「まさかここまでやられるなんて思ってたわ」

「鈴こそ。これはまさかの展開だよ。輻射波動をつかうことになるなんて」

—————エネルギー残量 31%、稼働可能予測時間 約4分

もう後がない。さっきので仕止められなかったのがいちばんの誤算だ。あーもう！あんなに不知火パカス力撃たなければよかった！なんて考えても後の祭。今あるのは淡雪と右手だけ。さあ、ラストアタック！

迫りくる双天牙月の片割れを淡雪で反らし、後ろに回って右手を伸ばし、鈴の腕を掴むことに成功した。勝った！そう、確信したときだった。

「―――」 輻射波動機構に異常発生 振動管内圧力低下により輻射波動精製不可能。

なんだってえ！！そんなまさかここにきてこれはないでしょ！とはいえ原因に心当たりがあるのが否めない。なんとまー運がないこと………。

振動管とは輻射波動機構の肘から先の部分を指す。この管の内部の粒子に一定の振動を与えてやると波動が発生する。これが輻射波動でその粒子を閉じこめていた管が破損し、これ以上輻射波動を精製できなくなってしまった。つまり……

「残念だったみたいね！さよなら、白奈！」

「ちょ、タンマ！待って待って！」

「問答無用！！」

それから先、怒濤の衝撃砲ラッシュにあい、私のエネルギーは程なくして底をついたのだった。

るとかつて白奈が言っていたけどそれってどうなるんだ？

『あ。そういえば、賞品は、おりむー以外の人みんなにあげるから、
ってことになったからね』

やっぱりそうだな、当然俺はもらえないよな。ん？賞品って何
なんだ？

「のほほんさん、賞品って何なんだ？」

『え、それは、最下位の人が優勝した人のいうことな、でも
聞いてくれる券だよ』

「……ん？あれ？優勝者が俺以外なんだろ、つまり一位タ
イがええと……6人つてことは俺は7位。……最下位俺じ
やねえか！？ああ、いやな予感……」

「貴様等、すでに閉館時間がすぎているんだ！さっさと片づけて寮
に戻れ！」

しびれを切らした千冬姉の一言にきびきびと動き出す俺ら。夏休
みだつていうのに出席簿アツタクはゴメンだ。

というわけで生徒一丸となってアリーナの片づけを進めたのであ
った。

side 千冬

生徒たちがアリーナの片づけを終えるのを見届け、私と山田先生
は職員室へ戻った。5時を回っており日は傾き、学園の廊下は赤く
染まっている。職員室はすでに人気はなく、私たち二人だけしか残
っていないかった。

「織斑先生、ちょっと質問いいですか？」

「構いませんが。何ですか山田先生？」

「なんで生徒たちにアリーナの使用許可を出したんですか？そもそ

も夏期休業中は施設の使用は原則禁止ですよ」

「それくらい知ってます。休みが長く、ちょうど体もなまってきた頃だと思ったからですよ。2学期が始まった時点で腕が落ちている、なんてことはできれば避けたいので。それにあのテンションのまま放置しておいてどこかで問題を起こされてはたまったもんじゃありませんよ。これで発散できるならよしとしましょう」

「ですから」

「原則禁止、でしょ？原則」

「うつ・・・以外ですね。織斑先生」

「どんなルールにも案外抜け道があったりするんですよ。山田先生」
実を言うと本当は暇を持て余している生徒たちへのささやかなプレゼントのつもりだったけど連中がどう受け取ったかどうかは知らないしこれを表に出すつもりもない。

「とか言つて、実は生徒たちを喜ばせようとか考えてたんじゃありませんか？」

「・・・・・・・・・・」

いつもはトロい人だが時たま鋭い指摘をしてくる。

「もしかして図星ですか、って織斑先生、な、なぜ私の首に手をかけるんですか！？」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「え・・・？で、ですから話が・・・・・・・・うぐっ！く、くるしい・・・ギ、ギブ、ギブです！」

タップを無視してぎりぎりの力加減で容赦なく山田先生にヘッドロックをかけつつける。そういえばこんなやりとりが前にもあったような？

まあいい、奴らが楽しんでくれたのならそれで。

アリーナの片づけが終わったあと、出場したみんなが俺の部屋に押し寄せてきた。もちろん俺をこき使うために、だ。嗚呼、厄日だ・
・・・。

「ちょっと一夏、何手え休めてんのよ！さつさとやりなさい！」

「あー・・・・・あのな、鈴、宿題くら」

「うつさい！なんか文句ある？」

「いいえ、ありません」

今俺がやっているのは鈴の宿題の残り。英語と数学は終わっているみたいだが苦手教科である現代文と古典がほとんど手をつけていない状態で残っていた。まああいつからすれば日本語は外国語なんだし日本人の俺だって苦戦するようなものだ、仕方ないか。・・・あれ？じゃあセシリアとかシャル、ラウラはどうしてるんだ？

「ま、まったく、進みが遅いではないか。よ、よし、私がて、手伝つてやるう・・・。」

「お！サンキュ簞」

「ちよつと簞！あんたは引つ込んでなさいよ！」

「何を言っている！一夏だけに任せておいたら明日の朝までかかっても終わらんぞ」

「あー・・・・・それもそうね」

・・・・・あれ？今軽くバカにされなかったか！？しかもそれを肯定されたし！

「きつと気のせいだよ一夏」

「そうだ。細かいことは気にするな」

シャルとラウラが慰めてくれたようなかんじだったが実際は慰めにはなっていない。というか声に出さなかったはずなのに・・・よくわかったな二人とも。

「まあ要するに織斑君がバカだつて言いたいんでしょ？」

グサツ！！

「ストレートに言わないでくれ！！そんなもってひとまず平均はいつてるわ！」

「でもみんなの中ではビリだね？」

グサグサッ！！

「いいさ、どうせ俺は晩年ビリだよ！」

「あははは！ゴメンゴメン、ついおもしろくってさ」

おもしろいからって成績関係でいじらないでくれ、一番グサツとくる……。

とにかく、それからみんなに手伝ってもらい宿題（鈴の）を終わらせてボードゲームやらカードゲームにつきあわされた。もちろんイヤ、という意味ではなく例の罰ゲーム的な賞品と自分の意志だ。

そして時計の短い針が10をすぎた頃には部屋は静かになっていた。

「ふいー、それにしても今日は遊んだわね」

「だな。夏休みの中で一番楽しかったかもしれんな」

「あーほらみんな、そろそろ開きの時間よ。早く帰らないとまた織斑先生にどやされるわよ」

「それもそうですわね」

「そういうわけだから、僕たちはおいとまするねー夏。ほらラウラ、いくよ。……ラウラ？」

ラウラはシャルの呼びかけに答えることなく俺の背中に寄りかかってすーすーと寝息をたてていた。ちょうど真後ろにいるため顔は見えないがどんな顔をしているかは簡単に想像できた。

「ははは、起こすのもかわいそうだよ。そっとしておいてやろうぜ」
「ダメ、つれて帰る」

「お、おう」

珍しく迫力のある顔で迫ってきたシャルに驚き、おもわずうなずいてしまう。

シャルがラウラを負ぶってみんなはそれぞれの部屋に帰っていった。それから部屋の片づけをして、シャワーを浴びて寝る支度をさせてからテーブルに座り、一服する。

今日はなかなかいい日だったと思う。なまっていた体を鍛え直せたり久しぶりにみんなと一緒に遊べたし。夏休みに入ってからというものの倉持技研と佐原科技研に呼び出されてロクに遊びに行けなかった。それとストレスもたまってたし。

政府やアメリカ軍の人から福音戦の口止めやそのときに現れたアンノウンのことを何度も聞かれたのもそのひとつだ。

そういえば、改めて考えてみるとおかしい。佐原科技研の政府への発表はどこかの研究所の試作機の可能性大とのことだが暴走していたのには目標が明確すぎていた、それに明らかな最新型だった。その後ガレスと名前が付けられ、現在も佐原科技研に保管されているそうだ。

・・・・・・あーもう！なんちよつと混乱してきた！もうこのことについて考えるのはやめだ。少し夜風にでも当たろう。

side 陸

「そういうわけだ。速急に解決してくれたまえ太刀花君」

「はい、承知いたしました。質問をひとつ、よろしいでしょうか？」

真っ暗な部屋を中心に立つ俺を取り囲む6つの空中投影型ディスプレイ。そこには顔ではなく翼の生えた盾とクロスした剣のエンブレム。これは剣取りし聖者の重役たちが使う特秘回線を意味していた。

「かまわん。いいたまえ」

「ありがとうございます。私たちが回収する物品とは一体？」

「んゝ、とあるコンテナでねゝ」

「その中身は？」

「太刀花君、この世界には知らない方が幸せなことがあるのだよ。わかるかね？」

つまり中身については触れるなっでことか……。何を隠してるんだ、連中は？」

「…………ご忠告、ありがとうございます」

「それでは頼んだよ。速急に穩便に、ね？」

「ハッ！」

そしてスクリーンが消え、部屋が本当に真つ暗になる。でも、どうせ部屋には何もおいてないし扉の位置も把握しているから動くのには何の支障もない。それにしてもそろそろ見切りをつけるべきか、あいつ等にも。

「お疲れさまです。どうでしたか？」

「どうもこうもねえよ。いつも通り剣取りし聖者の老体どもに面倒事押しつけられたただけだ」

律儀にあいつ等との話が終わるまで待つていてくれた実沙紀と一緒に零番通路を歩きながらさっきのことはなす。

「それに今回は穩便に済ませつて。だから、自衛隊は使えない」

「そうですか。ではどうなさるおつもりですか？」

「…………不本意だけど、IS学園の連中を使つわ。あと、司と静音もだ」

「巻き込むつもりですか？彼女たち、いえ彼らを」

痛いところをついてくる。俺だつてそれは氣にしていたし一番避けたところだ。これは俺たち大人の事情、あいつ等子供を巻き込むのは筋違いつてやつだ。

「そんなつもりはないんだけどな。まあ何とかやつてみるさ、こんなんでも大人なんだよ、俺は」

「はあ、その自信はどこから湧いてくるんですか？」

「あつははは！俺がいない間は部隊のほう、よろしく頼んだぞ」

「いつものことです、お任せあれ」

こうして三日月島の夜は更けていった。そしてこのとき、大変な間違いをしてしまった事にまだ俺は、気づいていなかったのだった。

side 一夏

「お、織斑君？」

「白奈、おまえ泣いてたのか？」

夜風に当たろうとやってきた寮の屋上、そこにはすでに先客がいた。ドアが閉まる音に気づいてこちらに振り向き、目があっけま
い今に至る。

「えっと、どうしたの？」

「そりゃあこっちのセリフだ、何かあったのか？」

「うんん何でもない。じゃあ私、戻るから」

そういつて赤く腫らした目をこすりながら立ち上がり、俺の横を
通り過ぎていくが思わずすれ違いざまに手をつかんでしまった。

「待てよ、泣いてるのに何でもないってことないだろ。力になれる
かわかんないけど話し相手くらいにはなってやれるから」

「………うん」

少し考え、決心したらしく、その場に座り込む。それにあせて俺
も隣に座ろうとするが背中合わせになつてほしいとのことで仕方な
くそのまま座り込む。

「実はね、昔のこと思い出してたの」

「昔のこと？」

「うん。ここにくる前、というより日本の代表候補生になる前はと
ある組織の研究所にいたんだ。なんでも素質がある、だとかでいろ
いろ辛い実験とかテストとかさせられて、で、結局ダメだったわか
ったら処分するとか言われたところでお兄ちゃんに拾ってもらった

「んだけどね」

お兄ちゃん……？ああ、陸さんの事か。ってことは陸さんもその研究所にいたのか。

「そこでいつも一緒にいた男の子がいてね、ほら、前一緒にプレゼント選んでもらった。そいつはいつも私と遊んで、食事して、寝て。今はどこにいるか知らないけど、そいつが織斑君に似ててさ、遊んでるうちに昔のこと思い出しちゃったんだよね」

「そうだったのか……」

正直、この手の話は深入りしない方がいい。慰めようと深入りしすぎて逆に逆鱗に触れてしまうかもしれないからな。

でも、まさかこんな過去があったなんて。思っても見なかった、というかふつつ想像できない。だって、いつもの白奈は悲しい記憶なんてないみたいに元気だから。

夜の風が優しく、俺たちの頬を撫でていく。秋の訪れを予感させるようにどこからともな虫の声があたりを包む。

「ふう、なんか話してみたら少しラクになったよ。やっぱり不思議だね、君は」

「不思議？俺が？」

「うん不思議。さてそろそろ遅いし、私は戻るね。ありがと、織斑君」

そして次の瞬間、頬に柔らかいものが当たるのを感じた。横に見えるのは白奈の顔、つまり頬に触れてるのは……

「じゃあね！」

言葉を返す間もなく、白奈はいつてしまった。な、何なんだよ今の……。顔が近くにきて柔らかいものが触れた。うん、この感触は前に経験した、あるものによく似ていた。あれは唇だったけどね。

「ね、寝よう……」

今夜はほんとに寝られるのだろうか？そんな不安がよぎるほど俺の頭の中は混乱していたのだった。

そして次の日、白奈にこのことをからかわれ、ひどい目にあったのは言うまでもない。

第10話／勝手に宇宙一決定戦？（後書き）

どうでしたか？きっと皆さまが疑問に思われたことについて補足させていただきます。

・まず勝手に宇宙一決定戦とは引退した先輩たちと部活の中で行っていたアホな仲間内だけの小さな大会みたいな物です。全員が宇宙一を決める決勝戦に参加し、戦うという設定です。深い意味はありません。

・今回出てきた新キャラと新用語についてはもう少し物語が進みましたら更新させていただきます。

・輻射波動関係につきましては私のオリジナル要素が含まれていまるので間違いではありませんw。

と、いうわけでこのあたりで失礼させていただきます。誤字・脱字、感想などがございましたらご連絡いただけると幸いです。

第11話／夏の終わりを告げる声（前書き）

どうも、こんばんわ。そろそろ物語が動いていきますので今後も
よろしくお願いします。

ではござい。

第11話／夏の終わりを告げる声

第11話／夏の終わりを告げる声

side 白奈

「で、なんで遊園地なんだよ」

「えゝ！楽しいじゃん」

「小学生か！」

つい先日行われた勝手に宇宙一決定戦の賞品の効果を使い、今私と織斑君は遊園地に来ていた。きているのは東京にないのに東京と銘打っている某ネズミのテーマパークではない、地方にある小さな、ほんと小さな遊園地。ただどこにはいくつか思い出がある。

「さてどこからいこうか？」

「どこでも構わないけどあんまり遅くまでいるのは勘弁だぜ」

「わーってるって！んゝ、じゃああれからいこうか！」

「・・・・・・あれか？」

私が指さしたのは小さな子供向けのジェットコースター。一応少し離れたところには普通のジェットコースターもあるけど、これがよかった。

「うん。ここはね昔、お兄ちゃんとよくきたんだ。でもねここ、実は明日で閉園なんだって。だからせめてつぶれる前にもう一回きたかったの」

「・・・・・・俺で、よかったのか？」

「うん。お兄ちゃんは忙しいし、やっぱりこういうところは男の人と一緒にきたいから」

少ししみりとした雰囲気になっちゃったけど、気を取り直して乗り込む。乗っていた時間は数分しかなかったけど、それでも楽し

かった。

それから観覧車、コーヒークップに乗ってお昼を食べて、メリーゴランドに乗って――傍目からみたら私たちはどう映っているのかな？仲のいい兄妹？それとも、恋人同士？

そう考えた途端、自分でも顔が赤くなるのがわかった。まったく、なにかんがえてるのかしら、私は？

「白奈、どうかしたか？」

「べ、別にいい！何でもないわよ！」

「顔赤いぞ？熱でもあるのか？」

「うるさい！織斑君のことなんか好きでも何でもないんだから！！」

「はあ！？おまえ、なにいつてるんだ？ほんとに熱あるんじゃないか！？」

ぐあつ！墓穴掘った！！今の発言って最近流行ってる、確かツンデレとかっていうやつじゃないか！？

これじゃまるで織斑君のことが、好きみたいじゃん………。
「……ほんとに大丈夫。ほら、次いくよ！」

今のことをごまかすように急いで次の場所、お化け屋敷へ歩きだした。赤く火照った顔なるべく見られないよう、織斑君の一步前を歩く。そして数分後、敷地の端のほうにあるお化け屋敷に到着。

「なあ、ほんとにここ、入るのか？」

「う、うん。一応ここも昔入ったから、いやでもな……」

ここのお化け屋敷は数年前、一発逆転を狙った遊園地がとある有名プロデューサーに頼んで改築した特別なものだ。当時はその手のマニアに人気で一時期は大盛況だったらしいけど今はもうその面影はなくなっていた。

ちようどお兄ちゃんときたときに工事が終わって始まったときだったよな。中はほとんど覚えてないけど。

「……いくよ！」

「マジかよ……」

顔がひきつる織斑君の手を引いて、受付をすませて中へ入る。初

っぱなの入り口からなんかヤバそうな雰囲気出してたけどせっかく入ったんだからここは進まなくては。

ここの設定は昔、すんでいた女性がその夫の逆鱗にふれて足を切られたしまい、その幽霊が足を求めてさまよっている、というものらしい。

ああ、早く出たい。勢いで入っちゃったけど実際こういうの苦手なのよね……。織斑君、頼りにしてるよ！

side 一夏

今日の白奈はなんか、いつもと違う。変、というわけではなくいつも以上に女の子らしいっていうか……。

私服も前、一緒に出かけたときのようなズボンではなく赤と黒のチェックのミニスカートに臨海学校のとくにきていた白い薄手のパーカー。

特になんでもないのになぜか白奈のことを意識してしまう。

「お、おい白奈、くつつきすぎだ、離れてくれないか？」

「無理よ！だ、だって、怖いんだもん！頼りにしてるからね、逃げないでよ！」

そんな無茶な。俺だってこの手のものはどちらかと言えば苦手だ。すぐにでもここから出ていきたい、しかし怖がる女の子一人置いて逃げ出すなんてあり得ない。

「きゃあああああ！！今さっきそこなんか通った！！」

「だからくつつきすぎ！当たってるって！」

なにが当たってるかって？もちろん胸だ。セシリアや箒ほどじゃないが、しっかりと柔らかい触感が俺の二の腕を包んでいる。うれしいのやら気まずいのやら……。とにかく複雑な気分だ。そしてお化け屋敷をでるまで終始この調子だった。

「あー怖かった。いやーこれ、絶対一人じゃ入れないわ」

「以外だな、お化け屋敷が苦手だなんて」

「あのね、作りものだってわかっててもリアルに想像したら怖いでしょう？つーかそれ以前にすでに死んでるものは絶対ダメ」

「生きてれば問題ないのか？」

「とーぜん。あ、でも節足動物とかは生きててもダメ」

何というか不思議だ。弱点がなさそうに見えて苦手なものが意外と女の子らしい。そう思ったら思わず顔がほころんでしまう。今までからかわれ続けてきたことだしこの際ちよつと反撃してみるか？「な〜にニヤニヤしてるのよ？まさかヘンなこと考えてなかった？」「違うつて、なんか白奈がかわいく見えてさ。あ、いや別にいつもはかわいくないってわけじゃないぞ」

「んなつー！か、かわいい・・・！」

顔を真っ赤に染めて硬直する白奈。なにか変なこといったか？

「・・・ちよ、ちよつと飲み物買ってくるからそこで待ってて！」

「おい白、奈つて行っちゃった」

仕方なしにすぐそこにあるベンチに腰掛けると疲労が一気に体中を駆け巡った。そういやなんだかんだで結構動いたよな、今日は。ジェットコースター乗って、コーヒークップ乗って、メリーゴーランドで順番まっつて。

なんて一日の出来事を思い出している、そのときだった。

「よろしいですか、織斑 一夏君ですね？」

「え・・・？」

突然かかった見知らぬ声。綺麗な声だがやや低い、男か？顔を上げると、そこには不敵な笑みを浮かべた長身の銀髪男が立っていた。誰だ、こいつ？

「そうですけど、何か？」

「ふふふ、君に話があつてきたんだ」

「ちよつと待ってくれ。その前にあんたは一体何者なんだ、ていう

かなんで俺の名前を

！？」

「ああ、これは失礼。僕の名はレイ・レナード、『エンジェルコマンダー天使の軍隊』の
しがない戦闘員さ」

「『エンジェルコマンダー天使の軍隊』……？」

「平たくいえば悪の組織つてやつだよ。もつとも数年後には英雄か
もしれないけどね」

『エンジェルコマンダー天使の軍隊』。聞きなれない言葉だがそれを口にした瞬間に放
たれたいやな感じがあいつを敵だと認識させてくれた。

いつまでも座っていては不利だ。何かあってからでは遅いのでゆ
っくりとベンチから立ち上がる。

「どういうことだ、数年後英雄になるかもって？」

「それはまだはなせない。今日は宣戦布告にきたんだ」

「宣戦布告……？なんで俺に？」

「いずれ君とは刃を交わすことになる気がしてね。だからさ」
なにをいつてるんだこいつ？刃を交わす？俺は一般人だぞ、戦う
ことになるわけ無いだろ。それ以前に普通の男には――

「ISを使えない、かい？」

「ツツ！！」

何で口に出してないのに――

「わかるんだ？でしょ。さあ？なぜでしょう？」

「な、何なんだよおまえ……」

「君の疑問に答えてあげるよ。まずISはもう女性だけの武器じゃ
ない。そのための研究はもうすぐ完成するよ。次に、僕は普通の人
間じゃない。人間を超越した存在、『インペイター超越せし者』だ。もつとも、
人工的な形で作られた存在だけだ」

正直言ってもうなにがなんだかわからない。ISが女しか使えな
い時代が終わる？何なんだ、それ？それに超越せし者って？

「口で言っただけじゃわからないだろ？ほら、こいよ。ISでも何
でも使って僕を倒して見ろ、できるなら、ね」

やすい挑発だとわかつているのについカッとなってしまふ。右手を前につきだし、白式を呼び出しする。

「来い、白式!!」

「ははっ！それでいい！」

雪片を構え切りかかつて行くがバックステップで軽々よけられてしまふ。それから何度も何度も攻撃をするけどすべて避けられるまるで先が見えているように。

「どうしてっ！」

「君の思考が読めるんだ。詳しいことは佐原科技研に聞くといいよ。この手の研究は国内じゃあそこが一番だ」

「くそ、どうすれば……」

「だからいずれまたあうことになる。もうすぐで僕のISも完成するから、そしたらまた。そのときまで今日のはお預けだ。じゃあね 織斑 一夏君、僕らは一天使の軍隊（エンジェルコマンダー）、よく覚えておくことだ」

悠然と去っていくレナードの背中を見つめながら白式を解除する。埋められない実力差、越えられない大きな壁。そんな何かをあいっから感じられた。

……そういえば白奈はどうしたんだ？

side 白奈

「はあ、どうしちゃったんだろう、私……」

織斑君と別れてから急いでトイレに駆け込み、顔をチェック。少し時間がたったというのにまだ顔は赤くなっただまだった。

いきなり、不意打ち的にあんな……かわいい、とかいうなん

て、ずるい。ま、織斑君のことだから特になにも意識しないでいったのだらうけどね。

（い、いやでも、かわいいって、女の子らしいっていわれたんだよね・・・えへへ、案外捨てたもんじゃ無いわね）

そう考えるとどうしても頬がゆるんでしまう。その上機嫌のままトイレから出て、自販機を探し始める。程なくして目的のものは見つかるが、そこで事件は起きた。

「ちよつとよろしいですか？」

「え？」

バチンッ！！

「ッッ！」

お腹のあたりにものすごい衝撃を受け、その場につづくまる。体中がしびれて、動かないうえひどい倦怠感と吐き気が襲ってくる。い、一体なにが・・・？力を振り絞り、顔を上げるとそこには色黒でスキンヘッドの大男が立っていた。外人か？

「チッ、まだ倒れねえか。しぶとい女だ」

「なに・・・よ、あんた・・・」

「さあな？」

今度は口元に布を押しつけられるがもう抵抗するだけの力は残っていないかった。

（こ、この臭いは・・・クロロホルム！？うつ・・・く、そ・・・）

そこで私の意識は途切れ、闇へ落ちていった。

白奈を探し回って1時間ほど。それでも彼女の姿はどこにもなかった。連絡もなしにいなくなるなんてことはあいつに限ってあり得ない。まず駐車場には車がまだ止まっている、ということは遊園地のどこかにいるはずだ。

（くそ、一体どこにいったんだ？）

焦りが見え始めてきた頃、白奈から電話がかかってきた。

「おい白奈、おまえどこに」

「妹は預かったぞ。そう太刀花 陸に伝えろ、いいな？」

「はあ！？おまえ、誰だ！それは白」

すべてを言い終わる前に電話は切れてしまう。声は明らかに白奈のものではなく男のものだった。さらに預かったという謎の言葉。つまり推測されるのは――誘拐。

「一体、何なんだよ・・・」

涼しい、秋の臭いを含んだ風が俺を包んでいく。

――まるで夏の終わりを告げるように。

第11話／夏の終わりを告げる声（後書き）

どうでしたか？日常ほのぼのはここで終了、次回からは肉弾戦&IS戦の混合になっていくので少々自信がありませんががんばります！

次回からはし新キャラ&オリISが登場します！

誤字・脱字、感想、質問などがございましたらご連絡いただける
と幸いです。

第11話／革新せし者
前編

第11話／革新せし者　　～前編～

Side
一夏

『そうか……。すまないな、わざわざ連絡してくれて』

「いえ、その、すみません。俺が一緒にいたのに……」

例の連絡のあと、大至急学園に戻って千冬姉に事情を説明して陸さんへ連絡を入れた。レナードこと、天使の軍隊のこと、イノベイターのこと、そして誘拐のこと。すべてを話すと電話越しの陸さんの声色は心なしか沈んでいるようだった。

で、お前は無事なんだな？

「はい。大丈夫です」

『ふう…….ならいい。早速に対策を立てる、2、3日以内にそっちに行くって千冬に伝えてくれ。くれぐれも変な気は起こすなよ、じゃあな』

それだけを告げて電話は切れた。電話の内容は他言無用ということなので狭い防音室の中で行われ、部屋を出ると律儀に千冬姉が待っていてくれた。

「ちふ……織斑先生、陸さんから」

「今はプライベートだ。普通に呼んでも構わん。で、ヤツはなんて？」

「あ、うん。その、対策考えて2、3日中に学園の方に来るって」

「そうか、わかった。もう、戻ってもいいぞ」

「千冬姊……俺……！」

「そう気負うな、あの状況では誰も助けられなかった」

「でも・・・！！」

「男なら、やられた借りはきっちり返せ。その機会はすぐに来るはずだ」

そういつて千冬姉は俺に背を向け、行ってしまった。その表情はどこか堅く、険しいものだった、ように思う。といっても俺しか気づかないくらいに微細なものだ、それでも顔に出てたってことはそれだけ悔しかったんだな。

悔しいのは俺だけじゃない。陸さんや千冬姉だって俺と同じくらい、いやそれ以上悔しいかも。

だからこそ、絶対に助ける。千冬姉もいつていた、すぐに機会は訪れるって。そのときまで待つてろよ・・・！！

あれからきつちり2日、俺いつもの5人が校内放送で小会議室に呼び出される。中では陸さんと見知らぬ黒髪の女性が待っていた。

「よっ！お前等、久しぶりだな」

「た、太刀花統括官、いらつしゃってましたの？」

「久しぶりだなイギリスのお嬢さん。ちよつと頼みごとがあつてな」
「お暇なんですね・・・」

「あのなー中華娘、いくら何でもいつもこんなじゃないぞ」

「陸、時間が押しているんで早くしてください」

「お、すまんすまん、じゃあみんな適当に座つてくれ」

陸さんに促され、みんなが円卓の席に着く。すると部屋が暗くなり、円卓の中央に空中投影ディスプレイが現れた。そこには見知らぬ施設の地図が映し出されている。

「さて、千冬がまだみたいだが・・・時間もないことだ、始めよう。じゃまず実沙紀の紹介から」

「はい。わかりました」

実沙紀と呼ばれた黒髪の女性が一步前に踏みだした。空中投影ディスプレイの光がぼうつと彼女の顔を照らし出す。さっきは遠目に見ただけだったからよくわからなかったけどこの人、すっげー美人だ。ぱつちりとした大きな目に高い鼻、そして横一文字に結ばれた綺麗な唇が事務的な印象を醸し出していた。

「自衛隊第4独立機動中隊所属、花村 実沙紀一尉です。以後お見知り置きを」

丁寧にペコリと頭を下げる仕草に思わずみんなつられてお辞儀してしまう。それから元通り陸さんの後ろへと戻った。

「それじゃあここから本題だ。頼みたいことは2つ、1つはすでにみんな知っているだろうが白奈の誘拐について。もう1つはちょっと個人的なことだ」

そこまでいってすこし間をおく。するとディスプレイの画面が変わり、世界地図を拡大した映像が映し出された。そこにはいくつかの島が並んでいる、これが白奈の居場所なのか？

「最初に個人的な頼みごとの説明をする。つい先日とある研究所が開発した重要な物資が運搬中に消息を絶った。たぶんどこから攻撃を受けて墜落したんだろうな。んで、それを積んだ輸送機の残骸が仏領ポリネシア島周辺海域から発見された。つまりその物資も近くにあるはずだから探してほしいんだ」

「いや、しかし太刀花統括官、なぜそんな重要な任務を私たちに？」

「仕方がないんだ、クライアントからは穏便にっていわれてるから自衛隊は使えない。とはいえ最低限のバックアップはつけるけど。個人つつてもかなりの大事なんだ。わかったか、篠ノ之妹」

「・・・わかりました」

「陸、いい加減人に勝手なあだ名をつける癖治しませんか？普通に名前で呼んであげてください」

少し機嫌を損ねたような顔をしている筈。どうやら篠ノ之妹、とというのが感にさわったようだ。しかしそれを後目にはいい、と実

沙紀さんの忠告を受け流して内容の説明に入っていく陸さん。

任務は単純明快なもので、この島の周辺に落ちたその重要な物資が入ったコンテナを回収し、自衛隊第4独立機動中隊の輸送機へ引き渡すということ。ただし、輸送機を攻撃した連中もこれを狙っているかもしれないとこのことで安全かつ迅速に発見・運搬しなければいけないそう。

「じゃあ次の任務の説明に移るぞ。どちらかというとこっちの方が重要、白奈の誘拐の件だ。といってももう居場所は特定できてるんだがな」

「ええっ！！だったら早く行きましょう！」

「同感だな。こんな実のない作戦会議をしているうちになにをされているかわかったものではないぞ、統括官殿？」

「だー！一夏、ラウラちよい黙ってる、話が進まん。とにかくだ、場所はわかってるから後は人選だ。希望があつたら言え」

「はい！俺、白奈救出の方がいいです！」

「ふん、仕方ない。バランスを考えると私は回収の方へ回ろう」

「じゃあ僕も回収に。中距離戦になったら第1じゃ大変でしょ」

「んじゃアタシ、救出の方に行くわ」

「なら私は回収に」

「あ、すまんセシリアは救出の方に回ってくれ。できれば狙撃手がいてほしい」

「うっ……なら、仕方ありませんわね」

「ということは私は回収に回ればいいのだな？」

「ああ、現場に優秀な指揮官がいればずっと楽になるはずだ。伊達に隊長やってるわけじゃないだろ、ラウラ？」

「ふっ、任せておけ」

「じゃあ実沙紀、回収組の総指揮を頼む、そっちには明音を回すから」

「了解」

というわけでメンバー分けが終わり、救出作戦に参加するメンバ

―は場所を移して千冬姉を加え、詳しい説明に入った。

千冬姉のまとめた情報によると、どうやら白奈が連れて行かれた場所は北朝鮮の山間部にある表向きには遺伝子工学の研究をしているという正体不明の研究所だそうだ。んで、これからそこに正面攻撃をかけて研究所自体を破壊してしまうらしい。国際問題になるんじゃないか、とセシリアから質問があつたが、さすがは政府の人間。すでにその問題は解決してあるそうだ。

「というわけだ。ほかに何か質問は？・・・大丈夫そうだな。よし作戦開始時刻は17:00だ、作戦はどんなに長くても24時間以内に終わる。最低限の手荷物をまとめて60分前に再度ここに集合。以上、解散」

その言葉を皮切りに、用意をするため各自の部屋へと散っていった。

side 鈴

会議が終わり、部屋に戻ってきたけどたった1日だけであればそんなに用意するものなどない・・・と思うのでほんとに最低限必要な着替えやらタオルやらをバッグに詰め込んで用意は終了した。当然、時間は余っているからベッドに寝転がる。ルームメイトのティナはどうやら出かけているみたいなので今はアタシ一人。

何というか今回の作戦はこの間のととはなんか雰囲気が違う。前にもましてピリピリとした空気、特に引き締まった一夏の顔。事情はもう織斑先生から聞いたけど、あの状況ではきつと誰だって白奈を助けられなかったはずだ。でもきつとアイツのことだから悔やんでるんだろつな、何となくその顔も浮かぶ。

まったく、何でもかんでも抱え込み過ぎなのよ一夏は。近くにこんなにも頼れる代表候補生が4人とアンタのファースト幼なじみまでするのに。・・・まあそれがアイツの短所であり長所なの

かもしれない。周りに迷惑をかけずに解決しようというスタンスは認めるし周りの仲間のことを大事に思ってるのがよくわかる。でも、ここまで大事になったなら逆にさらけ出してくれないとこっちが心配してしまう。

よし！その辺は幼なじみであるアタシがガツンといってやらなきゃね。うん、出発の前にいつてやろう。

そんなとき、サイドテーブルで携帯電話が電話の着信を知らせる。セシリアからだ。

「はいはい、なに？セシリア」

「鈴さん、ちよつとお時間よろしくて？」

「構わないわよ。なによ？改まつちゃつて」

「今回の作戦、何かおかしくありませんか？なんというか」

「裏に何かある、つていいたいの？そんなの最初っから気づいてたわよ」

「うつ・・・な、なぜいいたいことを先回りして」

「いつのかつて？考えてることが見え見えなのよ。どーせアタシに電話してきたのだから一夏にいらぬ心労かけたくないからでしょ？」

「・・・と、とにかく！何か隠してるのは間違いありませんわ」

あ、開き直った、どうやら図星らしい。やっぱり楽しいわ、セシリアいじるの。

「だらうけどさー、隠してるってことはアタシらは首つつこんじゃいけないんじゃない？」

「鈴さんにしては妙に弱気ですわね。何かありませんか？」

「別に。でもあの人隠してるってことは、やっぱりアタシら一般人が首を突っ込んでいいことじゃないと思う。なんつーか妙に信用できるつーか？」

「一般人って、私たちは代表候補生でしょ？それがなぜ」

「勘よ、女の勘。今は四の五のいわずその謎の研究所ぶっ潰して白奈連れて帰ってくればそれで終わりでしょ？まあ、後味悪いかもし

れないけど」

『・・・・・・まあ、それも一理ありますわね。仕方ありません、終わりにしましょう。後味悪いですが』

「まったく、下手に首突っ込むんじゃないわよ？じゃあね」

『わかっています。それでは、また』

最後に短い会話を交わし、電話は切れた。そんなことをやってるうちに時計の針は、予定時刻の10分前を指している。さて、今回は一夏もいることだしこの辺で実力をアピールして存在感を示さなきゃ！いい加減セシリアにも負けてられないし、今回のVIPはアタシだ！

side 一夏

言われたとおりにもう一度会議室に集まった後、車に乗って羽田空港へ向かった。

「って、なんで羽田なんですか？」

「この近くの駐屯地は大半が陸自のなんだ。滑走路がないところの方が多し、一番近いところでも結構遠いから許可もらって羽田に迎えをよんだからだ」

そんなわけで俺らを乗せた車は一路羽田への道を走る。それから30分もしないうちに目的地に到着。そこからは歩きで滑走路を横断して端っこにアイドリングしている小型輸送機へと乗り込み、それからさらに1時間ほどかけて航空自衛隊防府北基地へと飛んだ。

輸送機から降りると陸さんは打ち合わせがあるからとちよつと別行動。職員の人に案内され、ヘリポートへと向かった。そこには闇にとけ込むような黒いボディの巨大なヘリが待ち受けていた。

「で、でかいな。これに乗るだよな？」

「見たことないタイプね。こんなの自衛隊に配備されてたっけ？」

「な、なぜこれがこんなところに・・・？」

「知ってるのかセシリア？」

「知ってるもなにも、これはアメリカ・イギリスが共同開発した最新鋭の強襲揚陸ヘリ『Hrv-64 ドラゴンフライ』ですわ。西側にしか配備されてないと聞いていたのですが」

「ある有力な筋からの情報によりもたらされたされたドラゴンフライの設計図に我々独自の技術を組み込んでロールアウトされた『Hrv-67 type? ペイヴメア』です」

突然の声、後ろを振り向くとそこには紺色の士官服に身を包んだ女性、いや少女が立っていた。見た目は分たちと年の差はほとんどなさそう。

「先進装備『ECS』を搭載し、高水準のステルス性能を持ち、他の性能も高いレベルでまとまっている・・・飛行時の騒音を除けばまさに最高クラスの性能を誇っています」

「えっと、説明してくれたのはありますか、アンタ誰？」

「あ、申し送れました。今回同行させていただきます通信管制担当の小野崎 静音准尉です。よろしくお願いします」

ピシッと敬礼をしてまっすぐこっちを見てくる。それから俺らも自己紹介をしてヘリに乗り込んだ。どうやらこのヘリは第4独立機動中隊の持ち物らしく、静音さんも第4中隊所属なんだとか。それから少しして大きな機材とともに陸さんと知らない少年が乗り込んだ。

「全員乗ったな？よし軍曹、出してくれ！」

「了解」

「さてこれから北朝鮮に乗り込むわけだが、軽いブリーフィングを行うぞ。まず3時間ほどの飛行の後、例の研究所に到着したら奴らの外堀を埋める。具体的には静音・・・そっぴや紹介がまだだったな」

「自分はもう自己紹介をすませましたので」

「そうか。んじゃ司、頼む」

「はい。自分は第4独立機動中隊所属、倉澤 司准尉です」

「ええと……どこまで話したっけ？」

「外堀を埋めて具体的につてところまでですわ」

「おおそだった。まず攻撃を仕掛ける前にこいつを使って静音に研究所の電子設備をすべて掌握してもらう」

そういつて後ろに置いてあつた大きな機材を指す。よくわからな
いがどうやらコンピューターのようなものらしい。大きなコンソ
ールにモニターが3つ、これを人間が操れるのかはつきり言つて疑問
だ。

「それから鈴とセシリアに派手に暴れてもらつて連中の目を引く。
その間に司と一夏が施設内に突入して白奈を救出、できれば白鉄の
コアも回収。一夏はそのまま白奈と脱出して司は一夏と別れてその
間にC4を重要施設に設置、全員が脱出した後、研究所を爆破。そ
して撤退だ。分かりやすいだろ？」

『了解』

「んじゃ、みんなのISに高速リンク指揮システムをインストール
するから。静音、頼むぜ」

静音さんに白式を預けて、席に着く。窓から外を覗くと眼下には
青い海が広がつていた。到着まではまだまだかかりそうだ。

もうすぐで作戦は一番重要な段階に入る。突入に俺を選んだのは
狭い空間でも振り回せる武器があるからとのこと。たとえどんな理
由があろうと選んでもらつた以上確実にやり遂げてみせる。

「顔がこわばつてるぞ、緊張してるのか？」

隣に座つていた倉澤さんが声をかけてくれた。どうやら緊張して
いるように見えたらしい。

「いや、そうゆうわけじゃ。えつと……」

そついやなんて呼べばいいかな？倉澤さん？いや倉澤准尉？

「ん？もしかして呼び方に困つてる？だったら普通に司つて呼んで
くれてかまわないよ」

「え、ああじゃあ俺も一夏つて呼んでくれ。別に緊張してるわけじ

やないけど、ただもうすぐだなんて」

「あんまり硬くならない方がいい。いざというときに動けなくなるぞ。目的地までまだ距離がある、少し眠った方がいいんじゃないか」
「ああ、そうだな。ありがとう・・・ってもう寝ちまったのか。
早いな・・・」

横を見るとすでに司は足を組み、目を閉じていた。改めて周りを見回すと俺以外のみんなはすでに眠っていた。日はとくに前に沈み、あたりを暗闇が覆っている。聞こえる音と言えば頭上で回るヘリのローター音だけ。

寝よう。俺が失敗すればなにもかもおしまい、今休めるうちに休んでおこう。向こうにつけば嫌がおうでも動かなくてはいけいないんだから。

目を閉じると一気に眠気が襲ってきて、すぐに意識は闇の中へと落ちていった。

side 白奈

目を覚ますと真っ白な天井が目に入った。だるい体を起こしても目にはいるのは白、周りを見渡しても白、きている服も白、どこもかしこも白、白、白。唯一白でないと言えば私の肌か髪の毛くらい。そういえばここに連れてこられて何日立ったわけ？ええと・・・
・・・そうだ、2日だ。

昨日は確か変な注射を打たれたあとおかしい音を聞かされて・・・
・そこから記憶がない。

いったいここはどこだろう？本調子だったらとつくの前に白鉄奪い返して逃げ出したはずだ。最初にきたときに薬を打たれて以来ずっと調子が悪い、四肢に力が入らない上に目の前がぼやける。下手に立とうとすれば転んでしまうほどに。それに昨日おかしい音を聞かされてからさらに調子が悪くなっている。

そういえばみんなはなにしてるだろう？いきなり私がいなくなっちゃって驚いてるかな？それとも特になにも変わらず暮らしてるかな？そんなとき、部屋のドアが開かれ、白衣を着た男と背の高い男が数人入ってきた。

「投薬の時間だ。連れていけ」

腕を掴まれ、強制的に立たされる。もちろん抵抗したくてもそれをする力すら残されていない。成すがままに連れて行かれながら思った。

助けて

side 一夏

「……きろ、お………ろって、起きろってば、もうすぐでつくぞ」

突然揺さぶられ、目を覚ました。相変わらず窓の外は暗闇だがヘリの客室内はさっきと違って変わってLEDの明かりに包まれていた。

「静音まだか？」

「いえ、もうすぐ終わります。ポイント到着までには」

「OK引き続き頼む。おまえら、作戦の最終チェックだ。もうすぐで施設のハッキングが終わる。そしたら外部の発電機を破壊しつつ鈴と一緒にひっかき回せ、方法は問わない。ただし、殺すなよ」

「わかりましたわ」

「当たり前よ」

「注意が2人に回ったらへりを施設につける。そしたら一夏と司が

突入、司はマップを見ながら地下の蓄電機から順にC4仕掛けつつ脱出。一夏は突入後白式を展開、静音の指示に従って白奈を救出、時間があれば白鉄を回収し脱出、その後施設を爆破し、撤収だ。」

「はい！」

「了解です」

「一佐、目標ポイントに到達！リアアッチを展開します！」

「よっしゃ！2人とも、いつてこい！」

『了解！』

開いたハッチから2人が飛び降り、ISを展開する。山間部ということで下は木が茂っていた。ハッチはすぐに閉まり、ヘリは上昇を始めた。

「軍曹、ECS起動後にローフライトモードへ移行」

「ラジャー」

「あの陸さん、そのECSって何なんですか？」

「アメリカが開発した特殊なステルス装備のことだ。レーダーの電波を吸収したりソナーの音波を打ち消したりとかっていう装備なんだけど……こいつに搭載されてるのはちよつと特殊でな、電磁迷彩が展開できるようになってる。つまり透明化できるんだ」

「透明化って……」

異常なハイテク装備。軍事関係に疎い俺でもこの装備が普通じゃないことくらいはわかる。

話を聞く以上、これが最新装備なんだろう。しかしこのヘリに搭載されているのはそれを上回る性能だ。つまり、裏に何かあるはず。最後の曖昧な言い方、きっと陸さんは何かを隠してる。確信はないけどきつと何か。

「お、始まったみたいだな」

窓から外を覗くと研究所の方が光っては消え、また光っては消えを繰り返していた。2人が攻撃を始めたのだろう。

そしてそれから10分ちよつとで研究所の敷地内へと進入した。

「太刀花一佐、システム掌握完了。いつでも突入可能です」

「ご苦労。うし2人とも、もうすぐランディングだから準備しておけ。おまえらがこの作戦のキモだ、プレッシャーをかけるつもりはないが……しっかり頼むぞ」

『了解！』

「いい返事だ！つと、ちょうどついたみたいだ。行ってこい！」

ハッチが開かれるとそこにはすでに地面があった。最初にリュックとアサルトライフル、防弾チョッキを装備した司が飛び出し、それに続いて俺も飛び出す。目標の入り口はここから200mほど離れたところにある物資搬入ゲート。重たい装備を背負っているはずなのに司は俺と同等、もしくはそれ以上の速度で走っていく。

ゲートに隣接した扉を力づくであけて、内部に進入。そこで俺は白式を展開、司と別れて研究施設へと向かった。

『こちらペイヴメア。一夏さん、応答して下さい』

「はい、何ですか？」

『システムを掌握しましたので防衛機構は起動しません。そのまま直進して下さい。それと、白奈さんは研究棟の12階西通路にある突き当たりの実験室にいらっしゃいます。研究棟は1階から最上階まで吹き抜けになっていますからロビーに出たら12階まで上昇して下さい』

「わかりました！ありがとうございます」

『いえ。また何かありましたら連絡を差し上げます。それではまた後ほど』

通信が切れると同時に速度を上げていく。あつと言う間に広いロビーに到着すると、そこにはサブマシンガンを構えた黒服男たちが待ち受けていた。

「つてえー！！」

リーダーらしき男の声とともにロビーに鳴り響く無数の銃声。とつさに回避してしまったがすでにISを展開している俺にとって9mm弾など何の脅威でもない。飛来する弾丸はすべてバリアーで阻まれるので痛くもかゆくもないしどうやってあいつらを退けるかを

考える余裕まである。

（さてどうするかな・・・あまり長引けばエネルギーももつたない。雪羅の荷電粒子砲を使うわけにもいかないし、雪片だって殺しちゃう可能性もある・・・仕方ない、ちよつと強引だけどやるか）

武器を使ってどうにかするのではなく、体当たりで突破することにした。もう一度加速し直し、男たちを吹き飛ばす。そこから一気に上昇して西側の通路を突き進む。

やはりそこにも武装した黒服が数人いたけどまた体当たりで強引に突破。壁にぶつかった鈍い音が耳に届いたけど聞こえなかったことにした。いちいちかまってられるかって、こちらら時間ないんだよ。

もうすぐ行くからな、白奈！

side 白奈

いつもの部屋に連れてこられ、薬を打たれる前に変な映像を見せられていたそのときだった。突然目の前の映像が消えて真っ暗になったのだ。

『おい、なにをしている！信号がきていないぞ！！』

『そ、それが外部からのハッキングでマザーコンピューターに接続されている電子機器がすべて使用不可能になっています！』

『ハッキングだと！？早く復旧させろ、全くいつたどこからだ！』
『ありえない！？班長、復旧はできません、すでにマザーコンピューターどころか施設すべてのコンピューターが掌握されてます！』

会話を聞く限り、どうやらここはどこからかサイバー攻撃を受けているようだ。そのため映像が消えたらしい。へへ、ざまあみろ。

『は、班長！防衛隊からの連絡、奇襲です！山岳方面からISが2

機現れ施設を破壊して回っているそうです！現在の戦力ではとても太刀打ちできない、増援を要求とのこと！』

『ええい！いつたいこの機体だ！？』

『そ、それが・・・イギリスと中国の第3世代機に酷似しているとの報告が』

イギリスと中国の第3世代機？まさか、まさかとは思いますがそれって・・・

『判明しました！イギリス所属のB-T兵器試験搭載機ブルーティアーズと中国所属の試作型第3世代機甲龍です！』

『ツチ、奴らを増援に送れ』

『し、しかしあれは・・・！』

『言っな！あれに頼るしかなかるう！』

『ハ、ハッ！』

ああ、やつぱり！助けにきてくれたんだ・・・！でもおかしい、何で鈴とセシリアだけなんだ？もしかして2人はやつらの目を引きつけるためであって本命は・・・

『続けて報告！不審者2名が施設へしんにゆ・・・！へ、変更します！日本所属のIS白式と自衛隊隊員と思われる男が侵入！2手に分かれ白式は研究施設へ、男は地下蓄電施設へむかっているとのこと！しかし守衛を送りましたがどちらも突破された模様、白式はどうやらここへ向かっているようです！』

やつぱりそうだ。きてくれたんだ、織斑君・・・！

『つく、この女を運び出せ。みすみす実験材料を奪われるのも癪だ、殺せ。全く、どこから情報が漏れたんだ・・・！』

ぐったりした私の腕をつかみ、ヘッドマウントディスプレイをはずして、どこかへ移動しようとしたそのときだった。

ギンツッ！！

金属同士がこすれる音とともに部屋の扉が叩き斬られる。

「白奈っ！」

「織斑、君……」

そのまま織斑君は加速しつつ雪羅のクローで邪魔なやつらを蹴散らしながら部屋を破壊していく。やがて部屋にいる連中全員を倒して私のところへきてくれた。

「すまん。遅くなった」

「ほ、ほんとよ……」

「っと、積もる話は後。話してる暇はなさそうだ。逃げるぞ、大丈夫だな？」

「うん」

織斑君の右腕に抱かれ、通路を疾走する。抱かれたその腕はどこか暖かく、頼もしく感じた。揺れる意識の中で思う、ヒーローってこんな感じなのかなって。

side 鈴

一夏たちが突入してすでに10分、アタシたちは大方の施設を破壊し終わっていた。さすがに従来の武装をした連中相手にISを装備した代表候補性が負けるはずがない。

「鈴さん、発電機をすべて破壊しましたわ」

「こっちも終了。どうする？まだなんか壊す？」

「遠慮しておきますわ。弱者をいたぶる趣味はございませんから」

「それもそうね。撤収する？」

地上の状況はまさ地獄絵図。そこらじゅうに穴が開き、装甲車は横転して炎上している。この光景だけを見たら悪役は確実にアタシらよね……

そんなとき、甲龍のハイパーセンサーが何かを捉える。比較的破壊の少ない倉庫らしき建物から飛び出してきた2つの黒い影がこちらへ向かってくるのがわかった。

「お二人とも、聞こえますね！？ 現在研究所施設より2機のISの発進が確認されました、現段階では機種、所属国等は不明！ 放っておくわけにはいきません。施設破壊から正体不明機の撃退もしくは撃破へ作戦を変更します！」

「ったく、結構無茶なこと行ってくれるじゃない。ま、やるっきゃないっしょ！」

「そうですね。軽くあしらってさしあげましょう！」

それから正体不明機との交戦までそれほどかからなかった。戦闘はセシリアの狙撃からのアタシの双天牙月の投擲ではじまった。最初の攻撃を軽々かわして正体不明機は散会、2手に分かれアタシとセシリアは分断されてしまう。まあ戦術的には悪くないけど、そんな小細工程度でアタシらは倒せないわよ？ なんていっても国を背負う代表候補生なんだから！

戻ってきた双天牙月をキャッチし、連続で斬撃を加えて押していくがどれも後一步というところで防がれてしまう。そんなのは予想の範疇、刃がはじかれた瞬間に進行方向と逆に瞬時加速を行って不意打ち的に距離をとった。

「持ってけえええ！！！」

相手が驚いているほんの少しの隙、そこへ容赦なく衝撃砲をたたき込む。当然回避する間もなく見事に直撃、これで墜ちてくれればいいんだけど・・・甘いかな？

爆風が晴れると、そこには何食わぬ顔をしてヤツはいた。見る限りでの破損はゼロ、衝撃砲直撃したつっのにタフなヤツだ。

「いい腕をしている。先ほどのフェイント攻撃、恐れ入った」

「それはどうも。別にアンタに褒められる理由はないけどね」

「フツ、まあいい。私はエルザ、初陣で君と出会えたことを光栄に思うよ、相性が良さそうだ」

「ナメられたもんね。ちゃっちゃか終わしてセシリアの援護でもしてやるか」

即座に衝撃砲を展開し、砲撃を開始する。しかしすべて直撃して

いるにも関わらずダメージなど微塵も感じさせない動きを見せている。くっそ、なんで効かないの!?

「無駄だ。そんなヤワな攻撃ではこのグラムの装甲はビクともしない、魔剣を甘く見るな!」

「ぐっ……!」

一気に肉薄され、最上段からバスタードソードの一撃をまともに受けてしまう。最大の武器である衝撃砲は効かないし重量の乗った攻撃で双天牙月の刃が片方破壊されてしまい結構ピンチかも。このままの状態ではやばいと判断し、距離をとろうと思ったそのときだった。

「とくと味わえ、龍を墮とした伝説の剣を!」

次の瞬間、体中に何かが重くのしかかった。PICがあるにも関わらず私は一瞬で地面にたたきつけられてしまう。何が起こったのさえわからない、ISのおかげで衝撃はあまりなかったけど頭の中は謎でいっぱいだった。

「何が起きたかさえわからんたる? 少しずつ理解していけばいい、その身をもつてな。さあ始めるぞ」

こりゃあ本気でマズいかもしれない。人生始まって以来最大の危機にたたされ、冷や汗が首筋をつたうのだった。

side 一夏

ヤバイ、もうエネルギーがほとんど残ってない。ここまで来るのに無駄し過ぎた。残量は31%、普通に移動して脱出するのならばぎりぎり間に合うはず、でも途中で何かあれば危ない数字だ。

なんか白奈も調子悪そうだし急がなきゃいけないのに……ここで燃費の問題が来るなんて、ちよつと恨むぞ。

『一夏さん、聞こえますか? 白鉄のコアのことについてですがすで

にこの施設より反応が見られません。どこかに持ち出されたかしたのでしよう、コアは諦め脱出に専念してください」

「了解！」

コアは諦めるか、正直複雑な気分だ。エネルギーのない今、この状態で回収に向かうのはかなりきつかったけど大事なコアがなくなるのは国家レベルの問題になりかねない。きっとその点については陸さんの根回しで何とかしたんだろうけどそれでも日本に多大な損失を与えることには変わらない。

「きたぞ！構ええ！！」

「いつ！？」

1階の通路を移動中、目の前にまた黒服の集団が現れる。それに関しては別にいい、しかし問題はやつらが持っている物にあった。対戦車ライフルとバズーカ（確かパンツァーファウストとか言ったっけ？）、それを構え、こちらに向けている。いくら何でもそんな攻撃を食らえばいくらISでもダメージは食らうだろう。回避するにもここは狭い通路、図体のデカイISでは左右に動くには幅がなさすぎる。

「すまん白奈！ちょっと揺れるかもしれないけどガマンしてくれ！」

「う、うん・・・大丈夫・・・」

「つてえ！」

体を捻ってやつらに背中を向け、白奈をかばうように自分を盾にする。そして次の瞬間、バリアを貫通した衝撃が体に伝わっていく。かろうじて絶対防御は発動しなかったがエネルギーはバリアを支えるだけで精一杯だった。

「がっ・・・！！」

白式が解除されてしまい、床に叩きつけられる。白奈はなんとかキャッチしたのでダメージはないはず。しかし瞬く間に黒服たちに取り囲まれてしまった。ISがなければ俺は普通の男子高校生、訓練された屈強な兵士には勝てるはずもない。

「隊長、どうしますか？」

「ISは回収してこいつら殺せ。価値はない」

「ハッ!!」

銃口が向けられ、死という物を間近で感じる。引き金が引かれれば俺たちは人間から一瞬で新鮮な肉塊に姿を変える。やべっ、妙に頭が冷静になつてきた……こんなの、ありかよ……!

「はいはい、いい年した大人がよつてたかつて子供をイジめないの。みつともないわよ?」

突然通路に響く凜と澄んだ声。銃を構えていた男たちが振り向くと、そこに1人の女性が立っていた。

長い黒髪に黒のパンツスーツ、顔立ちは……白奈にそっくり。髪が長いとこ以外は完全に白奈、不敵につり上げた口元はまさに白奈そのものだった。

「貴様、何者だ!?!」

「あら?もしかしてナンパかしら。今時はやらないわよ?」

「はっ、勘違い甚だしい!たかが女1人増えたところで変わらん。殺」

「ええ、私は女よ?でもね、裏を返せば私は女なのよ?」

「だからどう」

ダダダダダッ!!

通路に爆音が木霊す。部分展開されたISの腕部に装着されたハンドカノンから放たれる高速の弾丸は油断していた男たちを貫く。

まさに圧巻。無音無動作でISを展開し、不意打ち気味に全員を倒したのだ。いったい何者?

「急所ははずしたから手当をすれば大丈夫だから……って聞こえてないか」

「あ、あんた誰だ!?!」

「ふふふ、人に物を訪ねる時ははず自分から、でしょ?」

「う……俺は織斑 一夏。あんた、何者だ」

「私？私は雨原 黒華。さすらいのIS乗りにして……」

一呼吸置き、彼女はこう答える。

「その子のおねーちゃん」

第11話／革新せし者　　前編　　（後書き）

どうも、いろいろ行事が終わったというのにすっぱかしてしまいました。今回は視点変更が多く、新キャラが何人が登場しました。

新キャラについては設定を変更しておきますので後々ご確認お願いします。

それでは、誤字・脱字、感想、質問などございましたらご連絡いただけると幸いです。

第13話／革新せし者　ゝ後編ゝ（前書き）

第13話／革新せし者　〈後編〉

第13話／革新せし者　〈後編〉

side 一夏

間の前に現れ、俺たちを救ってくれた謎の女性。その姿はまるで白奈本人を見ているような立ち振る舞い、特に目元や顔の輪郭がよく似ている。

「ほら、自己紹介も済んだんだからさっさと逃げるわよ。あんまり時間ないんだから」

「・・・ほんとに信用していいのか、あんた？」

「あらやだ、まだ警戒してるの？大丈夫よ、あなたたちを助けにきたんだから」

苦笑しながらそう答える黒華さん。やっぱり姉と言うだけあって苦笑した顔も白奈ににっていた。なんか変な気分だ。自分の腕の中に白奈がいて、目の前にの白奈がいるような感じがする。

「白式はエネルギー切れなんですよ？運んであげる」

その言葉と同時に黒華さんが光に包まれ、漆黒の装甲のISが現れる。スラスターと一体化した巨大な脚部アーマー、肩からは身長ほどもあるバインダー、背中には体勢制御用のスタビライザーが二つ、そして極めつけは顔を覆う兜のようなヘッドバイザー。どこかで見たことある、こいつ確か・・・。

「死神・・・」

数年前に突如現れ、各地の研究所を破壊して回った謎のIS。まさかそのパイロットが白奈のお姉さんだったなんて・・・。

「さ、行くわよ」

黒華さんは俺たちを小脇に抱え、一気に加速を始めた。これ、やばい！加速度がハンパじゃない、まるで白式で瞬時加速を行ったときくらいの瞬発力だ。

一瞬で通路を抜け、そのまま倉庫を突破して外へ出る。そこに広がっていた風景は施設に突入する前とは打って変わってひどく荒廃している。あの2人、すっげー暴れたな……。

「さてと、ここからはだいたい安全なはずだから歩いてへりまで戻ってちょうだい」

「え？わかりました。黒華さんは？」

「どうやらあなたのガールフレンドたちが苦戦してるみたいだから、手伝ってくるわ」

そういい残して黒華さんは飛んで行ってしまった。あの二人が苦戦するなんて……いったいどんな相手なんだ？嫌な予感がする、ただの杞憂で終わればいいんだけど……。一抹の不安を抱えながら、俺は白奈とともに陸さんらが待つへりへと向かった。

side 司

地下施設に潜入してからずいぶんと時間がたった。まだ静音から連絡がないってことはまだ一夏はへりに到着していないのか。M16 A1の残弾はまだ十分にあるけど問題はここから。調査した限りイノベーターの研究施設だというのはわかった。すんなりと侵入できたのはいいけど、その先の警備がめちゃくちゃ厳しい、今隠れて連中をやり過ごしてるけどいつ見つかるかわかったもんじゃない（しかし、すごく嫌な感じがする。この先ってもしかして……いや、まだ早い。もう少し様子を見よう）

気になる好奇心を押さえ、様子をうかがっていると数名の兵士と思われる奴らが守衛を引き連れてどこかへ行ってしまった。さらに戻ってこないを確認してから扉へと急ぐ。電子ロックがかかってい

たので最小限のC4を使って扉を歪ませ、強引に中へ侵入した。

「これは……！」

左右に並べられた大型の培養機。その中には何ともいえない、グロテスクな何かが入っていた。M16を構え、警戒しながらさらに奥に進む。そのグロテスクな何かは奥に進むにつれどんどん知っている形へと変化していつている。

「これは、胎児だ……。まさか、クローン？一体誰の……？」

「世界初の純粹種、レミング・ストラウスのものさ」

「ッー！」

突然かけられた声に驚き、急いで振り向く。そこには白衣を着てメガネをかけたやせ細った男が立っていた。そして手に握られているのはベレッタF92。少し型遅れだが信頼性の高い銃として西側では今でも正式採用されているところがおおいらしい。

「ふふふ。ここは人工イノベーター、イノベイドの培養施設さ。そして今回培養されているのがレミングの細胞を使ったクローンななさ」

「あんたは……？」

「私はしがない一介の研究員さ。もうすべては終わった、ほかのみんなは死んだしここはもう保たない。壊すなり爆破するなり好きにしたまえ。ただいっておくぞ少年、この研究は新たな革新への布石となるのだ。それだけは忘れるなよ」

「ちょ……！」

そのまま研究員はベレで自分の頭を躊躇なく撃ち抜いた。辺り一面に鮮血と脳髓の破片がちらばる。

なんなんだよ、わけわかんないぜ。いきなり出てきたと思ったら変なこと言っつて勝手に死んで……。結局何がしたかったんだ？それからその施設の中を調査するといくつかの資料が出てきた。レミング・ストラウス。享年47歳、男性、記録上世界初のイノベーターでありアメリカ空軍のエースパイロット。白騎士事件のと

きも唯一機体の原型をとどめて戻ってきたらしい。しかし訓練中に怪我をし、その後発狂。精神病棟に移ったのち自殺たそうだ。

どうやら彼の死体は切り刻まれアメリカが保管・研究しているらしい。そのおかげで今の研究成果があるのだろうけど、なんか不憫だ。それから部屋の各所にC4を設置し、部屋を出た。

『司さん、一夏さんの収容を確認。白奈さんも無事です、即座に脱出してください』

「了解」

C4を仕掛けて全力ダッシュで階段を駆けあがる。途中に衛兵が邪魔をしてきたので容赦なくヘッドショットで殺害、どうせ生きてても爆死するんだ。別にいいだろ。

最近殺人に対する罪悪感が薄れてきた。これって人間的にはかなりまずいことだよな・・・慣れって怖い。急いで倉庫から出るとそこは壮絶な戦場と化していた。上空では黒いISが2機、戦闘を繰り広げていた。片方は知らないやつ、しかもう1機はとても見覚えがあった。

「く、黒華さん・・・！まさか、来てたのか」

死神こと雨原 黒華が駆るリリーオブバレイが謎のISを追いつめていた。しばしの間それを眺めて、走り出す。どうせここにいるのも邪魔になるだけだ。ヘリに戻って早く報告しよう。

side 黒華

まずここから近い中国の代表候補の援護にいかう。相性が悪いみたいでかなりのダメージを受けているみたいだ。出力を最大にまで上げ、一気に詰め寄って間に割ってはいいる。

「なっ！？し、死神だと！バカな、そんな報告は受けていないぞ！？」

「残念だったわね？悪いけど、この子たちはやらせない」

ハンドカノン『ステイレット』をコールして遮断領域を展開し、牽制。相手は見たところ近接戦型みたいだから近づけなければ何ともなる。しかし一定の距離を保ってステイレットを連射するもダメージはあまりないようだ。

「無駄だ！このグラムの振動装甲にそんな脆弱な攻撃は利かん！」

「あらあら、困ったわねえ」

と試みてみたもののどうせ効かないのなんて予想済み、しっかりと戦略は頭の中にインプットされているから大丈夫。防御力に任せて大剣を振りかざして向かってくる正体不明ちゃん。それを軽く流して動き回る。

「どうした！防戦一方ではジリ貧だぞ？」

「甘いわねえ。いつまでも自分が優位に立っていられると思ってるの？」

「バカが！この状況を見て誰がー！がああっ！！」

相手の動きが止まった瞬間に遮断領域を纏って拳をたたき込む。これぞ必殺デイトーションフィールドアタック。強引にバリアを突破して絶対防御を発動させるというチート技。ってそこ、まんまと言わない！

正体不明ちゃんがひるんだとき、後ろで待機していた代表候補の子が突っ込んでいこうとしたのでそれを制止する。

「早くへりに戻りなさい。今のあなたじゃ足手まといよ」

「大丈夫よ！どこの誰かも知らないヤツに任せられないわ！てかあら、一体何者！？」

「私はさすらいのIS乗り、雨原 黒華よ。とにかくあなたたちの味方だから安心して」

「くっ、無駄話はその辺までにしておけ。ここからは本気だぞ」

「あらあら怒らせちゃったかしら？というわけよ、下がってなさい」
隙なく大剣を構える相手にこちらも身構える。数秒の間、そして瞬時に距離をつめてくる正体不明ちゃん。もちろんその程度の攻撃では当たるわけもなくそのまま相手の行動パターンを読みながら牽

制していく。

横薙にきた刃を360°。ロールで回避し、再度距離をとる。しっかしよく動く機体ね、あんな巨大な剣を振り回してるってのに小回りが利く。後少しノロい機体だったらとづくに終わってるのにな・・・って言うてもしょうがないか、ちゃっちゃとおわして愛しい我が妹の顔でも拝みますか。

「ハアアアア!!」

「全く暑苦しい、乙女ならもう少し慎みを持ちなさい」

最上段からの一撃を紙一重でかわし、上をとる。そしてそこから瞬時加速で一気に加速したうえ重力の恩恵を受けた重たいディストーションフィールドアタックをお見舞いしてやる。モチロンしっかりコアを狙ってね。

ドゴッ!!

超高速で地面に叩きつけられる正体不明ちゃん。手応えはあったけど、ほんとに壊れたかな、コア?ま、壊れてればパイロットは死んでるし壊れてなければ生きてるだろうけど・・・・・私には関係ないことだ。

「さて、次はあっちかしら」

「あ、あんた思い出した!死神」

「おしゃべりしてるヒマはないわよ。すぐにへりへ戻りなさい」

言葉を遮り、私はもう一つの問題の元へと飛ぶのだった。

side 一夏

「まだ終わらないんですか?」

「少し待ってください、まだ装甲の修復が終わってません。それにエネルギー効率の最適化も行ったのでその処理ももう少しかかりま

す。たぶんあと4、5分程度だと思っています」

へりに白奈を運び込み、鈴とセシリアの援護へ向かうためエネルギーの補給を受けていた。しかし思っていた以上に最後に食らった対戦車ライフルとパンツァーファウストが効いたらしく、装甲の修復に手間取っていた。

「しっかしあの黒華が戦闘に参加するなんて、こういう風の吹き回しだ？」

「さあ？私にもわかりかねます。きっとイノベーター関係のなにかがあったのではないでしょうか。案外妹さんの危機に気づいて駆けつけたとか？」

「そりゃあねえよ。あいつはそんな情に流されたりはしないって」

どうやら陸さんと静音さんは黒華さんのことを知っているらしい。しかし驚いた。まさか死神の正体が白奈の姉だったなんて・・・

。つてことはすでに行方不明になって結構たつんだな。そういえば白奈は大丈夫なのだろうか？陸さん曰く睡眠薬の副作用って言うだけだ。

「一夏さん、白式の修復と補給が完了しました。鈴さんの方には黒華さんが回っていますのでセシリアさんの援護に向かってください」

「はい！」

「敵のISは倒さなくていい、とにかく振り切れ。あんまりここにいられるタイムリミットが迫ってる」

「わかりました。行ってきます！！」

へりから出て白式を展開し、セシリアの元へ急ぐ。どうせ短期決戦なんだからエネルギーは温存してもなくてもあんまり変わらないと考え、二段瞬時加速で一気に距離を稼いだ。少し飛ぶと林間部でドンパチやっているのがわかった。

「セシリアッ！」

「い、一夏さん！？なぜここに？」

「自分の仕事が終わったから助けにきた。いいから早く逃げるぞ、時間がないんだ」

「ええっ！でも！」

セシリアと合流し、連れ戻そうと説得を始める。しかしなぜか一向に戻るのをよしとしないようだ。

「あのさーあんたら、逃げる算段はいいけど私に背中見せたら一発でその心臓ブチぬくわよ？」

「そういえばすっかり忘れてた……」

「とにかく、相手も私と同じスナイパーなので引くに引けないのですわ！」

律儀にも俺たちの話を待っていてくれた敵。全身黒い、まるでシユバルツアレーゲンのような雰囲気。左右には一つつつ独立浮遊型のシールドのようなものがある。そして両手には大型の実弾ライフルが2丁、握られている。

「2人がかりで何とかするか……セシリア、後方支援頼む」

「わ、わかりましたわ。でも気をつけてください、かなり強敵ですから」

「お話は終わった？待ってあげたんだから楽しませてよ」

セシリアを下がらせて、俺はヤツと対峙する。肌でピリピリと感じる緊張感、しかしヤツは不敵に口元をつり上げ笑っている。

「さて、君は出来そうだから自己紹介しておくわ。私はエレナ、天使の軍隊所属のIS乗りよ」

「俺は織斑 一夏、IS学園の生徒だ」

一瞬の膠着、そして雪羅の荷電粒子砲が先に火を噴いた。しかしエレナと名乗った女性はそれを紙一重でかわし、直後の隙を狙って大型ライフルを撃ってくる。射撃での戦闘は困難だと判断し、高速で迫りくる弾丸を避けながら雪片で肉薄するもそれは届くことはなかった。

セシリアの援護を受けながらだったはずなのに一向に攻撃が当たらない、それどころか遊ばれているような気がして不愉快極まりない。

「まだまだ甘いわねえ。だからこうやって、やられちゃうわよ」

次の瞬間、白式のウィングスラスターが1機吹き飛んだ。驚き、そこに気を取られていると次は胸のアーマーが爆せた。

「ぐっ……！」

「一夏さんっ！きゃあー！」

「よそ見してるヒマはないよお嬢さん、さあどんどん行くよ！」

そして嵐のように弾丸が飛び交う。ハイパーセンサーを駆使しても追いきれないほどの速度で俺らの体に打ちつけられる。アーマーのほとんどは破損し、エネルギーも徐々に減っていく。

どうやらあの大型ライフルから放たれる弾丸はバリアーを貫通する能力があるらしい。このままではギリ貧、とにかく攻撃から逃れるためセシリアをつれて一気に距離をとる。

「ねえ二人ともー！そろそろ降参しない？こっちにくるなら優遇するけど？」

「はあはあ、誰が、行くか」

「そ、そうですわ……悪の手先になるなんてまっぴらごめんです」

「んもー！頭堅いんだから。いつか、じゃあね」

手を振りあげると傍らに巨大なライフルのようなビットが現れる。くそ、こんなところでやられてたまるかよ！そう考えたとき、目の前の空間が歪みだした。

「なんだ、これ！一体なにが」

「チッ、タイムリミットか」

そしてその歪みの中から知っているヤツが現れた。黒い装甲に身を包んだ銀髪男、レナードだ。

「エレナ、そこまでだよ」

「タイミング悪いです、レナード様」

「それはすまなかった。とにかくもう帰るよ、目的はすんだ」

「はい」

飛び去ろうと背中を向けたところに最後の荷電粒子砲を打ち込むが当然避けられてしまう。この攻撃で落とそうなんて気は毛頭ない、

これはあいつを引き留めるためだ。

「なんのつもりだい織斑君？」

「どうしてこんなことをしたんだ！」

「……この際だからはっきり言っておくよ。この事件は僕らが指示したことじゃない、研究所の独断で実行したことなんだ。だから僕はここを破壊しにきたんだけど……その必要はなかったみたいだね」

「そんなことはどうでもいい！それより、どうして、白奈なんだよ？」

「知りたいか？結構衝撃的なものだけど……いいかい？彼女はね」

「そこまでよ、レナード」

一瞬で現れた黒華さんがレナードの言葉を遮った。さつきと同じ黒いアーマーだが顔の部分のバイザーが解除され、素顔を見えている。

「おや、久しぶりですね黒華さん。お元気でしたか？」

「ええ元気よ。あなたを殺すまではイヤでも元気でいなきゃ」

「そのようですね、さつきも僕の部下を殺ってくれたみたいですし」

「あら死んだの？ヤワよね、あなたの組織のISは」

「言ってくれますね、まあいいですけど。今からやり合いますか？」

僕は一向にかまいませんけど」

「遠慮しておくわ。手負い2人をかばいながらあなたたち2人を相手する自信はないから」

「では帰らせてもらいますよ。行くぞエレナ。じゃあまた、織斑君」
そういい残してあいつ等はどこかへいつてしまった。それから黒華さんとともに浮上していたヘリへ戻り、施設から日本へ向けて出発した。その際に施設を爆破して。

まだ謎はいくつか残るものの、今は疲れた。考えるのは後にして、

寝よう。考えるのはまた明日だ。

side 陸

ついさつき入った連絡で物資回収も襲撃を受けたがつつがなく完了したそうだ。今回はいろんなヤツに迷惑をかけた気がする。せっかく非番だったというのに静音と司はいやな顔1つしないで引き受けてくれたし実沙紀もなんだかんだでまいどまいど面倒事を押しつけちまってる。それになにも関係ないIS学園へも危険が及ぶようなことまで頼んでしまった。

「なに神妙な顔してるのよ？」

「ん？黒華か。別に、何でもないよ。ただ今回の事件、イヤにすんなりと終わつたなってる」

「どうせそれだけじゃないでしょ？他人に迷惑かけたとか考えてるんじゃないの？」

さっきまで寝ていたはずの黒華がいつの間にか隣に座っていた。

こいつとは剣取りし聖者時代からの同僚で今は世界をふらふらを渡り歩いてはイノベーター関係の違法施設や研究所を破壊して回っているレジスタンスの旗頭だそうだ。最近めつきり消息が途絶えていると思つたらここに来る前はアイスランドにいたらしい。どんだけ辺境にいたんだよ、おまえ。

「お見通しつてわけか・・・。でも、まさか連中が白奈を狙ってくるなんてな。どこから情報が漏れたんだか」

「あながち剣取りし聖者からでしょうけど。もしかしたら今後日本、ううん、IS学園周辺で何か大きな事が起きるかもしれないわ」

「・・・イノベーターとしての勘か？」

「半分ね、あと半分は私の推理。早く計画を完成させないとまずいかもね、それにあれはどうなってるの？」

「ん？ああ、もうすぐで中身の修理は完了する。外側はまだわから

ん、修理の目処がたつてないんだ」

「そつか。私はこれから当分、日本にいるつもりだから。何かあったら連絡して」

「はあ、日本じゃお前が出る幕はねえよ。しっかり対策は考えてるから」

「白奈のISはどうするのよ？」

「当分は佐原科技研で使ってる実験機でなんとかしてもらおう。あれがロールアウトするまでは」

「結構先になるわよね、まだアルビオンすらロールアウトしてないんでしょ？」

「いや、アルビオンの稼働データさえあればすぐに出来るところまできてる。後ちよつとなんだ」

とはいったものの、この三光計画はまだ完成まで時間がかかりそうだ。本来だったらランスロットとあと2機がロールアウトした時点で完了のはずだったけど思わぬ副産物とあるものが見つかったせいで大幅に計画を修正しなければいかなかった。おかげで完全に終わるのはきつと12月ごろになるだろうと予測されている。

「完成は白奈のが一番最後に、残響とランスロットが同時にロールアウトだと思う。とりあえず司は今後IS学園に編入、経験とランスロットのデータ収集が主な任務になる」

「そつか。考えてるんだねちゃんと。ふう、眠くなったからそろそろ寝るね」

「おい、まだ話しが・・・って寝るの早っ！」

隣を見たときにはすでにすーすー寝息をたてている黒華の顔があった。まったく、子供かよ……。そっぴいやもう日本時間じゃ3時をすぎてる、俺も眠い。寝るとしよう、明日は報告会が待っている……。

side 白奈

日本に戻ってきて1週間。帰ってきてから3日間はIS学園の医務室に入院、その後検査で以上が認められなかったのやっとな部屋に戻ってこられた。そして今日から新学期。また日常が戻ってくるはずだった。

「――以上で始業式を終了します。えー、ここで新任の先生を紹介いたします。太刀花先生、どうぞ」

かったるい始業式の最後、全生徒の間に衝撃が走った。まあ私はコケたけど……。

「今日からみなさんと一緒に学園生活を送っていくことになりました非常勤講師の太刀花 陸です。この学園ではまだまだ若輩者でなにかと迷惑をかけてしまうかもしれませんが、よろしく願います。担当教科は数学とIS基礎理論、実習の時は教導官もつとめさせていただきます」

（どういうこと？男の人が先生なんて……）

（でも意外とかっこよくない？）

（ルックスだけ良くてもねー、男なんて結局中身よ）

ざわざわ……ざわざわ……ざわざわ……

てな感じに騒がしくなった会場。わかってると思うけど間違ってもギャンブルは始まりません。

「静かに！……ゴホンッ、太刀花先生は政府直属の日本IS部

門関連統括官も努めていらっしゃいます、なので本業の合間を縫ってみなさんの指導にお越しくださるのです。失礼のないよう、気をつけるように」

紹介が終わり、お兄ちゃんと教頭先生は壇から降りて元の場所へ戻っていった。それから理事長のありがたーくかつたるい話の後、生徒たちはHRへと解散していった。

教室へ戻ると一気に騒ぎ始める女子生徒たち。きつと話題の中心にあるのはあの非常勤講師だろう。あいつ、なに考えてんのかな？「静まれ、HRを始めるぞ。さつさと席に着け」

教室前方のドアが開き、黒スーツを纏った鬼が入ってくる。もちろんクラスは静まり、全員が即座に席へ着く。

「おい雨原、今失礼な事考えなかったか？」

「め、滅相もない」

スパンツ！

「誰が鬼だ、誰が」

まさか地の文まで読めるとは・・・ブリュンヒルデ恐るべし・・・！っていうか新学期1発目の出席簿アタックが私だなんて・・・絶対一夏だと思ってた！

「ええっと、みなさんよろしいですか？今日はHRの前に編入生を紹介しますね。どうぞ」

織斑先生の代わりに山田先生が引継ぎ、HRを始めようとする。

というか織斑先生、せめて担任なんだからHRぐらいやったら、ゴホンッ！睨まれたのでこの辺にしておくでしょう。

また前方のドアが開き、1人の男子が入ってきた。ん・・・・・・・・・？男子！？

「みなさん初めまして、といつても3人ほどは面識ありますね。佐原科技研所属テストパイロットの倉澤 司です、今日からみなさんと一緒に勉強することになりました。よろしく願います」

『……だ、男子いゝ!?』

「黙れバカども、HR中だ」

織斑先生の一括で再度静まり返る教室。威圧感はんぱねー……
ってそんなことより、何で司がここににいるの?だってあいつ、自衛
官じゃん!

「それじゃあ倉澤君はあそこに座ってください」

山田先生に促され、司は窓際から2列目の一番後ろ、私の3つ左
隣の席に座る。つーかあいつがISを使えるなんてこと、一言もき
いてないし佐原科技研のテストパイロットは私だし!……
まあ、非公式だけど。

それから夏休みの課題回収と連絡事項の伝達やらで時間は過ぎ、
私たちは昼頃に解放された。とにかくあいつの謎を解明するためど
こかに連れ出さなければ!

「司、ちよつと来い!」

「えっ?ちよー!」

群がる女子生徒を押し退け、全速力で走る。先生に見つかる危険
もあったけど幸い、誰にも見つかることなく外へ出ることに成功し
た。それから人目に付かないような場所へ移動し、司を問いつめる。
「あのさ!何であんたがここにいるのよ!」

「痛いな、強く引つ張りすぎだよ。女の子なんだからもつとやさし
「んなことはどーでもいいのよ!とにかく、何企んでるのか一切合
切ゲロしなさい!」

「女の子なんだからゲロとかいわない。全く相変わらずだね君はー
ーうぐっ!」

「吐かないってーなら締めあげても吐かせるわよ!物理的に!」
あいつが油断している隙に胸ぐらをつかんで軽く首を絞める。ま
ったく予想していなかったのか見事に決まった。

「わ、わかった!わかったから離してくれ!」

「ふんっ!で、何が目的よ?」

「仕事だよ、自衛隊の。あと佐原科技研の新型ISの実践的な実働

データ収集」

「どういう意味？それじゃなおさらあんたがここに来る……………」
はっ！まさかあんたもしかして」

「はいストップ！なに考えてるんだ君は！」

「いやだつて！」

「男にも扱えるISが完成したんだ。大きな声じゃいえないけど新しい技術を盛り込んだ日本のIS開発コンセプトに乗っ取った最新鋭機だ」

「え……………」

「これ、白鉄の代用機だよ。いままで実験機として使われてた兄弟機『黒鉄』」

司がポケットから取り出したのは黒い無骨なブレスレットだった。そっか、白鉄はあいつらに奪われたんだつたっけ。

新しいIS、黒鉄を受け取り装着する。すると司は私に背を向け教室へ戻ろうとする。

「ちよつと、まだ話終わってないけど」

「これ以上は話せないんだ。業務上の守秘義務つてやつ」

「…………そっか、わかった」

司の所属している第4独立機動中隊は非公式だがISを3機保持と実質自衛隊内で最大の戦力を誇っている。お兄ちゃん曰く、部隊の全容が謎に包まれている部分が多く、こついった他言無用の任務を預かる事も珍しくないらしい。

つまり今司が請け負っている任務にも新型ISのテストの裏に何かがあるのだろつ。あんまり触れないほうがいいな。

「…………そういえば、君の身辺警護も任務に含まれているんだつたけ」

「え？今なんて」

「おつと、口が滑つた。それじゃ、俺は戻るから」

「待つてよ！どういう事？」

「…………この間のことがあつたから。正直、俺はぎょつ

としたよ。心配だった、これ以上こんな事は起きてほしくないからね」

それだけを言って、司は行ってしまった。しばらく私は頭が真っ白になって、その場に立ち尽くす。なぜだか顔がものすごく熱い、心臓の鼓動がドクンツドクンツと早鐘を打っている。

（あ、あれ？私、どうしちゃったの？こんなに興奮して……とにかく落ち着け、私！）

深呼吸をして心を落ち着かせようとすると全く効果はなく、ハイになったままの思考で整理をはじめ。

（えっと、あいつは私の身辺警護も任務に入ってて、この間の事は心配してくれて、もう起こらないように……守ってくれるの？……って、なに行ってるの私？あーあー！もうだめだ！頭おかしいぞ私、とにかくクールになれクールになれ！）

「ん？白奈、こんなところで何をしている？」

「きゃあー！」

自分の世界に浸っているといきなり後ろから声をかけられる。全く予想していなかった奇襲に情けない悲鳴が私の口から漏れたのだった。

「な、なんだラウラか……脅かさないでよ」

「む。別に脅かしたつもりはないのだが……どうした何かあったのか？」

「べ、別になんでもないよ！」

不思議そうにしているラウラをみて、私は逃げるように寮へ戻るのだった。

第13話／革新せし者　　後編　　（後書き）

do-mo。ども、約1週間ぶりですね。まあ毎度のことですがさて、これでやつと夏休みが終わって次から2学期編に入っていくわけですが……現実世界はすでに冬に入ろうとしています。

はあ、最近寒くて仕方ありません。体調も崩しぎみなので皆さんも注意してくださいね。

それでは誤字・脱字、感想などがございましたらご連絡いただくと幸いです。

第14話／響け、心の音色（前書き）

どうもこんにちは。少々遅れてしましたが、ごめんなさい

それではどうぞ！

第14話／響け、心の音色

第14話／響け、心の音色！ ハートビート

side 白奈

文化祭が迫ってきたある日の昼下がり、私は独り、学園の廊下を歩いていた。そして手の中には大量の紙、主に部活勧誘のパンフレットやら。そして軽く悩んでたりする。

（はあ、どれもありきたりでつまらないなあ。なんかこう、もっと新鮮なのはないの？）

今私は部活巡りをしているところ。ついさっきは手芸部にいつてきたんだけど・・・結局手先の不器用さは相変わらずだったようだ。それ以前にちまちなんかをするってのが・・・まあとにかく性に合わなかったのだ。

なぜこんなことをしているのか？その発端は昼休みにあった。

「ねえ、みんな部活とか入ってる？」

シャルロットの何気ない一言、その人ことがことの発端となった。

「私はテニス部に入ってますけど」

「アタシはラクロス部」

「知っての通り剣道部だが」

「む、私はまだ所属していないが気になっている所はあるぞ」
「ふーん、じゃあ僕も見学いつてみようかな？ところで白奈は？」
「あー、私は無所属だよ。あんま興味ないから」
「そうだよな。君、何やつても長続きしないから」
「……今なんつった（怒）？」
せつかくのいい雰囲気音が音を立てて、崩れていく。司めえ！
「君は昔っから飽き性ですぐ投げ出すしその割に何でも下手だよな」
「あのさ、いつの話してるんだよ！」
「どうせ変わってないだろ？その性格だと。賭けてもいいよ」
「あー！言ったな言ったな！じゃあなんか部活1ヶ月続けたら高級
デイナー奢ってよね！」
「ああいいよ。どうせ続かないからなに約束したって怖くないって」
「お、おい司、その辺にしとけよ……」
「おーし約束だ！絶対奢らせるからな」
「ふん。どうせ2週間で終わるよ」
「「ううう……ふんっ！」」

そしてそのまま今に至る訳だけど……。今思い出すところは結構無茶な賭けをしたかも……。冷静に考えれば今まで長続きしたことなんて司の言うとおり何一つない。この際だからいっそのこと賭け、やめちゃおうかな？いや、そんなことしたらあいつにもっとバカにされるし……。デイナーもなくなるし……。ううっ、何とかして長続きしそうな部活見つけなきゃ！

とりあえず知り合いのいる部活はパス。というわけでテニス部、ラクロス部、剣道部は消去、っと。ひとまずここから手近な料理部にでもいつてみますか。

放課後、暇を持て余していた俺と司は屋上にある休憩施設でのほぼんと過ごしていた。

「なあ、あんな賭けして本当に平気なのか？」

「大丈夫だよ。昔っから一つのことを執着するってことをしない奴だから、白奈は」

「いやでもあいつも負けず嫌いだからな。まだわかんないぞ？」

「さあね。一週間もすればすぐわかるさ」

「ふーん。あ、そういえばなんでお前ここに来たんだ？」

それを聞くと司は難しそうな顔をして黙ったしまった。何か悪いことでも聞いたかな？

「・・・他言無用だよ、これ一応機密だから」

「あ、ああ」

「第一に、日本製新型ISのテスト。といっても陸さんと佐原科技研が開発した非公式のコンセプト機なんだ。たぶん来週くらいには来るはず。もう一つは白奈の身辺警護。この間みたいなのはもう起きてほしくないから。それで最後に」

真剣な表情で語り始める司。なにやらあんまり聞いてはいいようなことを聞いてしまったようだ。気まずいな。

「この学園に紛れ込んだエンジェルコマンドーの諜報員を見つけ出すこと。この三つだ」

「おい、エンジェルコマンドーの諜報員って・・・どういうことだよ」

「どこからか情報が漏れてるんだ。どこに情報源があるはず、それを考えるとここしかない。俺たちのことを知っているのは理事長と織斑先生、山田先生だけ。ってことはたぶん教師陣のなかにいる。」

もうIS学園の方には手を回したから見つかるのは時間のもん・・・って、なんか暗い話になっちまったな」

「あ、いや。そっぴや白奈はどうしてるかな？」

「さあ？部活巡りでもしてるんじゃない？」

そっぴって司は椅子に座り直し、冷めきったコーヒを一氣に口へ流し込んだのだった。

side 白奈

「あー、それじゃ考えておいてね」

「は、はい。ありがとうございました」

そして扉が閉まると大きめにため息をつく。ついさっき料理部の見学が終わったところだが、やっぱり向かないことがよくわかった。見学内容は一品料理、私の場合厚焼き卵を作るといごく簡単なものだった。しかし完成してみるとどうしても厚焼き卵ではなくスクランブルエッグになっているのだった。

というわけで料理部もパス。そろそろ運動部の方にもいってみようかな？まずは・・・近くの窓からグラウンドを眺めるといくつかの運動部が元氣に動き回っていた。有名どころで言えばサッカー部、ソフトボール部、陸上部など。とはいえやはり女子が大多数を占める学校なので文化部のほうが多いようだ。

うーん、あんまりがつっり動く部活は避けるとして・・・弓道部にも行ってみるか。昇降口で靴をはきかえ、外へ出る。綺麗に手入れされた街路樹の並ぶ道を少し歩くと大きな和風の建物が見えてきた。その周りには袴姿の生徒が何人が集まってはなしてる。

「あの、すみません！部活の見学に来たんですけど、いいですか？」

「あ！見学ですか。じゃあこちらへどうぞ」

部員の方に案内され、道場の中へと入っていく。中ではすでに練習が始まっていて、あたりには弦が弓を叩く音が響きわたっている。「それじゃあ先生がいらっしゃるまでここに座って見学してください」

「はい。ありがとうございます」

そういつて案内してくれた方は行ってしまった。座ってつていうのは、正座の方がいいよね？

というわけで正座して弓を引いている風景を見守る。なんか懐かしいな、昔は結構頑張ってたっけ。実は昔、中学に通っていたころ、といつても1年生のほんの一時期だけど弓道をやっていた。そのころは以外と部活も長続きしてたっけ。

タンツ！

パチパチパチパチ

突如、あたりから拍手が飛び交う。どうやら一番右の的、大前で引いていた人が4本全部中てた、会中したようだ。そしてそれに続き中前、中、落前、落全員が会中する。つまり20射会中という稀なことが目の前で起きたのだ。レベル高いな。

「あ、お疲れさまです！」

『お疲れさまです！』

一人の声につられ、部員みんなが誰かに挨拶をする。先生でもきたのかな？

「先生がいらっしゃったのでこちらへどうぞ」

案内してくれた部員さんの後に続き、顧問の先生のところへ行くとその顔はイヤなくらいに見覚えがあった。

「あ？なんだ、見学者ってお前だったのか」

「・・・なんでここにいるの？」

「そりゃあ顧問だからだよ。教師陣で弓道経験者は俺だけだからな」
さらつと衝撃的なことを言い放つ弓道部顧問太刀花 陸先生。ていうかもろ身内じゃん！

「入部するのか？ウチは来るもの拒まずの精神だから歓迎するぞ」

「あー・・・・・・考えとくわ」

それから30分ほど練習風景を見学し、弓道場を後にした。これで弓道部もパス、何が悲しくて保護者と一緒に部活やらなきゃいけ

ないんだか……。

そしてそれから行く宛もなく、学園の中をさまよい続けるのだった。

side 一夏

用事があるらしい司と分かれ、俺は一人校内をぶらぶらしていた。それにしても今この学園で一体なにが起きているんだ？内通者がいるだなんて……連中の目的が全く見えない。レナードと最初にあった時も訳の分からないことをいつてたしこの間の誘拐事件も白奈がつれて行かれたのはイノベーターの研究施設、つまり白奈にはイノベーターになる素質みたいなのがあるのだろうか？

あの事件の後、陸さんからイノベーターのことについていくつか教えてもらったことがある。イノベーターっていうのは体自体は普通の人間とかわらないけど頭の中身、つまり脳が飛躍的に進化するらしい。顕著な例は人間の脳から発せられる微弱な粒子の波、脳量子波が強くなったりその微弱なものを感じ取れるようになったり、つまり相手の表層心理を読めるようになるそう。ほかにも空間認知能力と呼ばれるある種の才能に目覚めたりとか……発現してみないとわからないことが多いらしい。

現在確認されている純粹種のイノベーターは人。そのうち一人はすでに死亡、そして白奈の姉である黒華さんも純粹種らしい。陸さんの話によると司もイノベーターらしいが投薬により強制的に能力を発現させた人工的なイノベーター、イノベイドだそう。エンジンエルコマンダーが研究しているのはその完成形らしい。

でもイノベーターの能力は遺伝しないものはずなんだけど……
どういうことなんだ？

「あ、あのう……」

あ、そっぴや白奈のISはどうなったんだ？白鉄は連中にもって

かれちまつたけど。

「あのっ……！」

そんなことより今日の夕飯なににしようか？日替わり定……ん？

背後から聞こえた声に振り向くと、そこには背の低い女の子が立っていた。リボンの色からすると2年生だ。

「これ、どうぞ……」

「あ、はい」

渡されたB5くらいの紙。えーっと、軽音楽部部員募集中！音楽に興味がある、カッコイイ音楽をやってみたいなど初心者大歓迎！現在第二音楽室にて活動中、見学もあるよ……か。ふーん軽音楽か、たしかバンドのことだよな。案外白奈、似合うかもな。

「あのこれ……っっていないし」

紙に目を落としていた少しの間、いつの間にか少女はいなくなっていました。あれー？おかしいな、さっきまでいたのに……。まあいいや、もしあったら白奈に教えてやるか。

それにしても雲一つない綺麗な空だ。……学園祭も近いことだし、なにも起きなきゃいいんだけど。

side 白奈

弓道部の見学に行った後、どこにも行かずにのろと動き回っていただけだった。すでに日は傾きかけ、私の陰も長く伸びていた。結局どこの部活に所属するのかさえ決められていない、これじゃあ賭けを始める前に私の負けが決まっちゃうじゃない！

「わきゃっ！」

そう考えながら立ち止まってる背中中に軽い衝撃を感じる。後ろ振り返ってみると小さな女の子が地面に座っていた、そしてその周りには大量の紙がばらまかれている。どうやら私にぶつかって転ん

だよっだ。

「大丈夫ですか？」

「え、あ、は、ははい！大丈夫です！」

よかった。みたところけがはなさそうだ。リボンの色からする2年らしい。散らばった紙と一緒に集め、彼女に渡す。

「そ、その、ありがとう、ございました！」

「いえいえ。ぼーっと突っ立ってた私が悪いんですから。それじゃあ」

「あ！ま、ままま待つてください！これどうじょ！」

立ち去ろうとした時、さっき拾った紙をくれた。どうやら部活紹介のパンフレットのような。内容は軽音楽部部員募集中！ふーん、軽音楽か……。行ってみようかな、時間的にももうすぐこの部活も終わっちゃうしこれで最後だな。

「あのこれって……。あれ？」

いない……。渡された紙に目を落としているほんの少しの間に彼女はどこかに行ってしまった。なんという逃げ足の速さ……。って違う？とりあえず活動場所の第二音楽室に行ってみるか。

校舎に入って階段を上り、普段あんまりこない音楽室の方へ向かっていく。音楽室に近づくにつれ、金管楽器や木管楽器の独特な音色が聞こえてくる。どうやら第一音楽室では吹奏楽部が練習しているらしい。そこを素通りして隣にある第二音楽室の扉を叩いた。

『どうぞー』

扉を開け、中にはいる。部屋はこれといって特徴はなく所々にアンプや楽器台がおかれていていかにも軽音楽部って感じがする。

「パンフレットみて見学に来たんですけど、いいですか？」

「お！やったじゃんみーこ、1人来たよ」

「ふえっ！本当ですか！？」

「さすがみーこ、伊達に部長やつてる訳じゃないね」

「そうですよ部長！この調子でコミュ障なおもしろう！」

『いえーい！』

なぜか全員でハイタッチ。な、何なんだこの妙なノリは……！
「え、えっと」

「さーさーこっちこっち！入部希望でしょ？」

「えーい、いやだから見が」

「はいはい、遠慮しない！さ、座って」

強引に部屋我真ん中に案内される。2年の先輩二人に脇を固められた状態で用意された椅子（い、いつの間に……！）に座らせられ、全員が席に着く。見たところ部員はここにいる4人だけみたいだ。

「んじゃ自己紹介。みーこからね」

「えー！わ、私からですか！？」

「頑張れ部長！」

「わ、わかりました！えと、2年2組出席番号11番賀川 御琴です。みんなからはみーこって呼ばれてます、年は17歳で趣味は音楽です。部長やってます。これからよろしくお願いします！」

パチパチパチパチ

「はい、相変わらずトークスキルは低いね」

「んな！そんなこと言わないでください！」

「そんじゃ次はアタシ。アタシは澤村 柚貴、2年3組18番年齢17歳。ひとまずここ、軽音楽部の副部長をやってるよ、まあ日々コミュ障部長の尻拭いばかりだけどね」

「だ、だからあーそういうことはまだ言っちゃだめですう！」

「はい。じゃ次は私ね。黒崎 知鶴よ、クラスはゆずと同じ3組で13番。ちなみに整備科に進んでるから何かISのことで悩んだら相談してね」

「最後に、井ノ原 結衣です。あだ名はゆーで1年3組3番です。同じ1年同士、これからよろしくね」

「いやだから入るかどうかはまだ」

どうやら彼女たちの中では私が入部する前提で話が進んでいるようだ。どうしようか？ここまで図々しい部活、今までになかったから……話ぶつちぎって帰るのは出来るけど、なんか気分悪いしな。

「じゃ大本命、よろしくね」

「え？私もやるんですか？」

隣に座っている少し制服を着崩した先輩、澤村先輩が私の背中を軽く叩く。

「うん。最初の自己アピールは何事においても基本でしょ？」

「いや基本でしょ、って笑顔で言われても……」

どうしても私に自己紹介をさせたいらしい。仕方ないか、ここで駄々こねてもどうにもなんないしとりあえずやっておくか。

「それじゃあ一応自己紹介を。1年1組所属出席番号2番、雨原白奈です」

『やっぱり！』

「へ？」

いきなり全員がハモって声を上げる。なにがやっぱりなのかが私にはさっぱりわからない、というかそれよりこの部活の妙な一体感のほうが謎だ。

（ほら！私の言った通りじゃないですか）

（まさか本当だなんて、あの雨原 白奈でしょ？）

（でも嘘つく意味がないじゃない、本物でしょ）

（わ、私、初めて生でみました！）

「あのーこそそ話はいいですけど、丸聞こえですよ？というかあのってなんですか、あのって！」

『えっ！？』

まさか聞こえてないだなんて思ってたのか……この至近距離で。一番気になるのがあのってなに？私ってそんなに有名人じゃないはずなのに、どうして？

「えーっと、それはその……」

「なんというかねえ」

「ほら、あれよね？」

「そ、そうですよ！あは、あはは」

全員の目が泳いでる。絶対何か隠してるな、私に知られてはまずいようなことを。そっちがその気ならこっちにだって考えがるんだから！

「それじゃあ私はこれで」

『待つて！』

「なら隠してることを教えてくださいよ、そしたら入部も考えます」
そういうと4人が黙り込んでしまった。そしてしばしの沈黙の後、唯一の一年である井ノ原さんが重い（？）口を開いた。

「わかりました。．．．たぶんこれは口で言うより見せた方が早
いかな？誰か持つてますか？」

「あ、待つてますう！」

え？見せる？持つてる？やつぱり話が見えてこない。一体水面下ではなにが起きているのやら．．．。そして部長の賀川先輩が持つてきた本を受け取った。ん？雨原 白奈写真集？開いて中をばらばら見ると身に覚えのある、普通は写真にとられることのないような写真がいくつか載っている。たとえば、ISの実践授業の後、シヤワールームから出てきた私とか（もちろん局部は隠れてるけど）普通の授業中、必死で眠気と戦つてうとうととしている私とかe t c .
．．．つてこれ明らか盗撮じゃん！

「こ、これは．．．なに．．．？」

「あーその、それは写真部が発行したいいわゆる盗撮写真集だよ。ほら雨原さんって制服、ズボンでしょ？それが一部の発酵気味の女子生徒にウケちゃってアングラで人気が出ちゃてね〜ついにはこんなものまで出てきたんだけどねえ．．．」

「ええ！？私のどこにそっち方面にウケる要素があるんですか！」

「えと、たぶん髪型、そのセミロングともショートともつかない中間の長さがどこかボーイッシュで向こうの方々からは“男装の麗人

”って呼ばれてるらしいですう」

男装って・・・そんなつもりはないんだけどなあ、スカートだとしても動きが阻害されちゃうし結局動きやすさを求めるとズボンが無難なのよね。くっそー、あとで写真部の方に釘刺しとかなきゃ。恥ずかしいったらありやしない。

「さてと、隠してたこと教えたわけだし。入部してくれるよね？」

優しい笑顔でさらっと痛いところをついてくる黒崎先輩、そしてその後ろで力強くうなづく井ノ原さん。それに時計はもう部活の終了時間をとくにすぎている、となれば今まで回った部活の中でどこにはいるかを決めなくちゃいけないわけで・・・仕方ないか。結構たのしそうだし。

「わかりました。とりあえず入部します、初心者ですがよろしくお願ひします」

『こちらこそ！』

この妙な一体感、私にも出るといいな。

第14話／響け、心の音色（後書き）

いやー日常モノって難しいですね。え？私だけ？

先に行っておきます、別にけい○んを意識しているわけではありません！作者はけい○んを全く知らないのです。なぜこんなことを言うのか？それは執筆途中に私の友人に読んでもらったところ「もしかしてけい○んとか知ってる？」と聞かれたので。

とりあえず部活の新キヤラさんたちは主にSSで活躍します！本編への登場はかなり少ないはずですが。なので設定はSSの方に掲載しますのでもろしくお願いします。

それではこの辺りで。感想、誤字・脱字、質問などがございましたらご連絡いただけると幸いです。

第15話／白騎士覚醒、亡霊の影（前書き）

ども、こんばんわ。なんか原作と時系列がずれてきつつありますがその辺はご勘弁くださるとありがたいです。

だらだら書いていたらいつのまにか長くなてしまいました。多分学園祭の話はもうちょっと後になりそうです。

第15話／白騎士覚醒、亡霊の影

第15話／白騎士覚醒、亡霊の影

side 一夏

「でやあああつ!」

耳が痛くなるような鋭く重い金属音を響かせ、俺と鈴は刃を交えて対峙する。

2学期最初の実戦訓練は、1組2組の合同で始まった。

「くっ……!」

「逃がさないわよ、一夏!」

クラス代表同士ということで始まったバトルは、最初こそ俺が押していたものの次第に鈴が巻き返し始めていた。その理由は単純明快、第二形態になった白式の、さらに加速した燃費の悪さである。

「最初にシールドを使いすぎたわね!」

「まだまだあつ!」

そうは言ったもののすでに雪片からは零落白夜の輝きは失われ、普通の物理刀になっている。距離が開けば雪羅による荷電粒子砲で迎撃できるはずだったけどすでにエネルギーは底をついていた。

「無駄よ!この甲龍は燃費と安定性を第一に設計された実戦モデルなんだから!———衝撃砲!」

重厚な音を立てて放たれる不可視の砲弾が近距離で俺を襲い、距離が開く。そしてその瞬間を見逃さないように、鈴が連結状態の双天牙月を投擲してきた。

「ぐうつ！」

迫りくる重たい衝撃を何とか受け流したものの鈴の姿を見失ってしまった。すぐにハイパーセンサーの位置情報補足がやってくるが時すでに遅し。

「たあああつ！！」

いつの間にか真下に回り込んでいた鈴に足首を捕まれ、そのまま力任せに地面へと一気に投げ飛ばされる。眩しい太陽に目を細めてしまい、隙を作ってしまった。

「もらい！」

「！？」

逆さまの格好のまま鈴が衝撃砲を連射、十発ほど直撃をもらったあたりで試合終了を告げるアラームが鳴り響いた。もちろん言うまでもなく、俺の負けで。

＋＋＋＋＋

「これでアタシの二連勝ね。ほれほれ、なんか奢りなさいよ」

「ぐうつ……」

前半戦、後半戦ともに俺の敗北で幕を閉じた実戦訓練。その後かたづけを終えて俺たちはいつもの面々は学食にやってきていた。

俺は鈴の調子に振り回されながらも、負けの悔しさを認めながら昼ご飯を食べる。ちなみにメニューはサバ味噌煮定食。白味噌のこざっぱりとした味とサバの歯ごたえが抜群にいい。うん、今日もあゝIS学園学食のおばちゃんはいいい仕事をしている。

「フフン、この間の借りは返しましたわよ？」

「うぐぐうつ……も、もっとこの子に慣れてたならあんな一方的にはならなかったんだから！」

「んんん？何か言いましたか？」

「うつがー！もうっ、次は負けないんだから！」

どうやらセシリアは白奈に一矢報いたようだ。話を聞くぶんでは最初に刃を交えてからずっとセシリアは負け続けだったらしいが今回やっと勝つたらしい。

とはいえ白奈も愛機だった白鉄を失ったばかりで新しいIS（たしか『黒鉄』だったっけ？）に慣れていない訳だし、白奈が本調子になればまた逆転するんじゃないか？

「一夏さん、今失礼なことお考えになりませんでしたか？」

「ははは、まさか」

口にも出していないのに……なぜバレた？

「ラウラ、それおいしい？」

「ああ。本国以外でここまでうまいシュニッツェルが食べられるとは思わなかった」

相変わらずシャルと仲良しのラウラは、その皿に盛られたドイツ料理のシュニッツェル（子牛のカツレツ）を一切れ切り分ける。

「食べるか？」

「わあ、いいの？」

「うむ」

「じゃあ、いただきます。えへへ、食べてみたかったんだ、これ」
ラウラから分けてもらったシュニッツェルを頬ばって、シャルは幸せそうな顔をする。

「んー！おいしいね、これ。ドイツってお肉料理がどれもおいしくっていいよね」

「ま、まあな。ジャガイモ料理もおすすめだぞ」

自国のことを褒められて嬉しいのか、ラウラの顔は少し赤い。そんな様子を見てると他の女子も加わりなくなったらしく、早速料理談義に花が咲いた。

「あー、ドイツってなにげに美味しいお菓子おいわよね。バウムクーヘンとか。中国にはあんまりああいいうの無いから羨ましいっていえば羨ましいかも」

「そうか、では今度部隊のものにいつてフランクフルタークランツを送ってもらおうでしょう」

えーと、なんだっけ。たしかフランクフルタークランツというのはミルクを混ぜたカラムルで覆われたバターケーキだ。その形は変わっていて、リング状の王冠をしている。しかし、バウムクーヘンもそうだがドイツの菓子職人は真ん中の穴にこだわりがあるんだろうか？

「ドイツのお菓子だと私はあれが好きですわね、ベルリーナー・プファンクーヘン」

そういったのはセシリアだったが、シャルはきょとんして聞き返す。

「えっ。ベルリーナープファンクーヘンって、ジャム入りの揚げパンだよな？しかもバナラの衣が乗ってるからカロリーすごいと思うけど・・・セシリアはアレが好きなの？」

「わ、わたくしはちゃんとカロリー計算をするから大丈夫なのですわ！そう、ベルリーナーを食べるときはその日その他になにも口にしない覚悟で・・・」

そんな武士道か断食修行くらいの覚悟がいるのか。お菓子くらい好きに食おうぜ。・・・っていったらみんな怒るんだろうなあ。

「ジャム入りの揚げパンか、確かにうまそうだな」

さすが篤だ。小学校の給食で一般的な女子が残すであろう揚げパンをしつかり完食してただけのことはある。・・・いったら怒られそうだから黙っていたよう。

「そつえば白奈ってあんまり甘いお菓子食べないよね？」

「あんまり甘いものって得意じゃないから。でも嫌いってわけじゃないよ。うーん、好きなものといえば羊羹かな」

「む、和菓子なら私も好きだぞ。あれこそ風流というものだろう？」

ラウラは夏休み、みんなで行った抹茶カフェで食べた水菓子が異様に気に入ったらしく、その後もちよくちよく足を運んでいるそう

だ。本国の仲間にならなければならぬ、えらく羨ましがられたと同時に生八つ橋を要求されたとか。なんか、ざつくばらんな軍隊だな。

「春は砂糖菓子、夏は水菓子とくれば秋は饅頭だな」

「ほう、冬は？」

「煎餅だ」

「ところで、男子二人はなにが好きなのよ？」

今まで話に参加せず、黙々と聞いていた俺と司に鈴が振ってきた。

「うーん俺は和菓子全般だったけど好きだぞ。司は？」

「あんまり食べないな。強いていうなら金平糖とかかな」

しかし、お菓子の話ばかりしていると食べたくなってくるな。

（でもまあ、そんなお気楽なことばかりいつてられないか）

今考えるべきはISのこと。それも俺の機体である白式のことだ。

「はあ………。それにしてもなんでパワーアップしたのに負けるんだ………」

「だから、燃費悪すぎるのよ。アンタの機体はただでさえシールドエネルギーを削る仕様の武器なのにそれが二つに増えたんだからなおさらでしょ」

「うーん………」

それだけならまだしも、背部ウィングスラスターも大型化に伴いエネルギーを大量に使用するようになってしまった。瞬時加速のチャージ時間は約2/3、最大速度は1.5倍になったとはいえ、あまで大メシ食らいになるとは……。

もちろんそれらはシールドエネルギーを食わないが、荷電粒子砲と同じエネルギー系統なので使い分けをしつかりしないといけない。「エネルギー消費が激しいなら何かの武装とか装備に回すエネルギーをカットしてみたら？」

「え、そんなことしたら戦力ダウンじゃ」

食事を終え、コーヒーを飲んでいた司が珍しく口を挟んできた。

「そうじゃないよ。たとえば零落白夜は刀の刀身くらいの長さがあればいいわけだし零落白夜の盾だって個人戦だったら自分の体を覆

うくらいの大さで十分だろ？用はトータルバランスさ、確かに大きいに越したことはないけどそれが一番の短所になっているならそこを削って調節するのが一番。ま、そのぶんテクニクは今以上に求められるけどね。これって何事にも通ずることだと思うけど」

「ふーん、そんなのがあるのか」

確かにそれは一理あるな。よく考えてみると今の状態じゃ無駄が多い気がする。こんどいろいろといじってみるかな。

「それと、今日の試合みてたけど無駄な動きが多すぎる。まだ慣れてないだろ」

「うっ、それを言わないでくれよ……」

今日の練習試合は専用機を持つている七人で行われたものなのでまだ専用機が届いていない司は訓練機を使って基本動作の確認とが行っていた。せっかく専用機持ちのはずなのにかわいそうと思ったけど司曰く「専用機がくる前にいろいろとできてよかった」とのこと。

（近距離戦闘と遠距離戦闘の即時切り替え。基本戦略の組み立て直し。それに射撃訓練の追加、新装備の経験訓練と……だああっ！やらなきゃいけないことが山積みじゃないか！ヒントが見つかったつつつても最優先は第一形態のときと変わらずエネルギー運用について、か……エネルギー、エネルギーか……どっかに落ちてねえかな。はあ）

「ま、まあ、アレだな！そんな問題も私と組めば解決だな！」

どどん、と腕組みで啖呵を切ったのは箒だった。箒の専用機紅椿の単一仕様能力『絢爛舞踏』は白式の零落白夜とは全くの逆——つまり、最小のエネルギーを増大させるという特性を持つ。それだけではなく、本来難しいはずのIS同士のエネルギー譲渡を接触だけで簡単に行えるという側面もあるらしい。

（そういえば千冬姉も言ってたっけ。本来この白式と紅椿は一对の存在で、両方を同時に運用する事を前提に設計されたとか）

——おそらくそれは、互いの抑止力としての意味合いもある

のだろう。エネルギーを消滅させる白式、反対にエネルギーを増幅させる紅椿、この二つはそれぞれがそれぞれに、『互いを停止させる破壊キー』なのだ。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

「何を難しそうな顔をしているか。お前は私の嫁だろう。故に私と組め」

むに、とラウラに右頬を押される。最近、態度が柔らかくなったのと併せてこんな風に冗談も言えるようになったラウラだが、表情はいつもと同じ仏頂面なのでそれがわかりにくい。

「ざーんねん。一夏はアタシと組むの。幼なじみだし甲龍は近接も中距離もこなすから、白式と相性いいのよ」

「な、なにを勝手な・・・・・・・・！？ゴホンツ！それならこの私、セシリア・オルコットも遠距離型として立候補しますわ。白式の苦手距離をカバーできましたよ？」

「そうかしら？遠・近ともにこなせる私の方がコンビネーションの幅も戦略も広がると思うけど」

「ええい、幼なじみということなら私の方が先だ！それに、なんだ、白式と紅椿は絵になるからな。・・・・・・・・お、お似合いなのだ・・・・・・・・」

最後の方はもごもごしてよく聞こえなかったが、なにやら箒をはじめ、司を除く全員が俺のペアに立候補してきた。・・・・・・・・なぜこんなことに？

「んー・・・・・・・・でもなあ、別に最近ペア参加のトーナメントとかなしいなあ」

「いきなりあるかもしれないでしょうが」

「そのときはーシャルと組むかなあ」

「へっ？僕！？」

急に話を振られて驚いたのか、カルボナーラを食べていた手がぴたりと止まる。それからフォークとスプーンを置き、両手をもじもじと組み合わせながら訊いてきた。

「え、えつと、ど、どうしてかな？」

「前に組んだから」

「あ、そう……」

一秒前まで輝いていた目はぴしりとガラス色になり、シャルは虚ろな視線で食事を再開する。……ど、どうした、一体。

「どうせそんなことだろうと思ってたよ……はあ……」

そんなシャルのため息で口火を切ったかのように、女子が一斉に俺を非難する。

「あんたってひどいわね……」

「女心をなんだと思っているのだ、まったく！」

「一夏さんの唐変木ぶりはときどき許せませんわね」

「さすがにここまでくると怒り通り越して呆れてくるわ……」

「シャルロット、カフェオレをおごつてやろう。だから気を持ち直せ」

「あ、ありがとう、ラウラ、それとみんなも」

感激したらしいシャルは、目を輝かせて全員に微笑み返す。……

……俺はそつぽを向かれたけど。

「なあ司、何か悪いことしたか俺？」

「……今日もいい天気だ……」

素で無視されたー！まさか同姓にまで見捨てられるとは……

・俺は一体何をやったんだ？

『あーテスト、1年1組倉澤 司、今すぐ第二整備室へ来い。もう一度繰り返す、倉澤 司、今すぐ第二整備室まで来い』

突然の放送で呼び出される司、たぶん放送の声は陸さんだな。なにかあったのだろうか？

「ごめん、ちよつと行ってくる」

「おう。またな」

そういつて、食器を片づけて司は学食をでていった。なんだかん

だでこの学園生活もあいつにとっては仕事だからな、俺たちと違っていろいろ大変なんだろうな。

そんなこんなで昼食を終えて俺らは午後の実習へと向けて再度アリーナへ向かった。

+ * * * + * * * +

俺専用（今だけ）となっているロッカールームは、ただただ静かで落ち着かない。司はまだ整備室へ行っているようでこちらにはきていない。授業に遅れても知らないぞ。

俺はISスーツを着ると、白式のコンソールを呼び出して調整をはじめた。

（うーん．．．．．やつぱり雪羅にさいているエネルギーが大きすぎるな。これ、もうちょっと抑えられないもんだろうか？この際だから盾をオフにしてみようか．．．．．いや、やめとこう）

そんなことを考えていると、突然目の前が真っ暗になった。――
――比喻ではなく、マジで。

「！？」

「だーれだ？」

え？えっ？だ、誰だ？背中から聞こえた声は同級生よりも大人びている。そのくせ楽しさがにじみ出しているような笑みを言葉に含んでいて、イタズラを楽しむ子供のようにも聞こえる。

目を塞いでいる指はなんだかささらしていかも少し冷たい。それがひどく心地よくて、俺は数秒間ぼーっとしてしまった。

「はい、時間切れ」

そういつて解放してくれる手の持ち主を確認しようと、俺は振り返る。

「．．．．．誰？」

知らない女子だった。．．．．いや、それだと答えようがないだろう。さっきのやりとりは。

「んふふ」

目の前の女子――あ、リボンの色が二年だ――は困惑する俺を楽しそうな笑顔で眺めつつ、どこから取り出したのかひとつの扇子を口元へと持っていく。

改めて見ると、前の前の二年生は不思議なひとだった。全体的に余裕を感じさせる態度。しかし嫌味ではなく、どこか人を落ち着けるような雰囲気がある。けれどそれは逆に浮かべた笑みはイタズラっぽく、違う意味で俺を落ち着かなくさせる。

つまり、何かされるんじゃないかというおかしい不安。向こう側が見えない不透明性、神秘的――というと褒めすぎだろうか？

「あの、あなたは――」

「あつ」

俺の後ろに視線をずらす二年生。なんだろうと思って俺も後ろに視線をやると――

「引っかかったなあ」

むにと頬を扇子で押される。これで本日二度目。

「．．．．．」

えーっと。

「それじゃあね。君も急がないと織斑先生に怒られるよ」

「え？」

嫌な予感がして壁の時計を見る。．．．．すでに授業開始から三分が過ぎていた。

「だあああ！？や、やばい！まずい！」

もう一度元凶の人物を見るが、そこにはもう、誰もいなかった。

＋＋＋＋＋

「．．．．．遅刻の言い訳は以上か？」

我が姉にして地獄の教師、織斑 千冬。そこに慈悲の心など一片

もない、もちろん弟に対しても。

「いや、あの……ですな？だから、見知らぬ女生徒が――」

「ではその女子の名前を言ってみろ」

「だ、だから！初対面ですってば！」

「ほう。お前は初対面の女子との会話を優先して、授業に遅れたのか」

「ち、違つ――」

しかしそこに俺の言葉が入り込む余地はない。

「デュノア、ラピッド・スイッチの実演をしる。的はその馬鹿者で構わん」

いや、俺が構うんですが！

「……」

一抹の期待を胸にシャルへと視線を送ると、にこつと極上の笑みが帰ってきた。

（そうだな、シャル！そんなひどいことしないよな！）

「それじゃあ織斑先生、実演をはじめます」

「おう」

のわああっ！シャルの笑みはは慈悲の女神のそれではなく、無慈悲な天使のそれだった。

ふわりと空中へ進み出るシャル。その手に光の粒子が集まり、銃器を構成していく。

「あ、あの、シャル……ロツト、さん？」

「なにかな、織斑くん？」

ああああっ、額に怒りマークが見える。な、なぜ！？なぜにお怒りなのか、シャルさんは！

「始めるよ、リヴァイブ」

「ま、待つ――」

俺の叫びは、銃口から響く無慈悲な轟音にかき消されていった。

＋＋＋＋＋

ラピッド・スイッチの実演が終わり、ぼろぼろになった（精神的に）俺は少し休憩をとっていた。あーひどい目にあった、シャルのやつ、何の躊躇いもなく急所狙ってくるんだから……。

授業が始まって10分ちよつと、やつと司が姿を現した。こりゃ俺以上に怒られるだろうな、と思ったら織斑先生と少し会話を交わただけで終わってしまった。どういうことだ？

「織斑、ちよつと来い」

おつと、鬼が呼びだ。のろのろしているとまたとばっちりを食らうぞ。

「何ですか？」

「倉澤の専用機が到着したから動作チェックの相手をしてやれ。それとお前、今失礼なこと考えただろ」

「ははは、ま、まさか」

「ふん、まあいい。とにかく、いろいろと面倒見てやってくれ」

それだけを言つて織斑先生は行ってしまった。あつぶねー、考えていることまで見抜かれたとは……。恐ろしや。……。ロシアの殺し屋？

「ほら、つまんないこと考えてないでさっさと始めよう。時間もあんまりないんだし」

「お、おう」

なんでみんな考えてることがわかるんだ？もしかして顔にでてる？「もう最適化と初期調整は終わってるから。行くよ……。アルビオン！」

そついうと司の体は光に包まれ、一瞬で純白の鎧を纏った姿へと変わっていた。アーマーは白を基調に金で装飾させた豪華な雰囲気

を放っていて、腕や足、腰には赤い宝石（？）がついている。特徴的なのが背中です。今までのISにはなかった妙な出っ張りがついていてその側面に一対の剣と何かがくっついていました。

「じゃあ動きを確認したいからかるーい模擬戦じみたことにつきあってくださいか？」

「そりゃあ構わないけど、いいのか？」

「ああ。でも初っぱなから壊したくないからお手柔らかにお願いしますよ、先輩」

side 司

さてどうするか。白式の性能はカタログと映像でだいたい把握してるけど………実際にやってどうなるか？とりあえずスペースク上ではアルビオンの方が上だけど白式と織斑　一夏のポテンシャルは計り知れない。まずはどれだけの運動性能かを見ないと。

「じゃあ始めるよ」

「どーんと来い！」

――相転移エンジンよりエネルギー供給安定を確認。コアシンクロ率63%、活動安定圏到達確認。高圧縮粒子翼展開可能、全システムオールグリーン、巡航モードへシステムを移行――

背中に意識をうつし、羽を広げるイメージをするとコンデンサー側面に収納されているエナジーウィング基部が開いて深緑の翼が姿を現した。

飛び立つ一夏の背中を追いかけてつ、俺は内心驚きを隠しきれなかった。

（すごい、訓練機とは比べものにならない出力だ。打鉄の2倍、いや最大まで持っていけば3倍くらいの速度がでるんじゃないか？）

しばらく縦横無尽に飛び回る一夏を追いかけていろいろな動きを試してみる。曲がるときはクイックターン、急加速に急減速、とにかく思い通りに動いてくれる。さすがは陸さん自慢のM・S・Sだ。それにいくら急な動きをしても体に負担がかからないっていうか、辛くない。

さて巡航は問題なし、次は戦闘時の動作チェックだ。今こうやってできることが限界ギリギリの状態でしっかりこなせるのかちょっと不安、もちろん陸さんと佐原博士が組んだ機体の性能が信用できないんじゃないかって自分がしっかり制御できるのか。

今の俺をたとえるなら、やっと原チャリに乗れるようになった高校生にモータースポーツモデルの高性能バイクを与えたようなもの。当然またがってゆっくり、まっすぐ進むくらいならできててもフルスロットルでコーナーを攻めたりなどとうてい無理だろう。

そういう意味も込めて一夏には悪いけどアルビオンをどこまで扱えるかの実験台になってもらう。

「一夏、そろそろ戦闘動作のテストに入りたい。相手、頼むよ」

『わかった。手加減した方がいいか？』

「いや、全力できて欲しい。極限状態でどれくらいのパフォーマンスができるか知りたいんだ。結果がつく戦いの前にしっかり把握しておきたいからね」

『そうか。じゃあ……行くぜ！』

直進していた一夏が反転し、雪片を構えてつつこんでくる。俺も近接ブレード『アロンドイト』をコールし、システムを戦闘モードへ移行させた。

side 千冬

上空で一夏と倉澤が戦闘しているのを眺めながら、私は小さくた

め息をついた。ここからみる限りでも一夏の奴はかなり苦戦しているのが手に取るようにわかる。

いくら性能差があるとはいえISにたかが一週間程度しか乗っていない素人にこうまで押されているとは……私の教育が甘かったか？

「織斑先生、どうですか司の様子は？」

「り……太刀花先生、いつから？」

「ついさっきです。いろいろと片づいたので」

いつの間にかアリーナにきていた陸が私の背後に立っていた。いつものような黒スーツではなくグレーのスラックスに白衣という、どこか化学担当の教師みたいな格好をしている。

「うーん最初にしては上出来かな？」

「全く、織斑の奴は再教育が必要そうですね」

「ははは、そう言いなさんな。いくら経験があっても無理でしょ、これは」

「どういう意味ですか？」

さっきからにやにやしっぱなしの陸の横顔を睨み、問いかける。

「勉強させたからな。ここにくる前にいろいろと」

「おい言葉遣いが戻ってる、生徒たちの前だぞ」

「いいっていいって。どうせ誰も聞いちゃいねえさ。まずこっちに来る前に理論的な戦術をたたき込んでこっちで実地研修ができればなって思っただけ。それに機体の性能差がありすぎる、たとえるなら格ゲーだよ。いくら巧いヤツが弱つちいキャラ使ったからってチート地味たキャラを使ったシロートには勝てないってことだ。いくら経験があってもこれだけの差は普通ひっくり返せねえよ。……まあ例外っていうのはあるけどな」

「……後でアレの資料、よこせ」

「へいへい、問題なさそうだから任せるわ。んじやな」

そついい残して陸はアリーナを出てしまった。全く、奴は何しにきたんだ？

シールドエネルギーを示すモニターへ目をやると倉澤が九割近くあるのに対して一夏はすでに三割ほどしか残っていなかった。勝負あったな。

そう思いつつ、再度上空の二人へと視線を戻した。

side 一夏

「ぐっ………！」

俺がターンして戦闘が始まった瞬間、早速直撃打をもらう。理由は簡単、司の動きが異常に速かったから。まるで緑の閃光、あの動きはISじゃねえって！

即座に体勢を建て直し、雪羅の荷電粒子砲で迎撃へ移るもやはり動きが速すぎてロックすることすらままならない。とどまっていたら確実にやられてしまう、とにかく動きをあせて攻撃の隙を伺わなくては！

何度か斬り結んでわかったことだけど、瞬時加速の瞬間最高速度では勝っているみたいだが連続的な動きになれば明らかに機動性、運動性では劣っている。となれば最高速度に乗った状態で一撃離脱、つまり銀の福音戦の時にやった戦い方じゃなきゃダメか。

あの高い運動性能をはじき出しているのはたぶん背中の中。見ているとあの羽の一部が爆発して高い推力を作り出しているのがわかる。たぶんエネルギーの薄い膜なんだろうな、新技術ってやつだな。あの羽を無力化、つまり零落白夜で消滅させれば十分勝機はある。見つけたぞ、突破口！

「うおおおっ！」

「甘い！」

雪片を構え、瞬時加速で正面からつつこむのを司が二本の剣で受け流してねらい通り背後をとる。

「もらった！」

零落白夜を発動させ、刃を羽に突き立てようとした瞬間、突き立てる前に羽が消えて頭上から蹴りが襲ってきた。

「残念だけどやらせないよ！」

「んなバカな!？」

かろうじて防ぎきるも衝撃で地面へと急降下。落下中に蹴り直後の隙を狙って荷電粒子砲で攻撃するも尋常じゃない早さで体勢を立て直して軽々と回避されてしまった。

（くっそー、どうなってるんだ？これじゃあまるで人間と戦ってる気分だ。あんな俊敏な動き、見たことないぜ）

いくら人間が動かししているとはいえISだって機械、どうしても動きがカクカクした機械的になってしまわずなのは司のIS、ー確かアルビオンだっけ？ーからはまるでそれが感じられない。しなやかで表情豊か、まるでISが生きているような動きを見せていた。

「そこっ！隙だらけだぞ！」

「おっと！」

瞬時加速じみた動きで迫ってきた攻撃を回避して再度距離を置く。（にしても一体どれだけエネルギーあるんだ？ずっとあの速度で動いてたらとっくに切れてるはずなのに………絢爛舞踏的な力ラクリか？）

そう、一番不思議なのは司の底なしのエネルギーだった。あれだけのハイパフォーマンスを続けているにも関わらず、全くエネルギー切れの兆候が見えない。少なくとも単一仕様能力は発動しているようには見えないし………どういうことだ？

「隙ありい!!！」

「なっ！」

それは一瞬の出来事だった。司の姿が視界から消えたのだ。

ISは高速で戦闘を行うためどんな機体にも必ず視覚補正機能としてハイパーセンサーが装備されている。知っての通り、意識さえ

すれば全包围を見渡せ、自動で敵機の位置を捕捉してくれたりと機能は多岐にわたる。

つまりどんなに速くて、肉眼で追えなくてもハイパーセンサーが補助してくれる。そう、つまりセンサーの範囲外にいかない限り確実にとらえてくれるのだ。

しかし今司が視界から消えた。ということは――

（ハイパーセンサーがとらえきれないほど速いつてことなのか!? あ、ありえねえだろ!）

「おしまいだ、落ちろ!」

「っ!」

いつの間にか後ろをとられ、高速の二連撃が襲うのを感じて、戦闘終了のブザーがなった。

これで実質三連敗か……辛いぜ……。

side???

アリーナの観覧席、今は誰もいないはずのそこに一夏たちの戦闘を見守る二つの影があった。

「あらあら情けないわね、あんな一方的にやられるなんて。あなたもそう思わない?」

腕組みをして様子を見ていた茶髪の女性がつぶやく。口元にうつすらと笑みを浮かべ、携帯端末をいじりながら斜め後ろに立っている少女に問いかけた。

「そうですか? 織斑 一夏などその程度だと思っていましたが」

「そうねえ。さて情報収集も終わったし、貴女はそろそろ戻ったら? 授業終わっちゃうわよ」

「……連中の新型機についてはどうするおつもりですか?」
さっきの受け答えとは変わり、少しむっとしたような口調で女性

へ言った。

「ん、ちと保留ね。まだ完全にデータは集まった訳じゃないし手元にISがないんじゃない？一瞬で首チョンパされておしまいよ？」

「ですが……！！」

「はい、これについてはお口はミッフィー。あ、それより白奈ちゃんについてはどうなの？」

「雨原 白奈？あの失敗作ですか。あれは脱出の頃合いを見て抹殺します」

「あら？誘拐が目的じゃなかったっけ？」

「殺傷許可は降りています。ご心配なさらず。それでは私は戻ります」

「あらそう、じゃね」

少女は軽く一礼して踵を返し、観覧席から去っていった。残された女性はベンチに座り、今度は白奈のほうへ視線を移した。与えられてまだ1週間ほどの黒鉄の制御に手間取っている姿を眺めながら女性はさらに口元を三日月形に歪める。

「さて、失敗作はどっちかしら？」

小さく、とても小さくつぶやき、うれしそうに金色に輝く瞳を細めながら、しばし白奈の姿を見守るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2950v/>

IS white symphony～インフィニットストラトス 白と白の交響曲～

2011年11月26日23時06分発行